

ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著

『ドイツ昔話集』^{メルヒェン}（一八五七）試訳（その四）

鈴木満訳・注・解題

お断り

編著者ルートヴィヒ・ベヒシュタインに関しては、鈴木満訳・注・解題「ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著『ドイツ昔話集』（一八五七）試訳（その一）」（『人文学会雑誌』第四〇巻第四号、二〇〇九・三月）の「まえがき」をご参照ください。

なお、目下のところ底本としては

ヴァルター・シエルフ^①の注とあとがき付きで、ルートヴィヒ・リヒターの一八七葉の挿絵が入った下記

Ludwig Bechstein: *Sämtliche Märchen*. Wissenschaftliche Buchgesellschaft. Darmstadt 1972.

と共に

ハンス・イエルク・ウター^②編の下記

Ludwig Bechstein: *Märchenbuch*. Nach der Ausgabe von 1857, textkritisch revidiert und durch Register

erschlossen. Herausgegeben von Hans-Jörg Uther. Eugen Diederichs Verlag, München 1997.
をも用いている。

これは *Ludwig Bechstein Märchen* として二巻本。第一巻が DMB (一八五七)。ただし挿絵は一切無い。第二巻は NDMB。「世界の民話」*Die Märchen der Weltliteratur* (略称 MdW) シリーズの一つである。共に簡単ながら、古語、方言などドイツ語圏の一般読者にとって難解な語彙一覧が、収録された昔話番号別に付いている。また、シエルフ注釈テキストには稀ながら存在した誤植が、こちらでは訂正されている。また、MdWの方針に従い、全ての昔話メルヒェンの注中にAT番号とそのタイトル(ATの英語タイトルではなくドイツ語で)が必ず示されている。

ただし、注自体はシエルフ注釈テキストの方がずっと詳細なので、両テキストを相互に補完させるのがよろしかろう。

ちなみに訳文中の「」内、その他の部分の「」内は訳者の補足である。

訳注・解題略記号凡例

- AT アンティ・アールネ／ステイス・トンプソン編著『民話の語型』 Antti Aarne / Stith Thompson: *The Types of the Folktale*. Suomalainen Tiedakatemia. Academia scientiarum Fennica. Helsinki 1964.
- ATU ハンズウィエルク・ウター著『国際的民話の語型』 Hans-Jörg Uther: *The Types of International Folktales*. A Classification and Bibliography. 3 Vols. Academia scientiarum Fennica. Helsinki 2004. ATの増補改訂版。
- BP ヨハンネス・ホルテ／ゲオルク・ポリーフカ編著『KHM注釈』 Herausgegeben von Johannes Bolte / Georg Polivka: *Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm*. 5 Bde. Georg Olms Verlagshandlung. Hildesheim 1963.
- DMB (一八四五) ルートヴィヒ・ヘビシユタイン編著『ドイツ昔話集』 Ludwig Bechstein: *Deutsches Märchenbuch* (1845).
- DMB (一八五七) ルートヴィヒ・ヘビシユタイン編著『ドイツ昔話集』 Ludwig Bechstein: *Deutsches Märchenbuch* (1857).

- D S** グリム兄弟編著『ドイツ伝説集』 Brüder Grimm: *Deutsche Sagen*. 第一卷（一八一六）。第二卷（一八一八）。
- E M** クルト・ランケ創始／ロルフ・ウィルヘルム・ブレードニヒ編『昔話百科事典』 Begründet von Kurt Ranke. Herausgegeben von Rolf Wilhelm Brednich zusammen mit Hermann Bausinger: *Enzyklopädie des Märchens: Handwörterbuch zur historischen und vergleichenden Erzählforschung*. Walter de Gruyter. Berlin [u.a.] 1977.
- H d A** ハンス・スピトルト＝シュトロイブリ編『ドイツ俗信事典』 Herausgegeben von Hans Bächtold-Sträubli: *Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens*. 10 Bde. Walter de Gruyter. Berlin / New York 1987.
- H d M** 『ドイツ昔話便覧』 *Handbuch des deutschen Märchens*. のうち二巻のみが一九四〇年までに刊行された。E Mの前身。
- K H M** グリム兄弟編著『子どもと家庭のための昔話集』 *Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm*. 初版第一部（一八一七）・第二部（一八一五）。決定（第七）版（一八五七）。
- M d W** 「世界の民話」 *Die Märchen der Weltliteratur*. Begründet von Friedrich von der Leyen. Herausgegeben von Kurt Schier und Felix Karlinger. Eugen Diederichs Verlag. Düsseldorf-Köln.
- N D M B** （一八五六） ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著『新ドイツ昔話集』 Ludwig Bechstein: *Neues deutsches Märchenbuch* (1856).
- V d D** ヨーハン・カール・アウグスト・ムゼーウス著『ドイツ人の民話』（一七八二―八六） Johann Karl August Musäus: *Volksmärchen der Deutschen*. 5 Teile.

四二
ゴルデナー
金髪さん

随分昔のことだけど、こんもり茂った森の中に貧しい羊飼いが暮らしていた。森の真ん中に板で拵こしらえたちっぼけな家を建て、そこに妻と六人の子どもたちと住んだもの。子どもたちは皆男の子だった。家の傍には釣つる瓶井戸とささやかなお庭があり、父親が家畜に餌をやるたびに、子どもたちは外へ出て井戸から冷たい水を汲み上げて運び、お昼御飯や晩御飯の飲み物として父親に出してあげもし、

ささやかなお庭からは食べ物になるいろんな物を収穫したりしたんだよ。

一番年下の男の子だが、この子のことを両親は「金髪さんゴルデナー」としか呼ばなかった。なにしろこの子の髪の毛は黄金きんごんみたいだったからね。それから、末っ子だけど、兄弟の中で一番遅おくしくて、一番背が高かった。子ども同士で野原に出掛ける時はいつも、金髪さんが木の枝を持って先頭に立って歩いた。他の子はだれ一人前を歩きたがらなかったんだ。だって、真っ先だと何かおつかないことに出くわすかも知れない、と思ったので。でも、金髪さんが先頭を行くと、皆喜んで行列してそのあとにくっついて歩き、真っ暗い藪の中を通っても、山の端はにもう月が昇る頃になっても平気だった。



ある日の夕方、ぼうずたちは父親が帰るのを楽しみに森の中で遊んでいた。金髪ゴルデナーさんはだれよりも遊びに熱中していたので、夕映えのように顔をほてらせていた。「もう帰ろうや」と長男が言った。「暗くなって来たみたい」。――「ご覧よ、月だ」と次男坊。すると突然暗い樅の樹の間にぽおっと光が射した。月のように輝く女の姿グーゼが苔むした石の一つに腰を下ろし、水晶の紡錘つむみを手にしてきらきら光る糸を夜の中へと紡ぎ出し、金髪坊ゴルデナーやに頷くと、こう歌ったのさ。

「白い花あとり、きん金の薔ばら薇、
海に抱かれた王妃様クニギミ」

女は多分もつと歌い続けたところだろうが、その時糸がぶつ切り切れた。すると、女は光が消えるようにぱつと姿を消した。すっかり夜になっていた。子どもたちはぞおつと総毛そうけ立つような恐怖に襲われ、なんとも哀れな悲鳴を挙げると、巖やら巖の裂け目やらを飛び越えててんでんばらばらの方角へ逃げ出し、お互いの姿を見失ってしまった。まこと何日何夜もの間金髪ゴルデナーさんも深い森の中を彷徨い歩いたが、兄さんたちにはだれ一人に巡り合えなかったし、父さんの小屋にも辿り着けなかった。それどころか人間のいる痕跡だつて見当たらなかった。だつてねえ、森には全く鬱蒼うっそうと樹が生い茂っていたし、山また山、谷また谷の連続だつたんだもの。

そこいらじゆうに這うように木叢こむらとなつてゐる木苺きいちじくが空き腹や咽喉の渴きを鎮めてくれた。でなければ惨めな死に方をしていたところだつたよ。やつとこさ三日目に――ようやく六日目か七日目だつた、という説もあるけど――森は開けて来た。どんどん開けて来たんでね、とうとう金髪ゴルデナーさんは森から美しい緑の草原に抜け出した。

心がいとも軽くなったので少年は暢びやかな大気を思うさま胸一杯に吸い込んだ。

この草原には鳥糞が仕掛けてあった。ここには鳥糞が住んでいて、森から飛んで来る鳥たちを捉まえて町へ売りに行っていたものだから。

「こんなごぞうが丁度欲しかったところだて」。金髪さんの姿を目に留めた鳥糞は考えた。金髪さんは緑の草原の糞の近くに立って、遙かな空の高処に見入り、いくら眺めても見飽きないでいるところだった。

鳥糞りはちよつとおふざけをやらかしてみたくなり、糞をぎゅつと引つ張った。途端にばさつ。金髪さんはとつ捉まってびっくり仰天。何がどうなったのか、さっぱり訳が分からなかったんだもの。「こうやってな、森から出て来た鳥どもをとつ捉まえるのさ」——鳥糞りはげらげら高笑いして言った——「おめえの赤い羽根はわしにやあもつてこいさな。おめえ、ぶちのめされた狐かなんかみてえだの。わしんとこに住み込むがええ。鳥を捉まえる術も教えてやるからよ」。



金髪ゴルデナさんはすぐに弟子入りした。鳥たちに囲まれての暮らしはごくごく愉快に思われたし、ことにまた、父親の小屋を探し当てる望みはすっかり棄てていたことだし。

「さあ、おめえが覚えたことを試してみな」。数日後鳥獲りにこう言われた金髪ゴルデナさんは、絹をぎゅっと引つ張り、最初の猟で純白の花鶏を捉まえた。

「この白い花鶏と一緒にとつと失せろ」と鳥獲りは金切り声を挙げた——「きさま、悪魔と関わりがあるに決まっつる」⁽¹⁾。そう言うなり、金髪ゴルデナさんが差し出した白い花鶏を夥しい呪いの言葉を吐き散らしながら足で踏み躪たって、少年をひどくつつけんどんに草原から追い出した。

金髪ゴルデナさんは鳥獲りの科白セリフの意味がとんと腑ふに落ちず、しょんぼりと歩き出したが、それでも気を取り直し、またしても森の中に戻り、もう一度父親の小屋を探し当てよう、と考えた。昼も夜もごろごろしている岩石や倒れている古い樹の幹やらを乗り越えたり、地面からいたるところで持ち上がっている黒い樹の根つつこに躓つまずいたりを何度も何度も。

でも三日目にはようやくまた森は開けて来たんだ。そして見事な明るい庭園に出たのさ。庭園はこの上もなく愛らしい花ばなで一杯だった。金髪ゴルデナさんはこれほどの花をこれまで見たことがなかったから、うっとりとして立ち尽くした。庭園の庭師は少年にすぐには気付かなかった。——なにしろ金髪ゴルデナさんは向日葵ひまわりの下たなすに竹たけんでおり、その髪の毛がやはりその花の一輪みたくにきらきら輝いていたのね。でも気付くなり「ほほう、丁度こんなござうを手に入れたかっつところだ」と言つて、庭園の門をびしゃりと閉めちゃった。でも、金髪ゴルデナさんは文句を言わなかった。花ばなに囲まれての暮らしはとつても華やかに思えたし、ことにまた、父親の小屋を探し当てる望みはすっかり棄てていたことだしね。

「森へ行ってな」とある朝庭師が金髪ゴルデナーさんに言った。「野育ちの薔薇の木を取って来いや。うちで仕上げた薔薇をそれに接木つぎするでの」。金髪ゴルデナーさんは行って、なんとも綺麗な黄金色こがねの薔薇の木を持って帰って来た。これはまるで最上の腕の黄金細工師きんざいくがどこかの王様の食卓飾りとして鑄たに違いない、と思われるほどだった。「この黄金の薔薇と一緒にとつと失せろ」と庭師は金切り声を挙げた——「きさま、悪魔と関わりがあるに決まってる」⁽¹⁾。そう言うなり、黄金色の薔薇を夥しい呪いの言葉を吐き散らしながら足で踏み躪って、少年をひどくつつけんどんに庭園から追い出した。

金髪ゴルデナーさんは庭師の科白の意味がとんと腑に落ちなかつたが、それでも気を取り直し、またしても森の中に戻り、もう一度父親の小屋を探し当てよう、と考えた。

昼も夜も、樹から樹へ、巖から巖へ歩いたが、三日目にはようやくまた森が開けて来たのさ。どんどん開けて金髪ゴルデナーさんは森から真っ青な海に出たんだ。海は目の前に見渡す限り広がり、折しも太陽が水晶のような水面みなもに映り、溶けて流れる黄金のよう。その上には長い三角の長旗を翩翻へんぱんとひるがえした壮麗に飾られた船が



何隻も浮かんでいた。数人の漁師たちが岸边に寄せられている綺麗な小舟の中にたむろしていたが、^{ゴルデナ}金髪さんはその小舟に乗り込み、うっとりとして麗らかな景色に見入ったのさ。

「おらっちゃん度ごういごうが欲しかったよう」と漁師たちは言うと、途端にさつ。舟を岸から突き放した。^{ゴルデナ}金髪さんは文句は言わなかった。波に浮かんでの暮らしは黄金のように思われたし、ことにまた、父親の小屋を探し当てる望みはすっかり棄てていたことだし。漁師たちは^{とあみ}投網を打ったが、獲物はとんとからつきしだった。「ぬしの運が好いかどうか、一つ試してみようじゃあ」と銀髪の年寄りの漁師が^{ゴルデナ}金髪さんに言った。ぶきつちよな手つきで^{ゴルデナ}金髪さんが網を^{ふかみ}深処に沈めて、引くと、獲れたのは——輝く黄金の冠。

「でかしたじゃあ」と年寄りの漁師は叫ぶと、^{ゴルデナ}金髪さんの足許にひれ伏した。——「てまえ、あなた様をわれらが王様としてお迎えつかまつります。何百年も前のこと、跡継ぎをお持ちにならぬご老齢の王様が、ご臨終のみぎり王冠を海にお沈めになりましたな、どこぞの幸運な御仁が運命の定めで冠をまた深処から引き揚げでもない限り、王様の玉座は継ぐ者のおらぬまま喪に服しておらねばならぬ、とお決めになりましたで」。

「われらが国王、万万歳」と漁師たちは叫び、^{ゴルデナ}金髪さんに冠を被せた。^{ゴルデナ}金髪さんと再び見つけた冠の話は間もなく、船から船へ、そして海から遠く陸地の奥深くまで伝えられて行った。そして黄金色の水面は、花ばなと緑の葉の細工で飾り立てられた華やかな小舟、大船で埋まり、これらは高らかな歓呼の声を挙げて、^{ゴルデナ}金髪坊や王が座乗している舟を迎えたんだ。少年は輝く冠を頭に戴いて、舟の舳に立ち、心静かに太陽が海に姿を消して行くのを見やっていた。夕風に黄金の巻き毛を^{なび}靡かせて。

解題

ユステイーン・ス・ケルナーによる。

この魅力的な物語は、シュヴァーベン出身の医師にして詩人であるユステイーン・ス・ケルナー「Justus Kerner (一七八六—一八六二)」が書いた創作昔話「Kunstmärchen」[金髪さん、ある童話]「Goldener Ein Kindermärchen」をヘビシュタインが採録したものである。ケルナーは一八一一年に執筆、一八二三年五月にテュービンゲンで初めて発表した。(掲載誌「ドイツの詩人の森」Deutscher Dichtervald)。フリードリヒ・ゴットシャルクがこれを「一八二四年『ドイツ人の伝説と民話』(Sagen und Volksmärchen der Deutschen 第一巻)に収録した。ケルナー自身このことを以下のように注釈している。「……おそらくこれの出版者は、この昔話が何か民間伝承か民謡を基にしている」と推量したのだから、実際はそうではない」と。次いでケルナーはその二年後この物語を「流浪の人びと」Die Heimatlosen に挿入した(掲載紙「朝刊」Morgenblatt 一八二二—一八二五号)。シュトゥットガルト。一八一六)。ヘビシュタインはこれを底本とし、僅かながらではあるが変更を施している。高貴な出自の徴としての黄金色の髪なる主題をも考えるべきか。

A T 該当なし。

原題 Goldener.

四三 羊飼いの少年の吉夢

昔むかしとっても貧しい農夫がいて、ちいっぽけな村で羊飼いをやっていた。もう何年も何年も前から。所帯はささやかなもので、おかみさんと一人っ子、それも男の子がいるだけ。でもこの子を農夫はごく早い時期から牧場に一緒に連れて行って、真^まっ当^{とう}な羊飼いがやらなきゃならないことをとつくり教え込んだ。そこで、男の子がいくらか大きくなると、もうすっかり頼りにして、羊の群をこの子独りに任せることができたので、その間ずっと家において、籠^{かご}を編^むんで何枚かの三へラー銅貨^{銅貨}を稼げるようになった。羊飼いの少年は群を追って元気一杯草原や丘の斜面に出掛けて行き、明るい調べの唄を幾つも口笛で吹いたり歌ったりし、合間に牧童の鞭を高らかにびしりと鳴らしたものだ。こうしていると刻^{とき}の経^へつのは遅くはなかった。真昼になると、羊たちの群の傍にのんびり寝そべり、弁当の麩^パ麩^ンを食べ、泉の水を飲み、それから、ちよいとまどろんだりして、そのあとまたおもしろ



く時を過ぎすのだった。ある日の昼休み、羊飼いの少年はある樹の木蔭に横になっていると、寝入ってしまい、なんとも不思議な夢を見た。遠くに旅をしていた。際限もなく遠くへ。——まるでたくさんの貨幣がひっきりなしに地面に落ちていようなちりんちりんという大きな音——ひっきりなしに大砲を撃っているようなどろどろという音——武器を携え、さらさら輝く物の具に身を固めた果てしなく続く軍勢、これらが全て少年の周りを囲み、轟き、どよめいていた。そうやってどどん歩き通し、山をずんずん登って行くと、とうとう頂上に着いたが、そこには玉座が一つ設えられており、少年はそこに腰を下ろした。隣にもう一つ席があつて、美しい女性が突然姿を現し、そこに座つた。と、羊飼いの少年は夢の中ですつくと立ち上がり、厳かに、かつ、いかめしく「余はイスパニア国王なるぞ」と宣言したのだった。だけどその瞬間に目が覚めた。自分の見た奇妙な夢をとつおいつ思い返しながら少年は羊の群を追い続けたが、夕方帰ると戸口の前で柳細工をしている両親に、仕事を手伝いながら不思議な夢の話をした。そしてこう締め括つた。「もう一度おんなじ夢見たら、絶対にさ、おいらイスパニアへ旅して行って、王様になれるかなれないか試してみよう」。——「ばかな子だよ」と父親はぶつぶつ。「王様にしてもらったら、ひとの物笑いにならねえようにするこつたよう」。母親の方はくつくくくと忍び笑いが止まらず、両の手を打ち合わせ、あきれ返つて「イスパニアの王様ねえ、イスパニアの王様ねえ」と何度も何度も言った。——次の日の真昼羊飼いの少年が折しもあの樹の下に寝そべっていると、いやもうなんとも驚いた。またまた同じ夢に取り憑かれたんだ。なんとか夕方まで群の番をしたものの、本当は家へ走って帰って、イスパニアに出立したかった。ようやく群を駆り立てて戻ると、重ねて夢を見たことを報告していわく「もう一度こういう夢を見たら、おいら、すぐに旅に出る、ほんとにすぐにね」。——三日目やっぱり例の樹の下に横になっていると、完全に同じ夢が三度目に訪れた。少年は夢の中ですつくと立ち上がり、「余はイスパニア国王なるぞ」と宣言したのだ。そしてまたもや目が覚めた。でも今度は寝て

いた場所から帽子と鞭と麴麩（パン）の小袋を掴み上げ、羊の群を追いつめ、まっすぐ村へと向かった。村人たちは、こんなに早く、晩課（ヴェスパー）の刻限（リミット）のこんなにも前に、羊を小屋へ入れに来たのを叱りに掛かったが、少年は頭に血が昇りつばなして、近所の衆や両親の小言などに耳も貸さず、日曜の晴れ着にしている僅かの衣類を包んで結ぶと、胡桃（クルミ）の樹で拵（しじょう）えた杖に吊るして肩に担ぎ、委細かまわず旅に出た。少年の足取りはとても速かった。まるで夜にならないうちにイスパニアの地に到着してなきや、とでもいうようにとっとと歩いたもの。でもこの日やとと辿り着いたのはとある森で、村もなければ一軒家もなかった。そこで、この森のどこかこんもり茂った木叢（こもぢ）の中にでも夜の宿りを探そう、と決心した。けれども、体を横たえ、とろとろまどろもうとした途端、なにやら物音が聞こえて、また目を覚ました。一団の男たちがががやがやしやべりながら少年が泊まることにした茂みの傍を通り過ぎて行くところだったのだ。少年は静かにそこを出て、ほんのちよつとの距離を置いて男たちの跡を跟けた。もしかしたら、これから寝場所が見つかるかも知れない、この連中が今日眠るところに、きつとこつちも眠れるぞ、と考えたのだ。——さほど歩かないうちに、かなり立派な家に行く手に現われた。暗い森の真っ只中だったけど。男たちが扉を叩くと、それが開いた。そこで羊飼いの少年は男たちに紛れてそつと家の中に忍び込んだ。中に入ると、また扉が一つ開き、一同は大きな、ろくすつぼ明かりのない部屋に足を踏み入れた。その部屋の床には一面にたくさんの藁束（わら）や寝台や掛け布団が置いてあり、男たちの寝場所としてあらかじめ準備されていたようだった。羊飼いの少年は急いで部屋の出入り口近くに積み上げたあった藁の山の下に潜り込み、その隠れ処（かくれどころ）から見聴きできる限りのことを悉く窺うことにした。間もなく突き止めたのは——なにしろもともとこの子は利口で気が利いていたから——この男たちの同勢は盗賊団で、この家の主（あるじ）がその首領だということ。首領は、新たに到着した一味徒党がずらりと寝そべると、いくらか高い席に上り、深沈たる低い声音（こゝろね）でこう言った。「勇ましい身内の衆よ、おぬしらが今日やった仕事について申し立ててくれい。どこに

参上つかまつって、何を頂戴いたしたかをなあ」。するとまず墨のように黒い髯を生やしたのっぼの男がつと立ち上がり、こう答えた。「お頭かしら、わしはな、今朝早くに金持ちの貴族から革の洋袴スボンを取り上げましたで。これにや二つ衣囊ポケットがあつて、それを引っくり返して存分に揺すぶりますとな、そのたんびにドゥカーテン金貨18がちよいと一山落つちちるんでがす」。——「こりや全く痛快な話よ」と首領。男たちの一人が進み出て、こう報告。「おれは今日どこぞの將軍から三角帽19を盗みました。この帽子にやあこんな効能がありますのさ。頭の上でぐるりと廻しやあ、三つの角かどからひっきりなしに大砲をどかんどかんとぶつ放すつちゅうわけ。——「こいつは一番聴きものだて」とまた首領。三人目が体を起こしていわく「あつしやあね、どっかの騎士から佩おびていた剣を召し上げやした。この剣の先っちょを地面に突つ込むつてえと、即座に兵隊が一個連隊20できるんでやす」。——「大胆不敵な遣り口ぞ」と首領は褒め讃えた。今度は四人目の強盜が起き上がつて口を切つた。「おら、眠つてる旅人むしじんから履いてる長靴を脱がして来ただ。この長靴を履くと、一足動かすたんびに七哩行マイルつちまうだで」。——「すばしこく上手に立ち回つたなあ」と首領は上上のご機嫌でのたまう。「おぬしらの獲物を壁にぶら下げておけ。そうして喰つて、飲んで、ぐっすり眠るがいいわい」。そう挨拶するなり首領は盜賊どもの寝部屋をあとにした。連中はそれから大いに飲みかつ喰い、やがてぐっすり寝込んだ。辺りがしんと静まり返り、男どもがどいつもこいつもぐうすか眠つてしまうと、羊飼いの少年は出て行つて、革の洋袴スボンを履き、帽子を被り、剣帯を腰に巻いて剣を下げ、長靴に足を突つ込み、こっそり家を忍び出した。外へ出ると嬉しいことに長靴は早くも靈験れいげんを顕あらわし、ほどもなくこのこぞうつ子、イスパニアの大きな都に足を踏み入れていた。してしてその名はマドリード。⁽²²⁾

行き当たりばつたりの男に、一番大きな旅館はどこか、と訊くと、貰つたのは「ちびすけ、おまえら風情ふぜいが泊まるどころへ行きな、金持ちの旦那衆がご馳走を召し上がるところじゃなくつてよ」という返辞。でも、ぴかぴかの金貨



を一枚やると、相手はすぐさま鄭重になり、羊飼いの少年の案内役を買って出て、最上の旅館を教えてくれた。そこに到着すると、若者はすぐに一番立派な部屋を幾つか借り受け、愛想よく宿の亭主に訊ねた。「さて、あなたがたの町はどんな具合ですかね。こちらにや耳新しいことがありますか」と。亭主はしょぼくれた顔をして、こう答えた。「小さい旦那様、どうやらこの国には不案内でいらつしやる。ご様子じゃあ、わしらの王様が、国王陛下が、二万の軍勢を動員なすつたことをお聞きになっていらつしやしません。そら、わしらにや敵がありますんで。いやあ、なんともひどいご時世でさあね。小さい旦那様、あなた様も軍に志願なさるおつもりですか」。――「もとより、もとより」。幼げな若者はこう言つて嬉しさに顔を輝かせた。亭主が退くと、早速履いていた革の洋袴ズボンを脱ぎ、金貨を

一山振り出すと、高価な衣装と武器、それから装身具を購入、これらを皆身に着けると、国王に謁見を請願した。王城に入り、二人の侍従に付き添われて壮麗な大広間を通り抜けると、素晴らしく愛らしい若い貴婦人が出迎え、侍従たちの真ん中で上品に一揖いちゆうしたこの器量好しの青年に優雅に会釈を返した。侍従たちは「国王陛下の姫宮でいらせられます」と囁いた。青年は王女の麗しさに少なからず魂を奪われたが、このように恍惚こうつうとし夢中になっていたお蔭で国王の御前に出ても怯おそめず臆おそさず話すことができた。いわく「国王陛下。畏おそれながらそれがし、軍人としてご奉公つかまつりたく、伏してお願いたします。陛下の御ために引き連れてまいりましたそれがしの軍勢に勝利を贏かちえさせ、わが国王が、征服せよ、とお申しつけあそばすものは悉く

征服させる所存。さりながら、勝鬨かちどぎを挙げましたる暁には、そのご恩賞として、麗しのご息女をそれがしが妻とすることをお許しくださいますよう請願つかまつります。いとも優渥ゆうわくなる国王陛下、さよう御意ごいあそばしまするや」。王は若者のこうした大胆不敵な申し出に驚いたが、こう言った。「よろしい、そなたの要求を聞き入れようぞ。そなたが凱旋がいせんいたした暁あかつきには、余はそなたを跡継ぎと定め、姫を妻として与えよう」。

さて、元羊飼いは独りつきりで広びろとした野原に出て行き、佩びた剣を地面に突き刺しては抜き、突き刺しては抜きすると、ものの数分で数千人の戦仕度を調えた兵つわものらがその場に並んだ。そして若者は総大将として豪華な物の具に身を固め、絢爛げんらんたる装身具を着け、黄金の縫い取りを施した馬衣うまぎぬを掛けた見事な駒にうちまたがった。馬勒ばうくは数数の寶石できらめいている。こうしてうら若い軍司令官は出征して敵と対峙たいじした。血みどろの大会戦があった。総大将が被かぶった帽子からはひっきりなしに必殺の砲撃が轟き、その剣は次から次へと連隊また連隊を地中から生み出したので、何時間も経たぬうちに敵軍は撃破されて散り散りばらばらに潰走かいそう、勝利の旗がたなびいた。しかし勝者は敵を追跡して行き、更に相手の領土の最良の部分奪取した。それから勝利と栄光に満ち満ちて、一番素晴らしい幸運が待ち構えているイスパニアに帰還した。美しい王女は大広間で再会した粹いきな若者に一方ならず魅惑されたが、こちらも同様。そしていとも優渥なる国王は勇猛な若武者の天晴れな功名手柄をしかるべく讃え、約束通り青年に息女を妻として与えると、自らの跡継ぎにして王位継承者なるぞ、と定めた。

華燭かしよくの典がいともきらびやかに執り行われ、元羊飼いは至福に包まれた。婚儀の後間もなく老王は王冠と王笏しやくを婿殿の手に渡した。こちらは誇らかに玉座に座り、その隣には愛らしい妻が控えた。そして新王に臣民から忠誠の誓いが捧げられたのだ。すると若者はかくも素晴らしく成就した夢のことを思い起こし、また、自分の貧しい両親のことを思い起こし、再び夫婦水入らずになると、妻に向かってこう言った。「いとしいひと、わたしには両親がいる。

されど至極貧しい。父は村の羊飼いでここから遠方に住んでいる。わたし自身は子どもの時家畜の番をしていたのだ。不思議な夢によって、わたしがやがてイスパニアの王になる、と告げられるまでな。して運命はわたしをいとおしんでくれた。ほら、わたしは今国王なのだからね。しかしわたしの両親が幸せになるのもぜひ見たい。それゆえ、そなたが許したもるのだが、家に戻って両親を連れてまいりたいのだ」。王妃は喜んで同意、背の君を出立させた。若者はとても速く旅をした。なにしろ七哩靴を履いていたからね。途中若い王は盗賊どもから取り上げた奇蹟の道具を正当な持ち主に返してやった。ただし長靴は別で、嬉しさのあまり茫然とした両親を連れ帰ると、長靴の持ち主にはその代償に公爵領を下賜した。さてそれからというものは、イスパニアの王様として生涯幸せに、かつ堂堂と暮らしましたとさ。

解題

フランケン地方の口承。

主人公が強盗どもの巢窟で手に入れた四つの呪宝はドイツ民衆本でお馴染みの「フォルトゥナートゥスの息子たち」——AT五六六「三つの呪宝と不思議な果実」The Three Magic Objects and the Wonderful Fruits (Fortunatus) ——に登場するたぐいのもの。この種の呪宝をモチーフとした昔話はAT五一八「悪魔（巨人）との呪宝争奪」Devils (Giants) Fight over Magic Objects）型やAT五六三「テーブルと驢馬と棍棒」The Table, the Ass, and the Stick）型などがある。卑賤の身から王となった主人公がその出自をあらさまに王妃に打ち明け、それを聞いた王妃も、これは不釣り合いな結婚だわ、と嘆きもしない点、主人公が呪具を正当な持ち主に返却したり、しかるべき対価を支払って合法的に我が物にしたりする点は、堅実な中産市民階層の感覚であり、かつまた教育的であって、かつての庶民の感覚や世間知とは相容れないようだ。なお、将来高い身分になるだろうとの予言の夢を主題とする昔話や説話はさまざまに地域に存在する。

AT七二五「夢」The Dream + AT五六九「背囊と帽子と角笛」The Knapsack, the Hat, and the Horn。

原題 *Des kleinen Hirten Glückstrahl.*

四四 王の大聖堂

昔むかしある国王が神の栄光を讃えるために壮麗な大聖堂を建立こんりゅうすることにしたが、この建築けんちくに何人なんびとも一へラー(25)たりといえども喜捨するべからず、余はこれを独自の財貨にて建立する所存なり、との厳しい勅命を布告した。そのように執り行われ、大聖堂が完成した。美しくもまた堂堂と、善美を尽くして。そして王は大きな大理石の板を作らせ、この板に黄金きん文字で、余すなわち国王は、独力にてこの大聖堂を建立、何人もこれに喜捨いたさず、との碑銘を刻ませた。しかしこの石板が一日一夜掲げられると、夜の間に碑銘が変じ、王の名の代わりに別の名、それもある貧しい女の名が記されていた。そこで、この女が壮麗な大聖堂を全て建立したかのごとくに思われた。王はこれに震怒しんど。その名前を削り落し、再び自分の名を書き込むように命じた。しかし一夜明けるとまたかの貧しい女の名が石板にあった。で、だれもが、この女こそ大聖堂の創立者だ、と読んだわけ。三度王の名が石板に書かれたが、三度それは消え、女の名が出現した。そこで、神の御手みでがここで動いていることに気付いた王は謙虚になり、その女を捜し出させ、ぜひ参内するように、と伝えさせた。惧れおそ慄のき、かつ仰天して女が御前に来ると、王はこう言った。「女、不思議なことどもが出来しゅたひしておる。神懸けて、また、命に懸けて真実を申せ。そちは、何人も大聖堂のために喜捨



してはならぬ、という余の勅命を聞いておらなかつたのか。それとも、やはり喜捨したのか」。

女は王の前にひれ伏して言った。「ご仁慈をお恵みくださいまし、国王陛下。私はなにもかも申し上げてご仁慈にお任せいたします。私はまことに貧しい女、糸紡ぎをいたしまして、飢え死にをばつかまつらぬようかつがつ暮らしを立てております。それでも一ヘラー残りました。これを神様の栄光のため王様の聖堂ご建立に捧げたい、と存じましたのですが、でも、おお、陛下、ご禁令とご嚴罰を憚りまして、その銅貨一枚で干し草の小さな束を^{あがな}買い、ご建立の大聖堂のための石材を牽^ひいてまいる牝牛たち^{はまか}にやろうと道に撒^まいたのでございます。すると牛たちは食べてくれました。かように私は思い通りにいたし、また、ご命令に背きもいたさなだったのでございます」。

王は女の話にひどく打たれ、主なる神が女の清い気持ちを嘉^よし、王の豊かな財宝よりも高い犠牲を払^らったとしてそれを受納^{うけ}なされたことを知った。そこで王はこの貧しい女にたっぷり被^かけ物を与え、己^{おの}が虚栄の罰を深く心に刻んだのだった。

解題

ラスベルク男爵ヨーゼフ（一七七〇—一八五五）編『歌の広間——古きドイツの詩集成』Joseph Freiherr v. Labberg: *Liedersaal, das ist Sammlung altdiescher Gedichte*, 4 Bde., 1820-25, Bd. II. による。すなわち、古きドイツの韻文物語が材源。

仏典の説話から出た諺「貧者の一灯」（貧しい生活の中から供養する一灯は、富んだ者の万灯にもまさった功德があること）を思い起こさせる。国王が仏に献じた万灯は風に消えたり、油が尽きて無くなってしまうが、一人の貧しい老婆が献じた一灯はいつまでも消えなかった、という説話が『阿闍世王受決経』にある。

A T 該当なし。

原題 *Des Königs Munster*.

四五 魔女と王様の子どもたち

ある森の真ん中に年取った邪な魔女が自分の娘とたった二人つきりで住んでいた。娘の方は気立ての好い、優しい子だった。この子の場合、「林檎は幹から遠くにや落ちぬ」⁽²⁷⁾「蛙の子は蛙」という諺は当て嵌まらなかったわけ。この幹と来たら瘤こぶだらけの棘だらけで醜かった。婆様を見掛けた者は道を避け、「触らぬ神に祟りなし」と考えたもの。婆様はしょっちゅう緑の色眼鏡を掛け、櫛も入れずに頭から長ながと下へ垂らしているもじやもじや髪には赤い布切れを被せ、よく短い袖で歩いたので、瘡せつこけた渋紙色の両腕がだぶだぶの衣装からによつきり突き出していた。大体いつも、森で集めた魔法の草を詰めた袋を背中に担ぎ、片手に大きな壺を持っていたが、この中に入っているのは魔法の草の煎じ汁で、これを使って、いつでも好きな時に、嵐、雹、霰、霜、寒気を招き寄せるのだった。指に嵌めているのは火のように赤い石榴石のくつついてある黄金の魔女の指環。これでもって人間や動物に魔法を掛けることができた。この指環のお蔭で婆様は巨人のように強く、力持ちになれたし、そうしたければ全く姿を見えなくすることも。だから、行きたいところへどこへでも行けたし、欲しいものを手に入れられた——実際そうもしたわけ。森で牝の角鹿たちを捜し当て、動物たちがこの指環を目にし、石がきらめくのを見ると、その場に呪縛されて動けなくなってしまう。すると婆様は牝鹿たちに近づき、その乳を壺に搾り入れ、娘と二人で飲むのだった。この娘はケートヒエンという名で、性悪な母親の許での暮らしは幸せではなかったが、辛抱強くあらゆる苦しみを耐え忍んでいた。この子にとって一番胸が痛むことは、母親がたびたびどこかの子どもたちを連れて来ることだった。本当はどんなにか一緒に遊んでやりたかったことか。でも、婆様はいつも子どもたちが着ている物を脱がせ、監禁し、肥え太るように鹿の乳で養うのだった。それから何をこの子どもたちにするかという、語るのも身の毛がよだつ。つ

まり、子どもたちを仔鹿の姿に変えてしまい、狐師連に売り飛ばすので。狐師たちの方は変身させられ売られた可哀そうな仔鹿を撃ち殺し、町へ運んで行く。町の人人はこの若い狐獣肉をご満悦で食べたもの。この醜い婆様はこんな風に邪で性悪だったが、日がな一日魔法を使ったり悪企みを考えたりで、そうした時にしばしば、また、たくさん大きな声で呪文を唱えたから、娘のケートヒェンは気づかれずに幾つかのちよつとした魔術を覚え込み、それをごくごく秘密にしておいた。

そうしたある晩のこと、婆様はまたしても二人のいやもうなんとも綺麗な子どもたちを案内して来た。男の子と女の子で、見れば、兄妹きょうだいで、それも豊かな家の子だった。二人とも森の中で迷っているところを婆様に見つかり、ここへ連れて来られたもので、婆様は、あたしがご両親のところに連れてつてあげようねえ、と言ったわけ。着ていた見事な衣装を婆様が剥ぎ取り、代わりに襤褸ぼろを纏まとわせ、



暗い小部屋に閉じ込めたので、騙されたんだ、とこの子たちは悟ったのだが。もつとも、壺になみなみ一杯の鹿の乳——これはとつても美味しかった——と一切れの黒麴麩——これはそれほど美味しくなかったけれど、結局やっぱり平らげた——を御飯にもらいはした。

翌朝婆様は朝早くからもうよたよた森へ出掛け、牝鹿たちを手招きした。魔女が特によく知っていて、こりゃいい、と思っている牡角鹿の一家があつて、鹿の殿様と鹿の奥方と二匹の仔鹿の和子たちは仲睦まじくしょっちゅう森で一緒にいたが、この一家、性悪な婆様がいつも怖くてならなかった。なにせ、一家は全員身動きできなくされ、性悪な魔女に母乳を奪われ、そのため、仔鹿たちはたつぷり吞めたためしはなく、肥え太ることができなかったのだからね。それがしのこの枝角を婆様の瘡せつこけた体にぐっさり刺すことができればなあ、と牡鹿はよく考えたし、牝鹿も婆様に幸多かれなんて祈りっこなかった——でも鹿の夫婦の願いはどれもこれも何の役にも立たなかった。婆様が森に行っている間に、ケートヒエンは例の小部屋に忍び寄り、扉の隙間から囚われの哀れな子どもたちを覗いた。子どもたちはひどく心を痛めて溜息をついたり泣いたりしていた。そこでケートヒエンは訊いてみた。「あなたたちは一体だあれ、気の毒にねえ。」——「ぼくたちはある国の王様の子たちなの。ああ、自由にして頂戴。ぼくのお父様がお礼をしてくださるから」——そう王子が言った。「そしてわたしのお母様もね」——そう小さな王女が言った。それからこうも付け加えた。「あなた、わたしたちのお姉様にもなつてよね、わたしのお部屋の絹の寝台で眠つてよね、それからわたし、あなたにとつてもすてきな黄金の縫い取りした服をあげるわ、わたしたちを助けて、どうか助けて。」——ケートヒエン「ちよつと辛抱してよね、可愛い王様の子どもたち。わたし、きつとやってみせる。救い出す手を見つけるわ」。

翌朝、まだ夜の明けやらぬ時刻、気立ての好いケートヒエンは魔法を使った。急いで寝床を出ると、それに息を吹

き掛けて低声こごえでこう唱えた。

「可愛いちいちゃな寝台さん、わたしの代わりにしゃべってね、わたしが行ってしまったら、わたしの代わりにわたしになって」。

それから自分の衣装櫃びつこにも、階段にも、台所の竈かまどにも息を吹き掛け、おなじ呪文を唱えた。こうやってから王様の子どもたちが囚われている嚴重に閉ざされた小部屋こまどに行き、開錠シュプリング・ツルツエル根35——これはかねて婆様が容器棚コンテナーに置いておいたのだが——を錠に当てて、こう唱えた。

「門カムキ、門、門ちゃん、開いて、出入りをさせとくれ」。

すると錠も門もたちどころにがちゃんと開いたので、ケートヒエンはすぐさま王様の子どもたちを連れ出し、森へ逃げ込んだ。

婆様は目を覚ますと、娘に声を掛けた。「ケートヒエン、起きて火を熾おこしな。——すると寝台から返辞カウツがあった。

「わたし、とつくに起きてるわ、すぐお台所へ下りてきます」。

そこで婆様は横になったままでいたが、しばらく経っても何も物音が聞こえなかったので、また叫んだ。「ケートヒエン。一体どこにいるんだい、この怠け者。——「すぐによ、すぐに」と衣装櫃から返辞があった。

「わたしは櫃に腰掛けて、
靴下留めを結んでいるの」。

こうしてしばらく時間が経ったが、家の中では何も動かない。そこで婆様は腹を立て、「ケートヒエン、このあまつちよ。一体どこにいるんだい」と金切り声を挙げた。すると階段から声が響いて来たんだよ。

「すぐに行きます、飛んでくわ。

もう、ちゃんと階段にいますもの」。

婆様はもう一度安心した——けれどもそれからほんとに随分経ったが、またしてもしいんとしたまま。そこで体を起こしてがみがみ叱り、があがあ罵った。すると竈の方から応えが来た。

「なんでそんなに悪態をつくの、

お台所の竈の傍に、わたし、とつくに來てるのよ」。



さはさりながら台所も家全体も死んだようにひっそりかんと静まり返ったまんまだった。とうとう婆様は完全に堪忍袋の緒が切れて、寝台から飛び出し、急いで着物を着込むと、ケートヒエンを情容赦もなくぶちのめしてやろう、と箒の柄をおっ取った。しかし、部屋から出てみると、ケートヒエンはどこにもおらず、姿も見えず、声も聞こえぬ。そしてなんともけっこうなことに、婆様にとってはなんともけしからぬことに、王様の子どもたちも消えてなくなっていた。さあ、それを知った時かんかんに腹を立てた性悪婆様がやらかした魔女の跳躍^⑧をきみたちに見せたかったなあ。魔法の指環は、王様の子どもたちを連れて逃げたケートヒエンの行方を教えたので、婆様は怒り狂って三人の跡

を追ってまっしぐら。森に入った子どもたち三人はというと、そこで奥方、若様、姫御とご一緒の殿様角鹿^⑨にばったり出くわし、大急ぎで自分たちの災難と逃げ出したことを物語り、相手方の高貴な心を大いに揺さぶったので、鹿たちは、できる限りのことをして助けようと心意気を見せた。優しい鹿の奥方は、三人とも乗せて森の彼方の王城まで運んであげましょう、と子どもたちに背中を提供してくれた。殿様は和子の仔鹿たちに、木叢^⑩の奥へ戻るよう指図し、自分自身は道端のこんもり茂った葉蔭に潜んで、婆様が傍を走り過ぎたら、指環を目にしないよう用心して、跳び掛かって突き倒そうと構えた。

実際のところ間もなく婆様が全速力ですっ飛んで来た。かんかんに腹を立てていたものだから、己の姿が見えないようにするのをすっかり忘れ、指環を嵌めた指を高く掲げもせずにはいたが、突然大きな、堂堂たる鹿の枝角がその体と甚だ複雑に纏れ合い、その際枝角の一本が激しく婆様のその指を掠めたので、魔法の指環が指から外れ、その枝角に嵌まり込んだ。そこで牡角鹿はあつと言う間に婆様魔女——指環の魔力でちんこちんに身動きできなくなってしまっていた——を角に引つ掛けたまま、置く露繁き草の上に優しい牝鹿の奥方が残した足跡を追って疾駆して行った。奥方の牝鹿の方はその間にもう王城に到着、迷子になっていた子どもたちと二人を救った好い子のケートヒエンは大喜びの王様と王妃様に迎えられていた。——その時一同は、例の婆様が突然堂堂とした殿様角鹿の枝角にぶらぶらと引つ掛けられて運ばれて来たのを見てびっくり仰天した。でも牡角鹿はためらうことなくお城の池にどぶんと跳び込み、頭ごと水に潜った。そしてまた浮かび上がると、角の重荷はなくなっていた。また、魔法の指環も水底に沈んだままだった。鹿の夫妻は森の愛し子のところへ帰って行き、もうだからもお乳を奪われなくなったのをとて喜んで。ケートヒエンはというと王様の子どもたちの許に留まり、絹の可愛い寝台で眠り、黄金の縫い取りの可愛い服を纏い、王様の子のような扱いを受けた。

解題

口頭伝承による。

A T 三三三「呪的逃走」The Magic Flight。

原題 Die Hexe und die Königsinder.

四六 修道士と小鳥

昔むかしある修道院に年若な修道士がいた。名はウルバヌス⁽³⁸⁾、ごく敬虔で勤勉、修道院の図書室⁽³⁹⁾の鍵の管理を委ねられていた。修道士は注意深く蔵書の番をし、自分でも少なからぬ数の美しい本を書き、他の書籍や聖句をどっさり研究した。そうした折使徒ペトルスの詞⁽⁴⁰⁾「神の御前⁽⁴¹⁾にては千年は一日のごとく、また一夜警時⁽⁴²⁾のごとし」を見つけたのだった。若い修道士にしてみればそんなことは全くもってありえないと思われ、信じたくもなければ、信じることもできず、そのため重い疑惑に苛⁽⁴³⁾まされた。そうしたある朝、修道士は黴臭⁽⁴⁴⁾い図書室から出て、下の明るく美しい修道院の庭に入った。その庭には色鮮やかなちいちゃい森の小鳥が降り立って穀粒を探し、大枝へ飛び上がり、夜鶯⁽⁴⁵⁾のように綺麗な声で歌っていた。また、この小鳥、全然物怖じせず、修道士の近くにも寄って来たので、ぱつと捉⁽⁴⁶⁾まえてやりたかったくらいだったけれど、枝から枝へと逃げてしまい、修道士はしばらく後を追ったもの。そうすると小鳥はまたもや高く朗らかな声で歌った。若き修道士は修道院の庭を出て森の中へと入り、なおもしばらく追いついたが、小鳥は一向捉まりはしなかった。とうとう止めることにして、修道院へ戻って行くと、なんと目にしたものは何もかも別物に思われた。なにもかも、数数の建物も庭も、ずっと広く、大きく、立派で、丈が低く古く矮⁽⁴⁷⁾小な修道院教会の代わりには尖塔が三つもある壮麗な大聖堂が立っていた。修道士にはなんとも奇妙に、というより、魔法の仕業のように思えた。そして修道院の門に近づき、おずおずと呼び鈴の紐⁽⁴⁸⁾を引くと、まるつきり顔に覚えのない門番修道士が姿を現したが、この門番は仰天して後ずさった。それから修道院の墓地を歩いて行くと、たくさん、たくさん、見た記憶のない数数の墓石が並んでいた。それから仲間の修道士たちに歩み寄ると、皆どぎもを抜かれて身を避ける。修道院長だけが——もつともこれはウルバヌスの院長ではなくて、年若な別人だったが——その場

を動かず、ただちにキリスト磔刑像を突きつけ、こう叫んだ。「十字架に架けられし御方の御名において、亡霊よ、汝はそも何人なりや。して、死せる者たちの穴を逃れ出でて、われら生者の許に何を探さんといたすぞ」と。

これを聞いた修道士は全身に慄きが走り、老人がよろめくように足をよろめかせ、視線を地面に落とした。すると

となんと、腰帯のところまで長い銀白の髯が垂れているではないか。その帯には格子の嵌まった数かずの書棚のための鍵束が今なお下がっていた。不思議な余所者と思われたこの男を修道士たちは恐るおそる修道院長の安楽椅子まで連れて行った。そこで男が若い修道士の一人に図書室の鍵を渡すと、その修道士は部屋を開け、一卷の年代記を持ち出して来た。これにはこう記されていた。三百年以前修道士ウルバーン、痕跡を残すことなく行方知れず。逃竄せしや禍つ事に遭遇せしや不明、と。「おお、森の小鳥よ、あれがそなたの唄だったのか」と余所者は吐息をついて言った。「わたしがそなたの後を追ひ、そなたの歌声に耳を傾けたのは三分足らず。それなのにそれから三世紀が経った



とは。そなたがわたしに歌ったのはわたしには分からなんだ永遠についての唄。今はよう分かる。して塵の中に腹這ばいて神を崇敬したてまつる。自らも一粒の塵たる身が」。言い終えて、頭こぶしをうなだれると、その肉体は崩れて小さな灰の山になった。

解題

フリードリヒ・キント Friedrich Kind により韻文に移された宗教伝説風昔話 Legendemärchen による。

A T 四七「A」「修道士と小鳥」The Monk and the Bird。

原題 *Der Mönch und das Vögelin.*

四七 七匹の仔山羊

解題

原題 *Die sieben Geißlein.*

KHM五「狼と七匹の仔山羊」Der Wolf und die sieben Geißleinに相当するため訳出せず。

四八 犬の難儀

犬が一匹いた。腹を空かせ、沈み込んで、野原に寝っ転がっていた。その時頭上で一羽の雲雀ひばりが有頂天の唄を甘い声音こゝろで囀なげった。これを聴いた犬いわく「あーあ、おまえって幸せな小鳥だなあ。なんとも楽しそうだなあ、なんとも甘い歌声だなあ、なんとも高いとこまで飛ぶもんだなあ。ところがおいらと来た日じゃあ——どうして嬉しがれよう。飼い主はおいらを追い出して、後ろで扉を閉めやがった。おいらはびっこで病気、食い物をとつ捉つかまえることなんどできない。これじゃここで飢え死にせにゃならん」。

腹べこの犬がこう嘆いているのを耳にした雲雀はその近くまで飛んで来て「可哀そうにね、犬さん。あんたが辛がつてるのが気の毒で堪らない。力を貸してお腹を一杯にしてあげたら、ありがたく思ってくれるかな」と言った。

「どうやってだね、雲雀の奥さん」と犬が力のない声で訊くと、雲雀が返辞。「ほら、あそこに子どもが一人やってくるでしょ。あの子、あそこのお百姓のとこへお弁当を持ってくんだけ。あたし、あの子がお弁当を下に置いてさ、あたしの後を追っ掛けるようにしてみるから、その隙にあんた、傍へ寄って、乾酪チーズと麩パンを食べて、ひもじいのを鎮めるといいわ」。

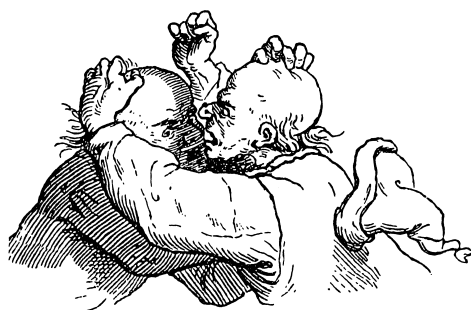
犬がこの親切な申し出に感謝したので、雲雀は子どもの方に飛んで行き、おちよくり始めた。その前をちよんちよん歩いたり、頭の上や脇で羽ばたきたしたり。とうとう子どもは、この雲雀、あたし、どうしても捕まえるんだ、と考えた。ことに雲雀が羽根が片ひらつ方利まかないふりをし、ちいちゃい翼の一つを折れたみたいだからりと下げたもので、子どもは何度か掴つかみ掛かかったが、片手ではどうしても駄目だったので、食べ物が入っている包みを下に置き、翼を片ひらつ方地面に突きながら前をずうっと飛んでいる雲雀の後を走って追い掛けた。その間に犬はびっこ引き引き包み

に近寄り、中に鼻を突っ込んでふんふんやると、一切れの麩麩と凝乳乾酪と上等な卵四つが入っていたので、卵は茹でもせず殻を剥きもせず、乾酪は切ったりなんかせずに、むしろむしゃ食べてしまい、麩麩はくわえて持ち去り、こっそり逃げて穀物畑の中に身を隠した。

犬が取る物を取ったのを見定めた雲雀は中天高く舞い上がり、陽気に囀った。おちゃらかされた子どもは雲雀に悪態をついたけれど、包みが空っぽなのを見つけた時にはいやもうなおさら。泣きながらお母さんの許へ帰ったこの子がぶたれかどうかは知らないけど、まあ何か似たような目に遭ったんだろうねえ。

雲雀は犬のところに飛んで行き、さて具合はどう、と訊ねた。犬は篤く礼を述べ、こんな幸せなことはこれまでなかった、と言った。「だけどさ、も一つだけ、大好きな雲雀さん、まだお願いしたいことがあるんだ」と犬。「満腹す





ると、楽しみたくなるもんだろ。頼むよ、なんか話をしてくれや、それ聴いて、おいら、ちつとばかり笑って愉快になりたいや」。

「いいわよ」と雲雀。「あたしに随いといで」で、雲雀が先立ちで飛び、犬はその後随いて行くと、ある納屋に着いた。その屋根は地面から簡単に上がった。雲雀は犬に、攀じ登って下をご覧、と言った。なにしろ屋根は傷んでいて、穴が開いていたから。下の打穀場だこくばでは二人の禿頭かろうずおが穀棹かろうずおを振るっていた。すると雲雀は素早く一人のつるつ禿ぼけの上に止まった。もう片方が、雲雀をとつ捉まえようと、素早く手でそこをびしゃりとやったが、利口な小鳥はもつと機敏で脇に飛び去った。

「おい、相棒、なんのつもりだ。なんだってわしをなぐる」と最初の禿頭が二番目を詰なった。こちらは、小鳥がおぬしの頭に止まったからよ、そいつをとつ捉まえようと、思ってた、びしゃつとやったんだが、痛かったのなら済まない、と弁解した。そう言ったばかりのこの男のつるつ禿ぼけに雲雀が止まったので、もう一人がすぐさましたたかになぐりつけた。この頭が硝子ガラスでできていたらきつと木っ端微塵に砕けたほどに。この男は少なくとも物凄声でなぐった男にうなり、ただちに悪口雑言がおつ始はじまった。そして穀竿かろうずお使い両人は持った穀竿を投げ捨て、互いの髪に掴み掛かった。もつとも二人とも髪かみの毛はなかったから、髪かみの毛を筆ひしり取るわけには行かず、筆ひしの代わりに血ちの流れるほどつるつ禿ぼけを引つ掻き合い、小突き合い。かくして禿対禿、引つ掻きつこ対引つ掻きつこが進行、耳も引つ張りつこというありさま。そこで犬は笑って、笑って、腹はらが痛くなるほど、居ても立ってもいられないほど野放図のほうず

に笑ったので、大笑いのあげく屋根からもんどりうって下へ落っこちた。落ちたのは丁度殻竿使いたちの禿頭の真上だったので、連中、頭に毛が生えたかと疑い、なにがなんだか分からなかった。この犬、目方があって、そういう種類だったから。でもそれからすぐさま一致団結して犬に怒りを転じに掛かった。殻竿使いが打つのはお手の物、打って打って打ちのめしたから、犬はやつとこさつとこ納屋の壁の穴と垣根を抜けて逃げ出したが、大笑いなんぞできればこそ、耳が聞こえぬ、もう目も見えぬ、といったあんばい。垣根の向こうの草の中にぐんにやりぶっ倒れていると、そこへ雲雀が飛んで来て、「御前様、さてご機嫌はいかがでいらせられますか」と訊いたもの。

「あいさ、雲雀の奥さん、おいら全く充分さね。徹底的にのされちまった。誓って言うけど、おいらにやもう背中なんざない。殻竿使いのやつらが生きながらおいらの毛皮を剥いで、鞆なましちまったもんな。生き長らえようってなら、どうしても外科医が要り用だよ。」——「はい、はい、分かった、安心おしよ。なんとか都合のつくのを連れて来てあげる」と雲雀は応じて飛び去った。間もなく一匹の狼が見つかったので、こう話し掛けた。「狼の旦那さん、食欲なんかまるきりお持ちじゃないんでしょうね」。

「ああ、雲雀の奥さん」てのが返辞。「そういうことでござんしたら、わっちゃあ狼の食欲ってやつでお役に立てますかな」。

「じゃあね、ありがたく思ってくださいるんなら」と雲雀は言葉を続けた。「太った犬がいるところを教えてさしあげますわ。あなたからほとんど逃げられっこございますまい」。

「おお、高貴な王妃様、なんともお恵み深くていらせられますなあ」と狼はお世辞たらたらでにたにた笑い、舌なめずりをした。雲雀は狼の先に立って飛んで行き、狼はその後にくっついて行った。さて、犬のところに着ると、雲雀は犬にこう話し掛けた。「お仲間さんや、眠ってるの。お医者に会いたくないのかな。起きてご覧、あそこにお

医者が来るでしようが」。

「どこに、雲雀の奥さん、どこにさ」と犬はぐったりして訊いた。でも、狼の姿が目に入ると、金切り声で叫んだ。「やだよ、雲雀の奥さん、やだよ、こんな医者にや会いたくないよう。引き止めといて。おいら、ぴんぴんしてるよう」。そしてぴよんとひとっ跳びで起き上がると、高い垣根も深い溝もなんのその、雲を霞と逃げ出した。

解題

古いドイツの韻文笑い話による。

A T 二二三「小鳥とジャッカルがお友だち」The Bird and the Jackal as Friends。

原題 Des Hundes Not.

四九 三匹の犬

ある羊飼いだね、その二人の子どもたち、息子と娘に遺産として残したのは羊が三頭と小さな家が一軒こっきり。臨終の床で「きょうだいなんだから、喧嘩口論が起らないよう仲良く分けるんだよ」と言ったものだ。さて羊飼いが死んでしまうと、兄は妹に、羊たちとこの小屋とどちらが欲しいか、と訊いた⁽⁴⁷⁾。妹が家の方を選ぶと、兄はこう言った。「それじゃぼくは羊をもらって、広い世間に出て行く。世間で幸せを見つけた人は今ままで少なくないし、ぼくは日曜日生まれの子⁽⁴⁸⁾だからね」。そうして自分の分け前と一緒に旅に出た。けれども長いこと幸せには巡り合えなかった。ある時、どっちへ行ったものやら分からず、むしゃくしゃしながら十字路の脇に腰を下ろしていると、突然傍に男が一人いるのに気付いた。男は、一匹が他のより段段に大きい、黒い犬を三匹連れていた。「やあ、若い衆」と男が声を掛けて来た。「すてきな羊を三頭持つておるの。どうだな、わしにその羊をよこしては。代わりにわしの犬どもをやるが」。気が減入っているところだったが、青年は笑わずにはいられず、こう応えた。「犬をもらってもどうしようもありません。



ほとくの羊は自分で自分が養えますが、犬は餌をもらいたがるでしょ。「わしの犬どもは珍しい代物でなあ」と見知らぬ男。「おぬしが養うんじゃないんで、おぬしを養ってくれるのだ。そしておぬしを幸せにしてくれるだろうて。この小さいのは『食べ物持つといで』、二番目は『ずったずったに引きちぎれ』、このでかくて強いのは『鋼鉄も鉄もぶっ壊せ』という名前なのさ」。羊飼いはとうとう説得されて羊を引き渡した。自分のものになった犬たちの力を試すために「食べ物持つといで」と言うと、この犬はすぐさま走り去り、この上もなく素晴らしい食べ物が一杯詰まった大きな籠をくわえて戻って来た。そこで羊飼いはこの取替えっこに満足し、愉快に飲み食いして、長いことあちこち歩き回った。

そのうち二頭の馬を繋いだ馬車に出会ったが、この馬車、一面黒い布に覆われ、御者も黒装束。馬車には黒い衣裳を纏ったなんとも美しい少女が座っていて、身も世も無く泣いている。馬たちは悲しげでゆっくりとした跑足で、頭をうなだれていた。「御者さん、これはどうしたこと」と羊飼いが訊いた。御者は木で鼻を括ったような応対をしたが、若者がなおも訊ねたので、とうとう事のしだいを物語った。この辺りに大きな龍が棲んでいる。国中を荒し回らないよう、毎年の貢ぎ物として乙女を一人捧げねばならない。これを龍はまるごとぺろりと呑み込んでしまうのだ。十四歳の乙女たちの間で毎回籤で決めるのだが、今度は王女様に当たったのだ。そのため王様も国中もこの上もない深い悲しみに沈んだが、それでも龍には生贄をやらなければならない、と。羊飼いは若く美しい娘に同情して馬車にくっついて行った。遂に馬車はある高い山の麓で止まり、乙女は馬車を下り、おぞましい運命に向かっただのろろと足を運んだ。御者は、余所者が後に随いて行こうとするのに気付き、警告したが、羊飼いは耳を貸さなかった。二人が山を半分登った時、体を鱗で覆われ、翼を持ち、脚には巨大な鉤爪を生やしている恐ろしい怪物が山頂から降って来た。かっと開いた口からは灼熱の硫黄の奔流を吐いている。そしてあわや獲物に襲い掛かろうとした時、羊飼いは

は「ずったずったに引きちぎれ」と叫んだ。すると二番目の飼い犬が龍目掛けて飛び掛り、こやつこやつの脇腹わきばらに深深と喰くいついたので、とうとう怪物はどうと倒れ、毒息を引き取った。犬はとうとうと相手をすっかり平らげてしまい、残ったのは一對の牙だけ。これは羊飼いがしまいこんだ。王女は驚きと喜びのあまりすっかり気を失ったが、羊飼いが蘇生させた。すると王女は救い主の足許あしもとに身を投げ出し、一緒にお父様の王様のところへいらして、とひたすら頼んだ。このお礼にお金持ちにしてくださいませようから、と。若者はこう返辞。その前にまず世間を見て回りたい。でも、三年経ったら戻って来ます、と。で、この決心をどうしても翻さないのだった。乙女はまたもや馬車に乗り、羊飼いは別の道へと立ち去った。

でも御者のやつは悪いことを考えついた。下を大きな河が流れている橋を通り掛かった時、王女の方を向いてこう言った。「あなたの救い主はいなくなり、あなたのお礼を欲しがらない。あなたが可哀そうな人間を一人、幸せにし



てくれると、ありがたいんですがね。そこでお父上に申し上げてください。龍を退治したのはこのわたしだと。いやだとおっしゃるなら、ここから河に放り込んでしまいますぞ。だれもあなたがどうなったかなんて訊きはしません。なにしろ、龍があなたを呑み込んだ、ってことになりますから」。乙女は嘆き悲しみ、懇願したが、どうにもならなかった。とどのつまり、御者が自分の救い主だ、と言う、そしてだれにもこの秘密は漏らさない、と誓った。こうして彼らは都へ戻った。皆皆びっくり仰天、いずれの塔からも黒旗が降ろされ、代わりに色鮮やかなのが掲げられた。王様は歓喜の涙を流して息女と自称救い主を抱擁した。「そなたは余の子どもばかりではない、この国全体を大変な災厄から救済してくれたのじゃ」と王様。「それゆえ、当然ながらそなたに報いねばならぬ。余の姫をそなたの妻に遣わそう。したが、あの子はあまりにも若過ぎるによって、婚礼はまずまず一年経ってからにいたそうぞ」。御者はお礼を言上、美美しく着飾らせてもらい、貴族に任命され、現在の地位に相応しいあらゆる優雅な礼儀作法を教え込まれた。けれども王女はこれを聞かされるとひどく驚き、痛いたしく泣き沈んだが、それでも立てた誓いをあえて破る気にはなれなかった。その歳が過ぎ去ったが、もう一年の猶子を許してもらおうのがやっと。この歳も終わりになると、王女は父王の足許に身を投げ出し、もう一年延ばしてくださいまし、と頼んだ。本当に自分を救ってくれたひとの約束が頭にあつたからである。王様は姫君の懇願を拒めず、願いを叶えはしたが、認める猶子はこれが最後という条件付きだった。時の経つのはなんと速いことか。やがて婚礼の日が定められ、いずれの塔の上にも紅くれないの旗が翻り、民草たみくさはこぞって歓呼の声を挙げた。

丁度この日に一人の余所者よそぞが三匹の犬をお供にしてこの都にやって来た。この若者は皆が嬉しがつている理由を訊ね、王女様が恐ろしい龍を斃たおした男に娶めあわせられるのだ、と聞かされると、別の鳥の羽で身を飾っている「他人の功をわがものにしてている」詐欺師だ、とその男を罵った。そこで衛兵に逮捕され、鉄の扉に閉ざされた狭い牢獄に放

り込まれた。藁束の上に横たわり、情けない巡り合わせを考えていると、突然外で飼犬たちがぐんぐん啼いているのが聞こえるのに気付いた。「鋼鉄も鉄もぶつ壊せ」とできるだけ大きな声でどなると、たちどころに目に入ったのは、日光がやつとこさこの独房に入って来る窓の格子に掛けられた自分の一番大きな犬の前脚。格子は壊れ、犬は監房に飛び込むと、ご主人が縛められている鎖を噛み切った。それからまた外へ飛び出したので、飼い主もそれに続いた。さて、これで自由になったわけだが、自分の手柄を他人にいいようにされる、と考えると、辛くって堪らない。腹も空いていることなので、飼犬に「食べ物持つといで」と呼び掛けた。間もなくこの犬は美味しいご馳走をたっぷり包んである口拭き布を頸にぶらさげて戻って来た。この口拭き布には王冠が縫い取りされていた。

折しも王様は宮廷の人たち一同と食卓に就いていたが、その時例の犬が現れて、花嫁となる王女様にお手をして、頂戴をやった。姫君はその犬が分かったので嬉しくつてどきどきし、ご自分の口拭き布を結びつけてやったわけ。これこそ天の報せ、と考えた彼女はお父様に、ちよいと申し上げたいことがあります、と言ひ、秘密を逐一打ち明けた。王様は犬の後から使いの者を送り、この使者はそれからすぐに例の余所者を王様の私室に案内した。王様は若者の手を取って広間に案内した。元の御者はその姿を見て真つ青になり、跪いてお慈悲を願った。王女様は、このお客様こそ自分を救ってくださったお方だ、と認め、それにこちらはの上まだ携えていた龍の牙でそれを証明した。御者は深い地下牢に投げ込まれ、羊飼いは王女様のお隣のこやつひよこの席に座った。今度という今度は姫君が、ご婚礼を延ばしてくださいまし、と頼むことはなかった。

若夫婦はかなり長いこと嬉し楽しんで暮らしたが、やがて元の羊飼いは可哀そうな妹のことを思い出し、自分の幸せを領けてやりたい、と口にした。馬車を一台迎えに差し向けましたので、やがて妹は兄さんの胸に抱かれた。すると飼犬の一匹が口を利き始めて、こう言った。「あたしたちの年季もこれで明けます。もうあたしたちは要りません

よね。これまでずっとお傍にいたのは、あなたが幸せに夢中で妹さんのことを忘れてしまわないかどうか、見届けるためでした」。こう言うなり、犬たちは三羽の鳥に変身、空に舞い上がって姿を消した。

解題

フランケン地方の口承。

龍殺しの昔話はもしかすると聖ゲオルク（聖ジョージ・聖ジョルジュ）の龍退治の伝説（ヤコプス・デ・ヴォラギネ『黄金伝説』*Jacobus de Voragine: Legenda aurea* 参照）よりも古く、これに影響を与えたかも知れない、との説がある。KHMではこの主題は「二人兄弟」型で結ばれている。KHM六〇「二人兄弟」*Die zwei Brüder*、KHM八五「黄金の子ども」*Die Goldkinder* 参照。

AT三〇〇「龍退治」*Dragon-Slayer*。

原題 *Die drei Hunde*。

五〇 シュララツフエンランド
のらくら国の昔話

ま、聴いてくださいいな。いい国のお話ですよ。それがそもそもどこにあるのが分かって、恰好かっこうの船便があれば、出掛けてみようってひとが少なくないでしょう。でもそこへの道は遠いんです。冬は暑過ぎる、夏は寒過ぎるってな老若の皆みな様方いずれにおかれましてもね。この美みし地方はのらくら国シユララツフエンランドと申し、ヴェルシユ・クカーニヤ(34)にございます。家家の屋根は卵入り平丸焼き菓子(35)で葺かれており、扉と壁は香料入り蜂蜜菓子(36)でできていて、梁はりは炙シユウイン豚プラインなんですな。ご当地ドイツならドウカーテン金貨(37)一枚もする値打ちのお品が、あちらじゃプフェニヒ銅貨(38)一枚で購あがなえます。どの家も周りに垣根を廻めぐらしてはいますが、これはブライトヴェルネヒ(39)腸話(40)とバイエルン小型腸話(41)の編み細工で、鉄灸(42)で焙あぶつたのと、茹ゆで立てのがあって、お好みであれこれ食べればよろしい。噴泉は全てマルヴォアジー葡萄酒(43)やその他の甘い葡萄酒で満ち溢れており、唇を噴き出し管に押しつけさえすれば、口中へとろとろと流れ込むといったあんばい。そういう葡萄酒をお好みの御仁(44)は、急いでのらくら国へいらっしやること。白樺(45)と柳には



焼き立ての丸麴麴ゼンメルが生なつていて、木の下には乳ミルクの小川が流れています。この中に丸麴麴ゼンメルが落ちると、ひとりでに柔らかくなります。麴麴ゼンメルをふやかして食べるのが好きな人はどうぞ。これは女子おんなどもや、下男下女向きですな。おい、グレーテルちゃん⑥⑤、おおい、シユテツフェルくん⑥⑥、きみたちさあ、お引越越する気はないかな。丸麴麴川ゼンメルに行くんなら、大きな乳匙ミルクを持つてくのを忘れるんじゃないよ。

お魚イシだけど、のらくら国シユララフフランドでは水面を泳いでいて、これも焙ほつてあつたり、茹ゆでてあつたり。岸のすぐ近くを泳いでいます。とつてもめんどくさがりの衆しゆ、ほんとののらくら者シユララフフてな人間シユララフフだったら、ただ、ちよつと、ちよつと、と声を掛ければいいの。——そうすると、お魚は陸おかにとことこ上がつて来て、のらくら者君シユララフフの手の中にびよこんと跳び込みますから、こちらシユララフフは屈まむ必要もありません。

嘘うそなんかじゃありませんよ、あちらじゃあ鳥たちは炙やき鳥カバウツンになって空を飛んでおります。鶯ヒバリ、七面鳥ネズツクミ、鳩カバウツン、去勢雄鶏ヒバリ、雲雀ネズツクミ、杜松鵝ネズツクミなんかがね。それに手を伸ばすのがどうにも難儀なげだわい、つて人には、口の中へ一直線に飛び込んでくれます。乳呑み仔豚こぶたはあちらでは毎年飛び切り極上こぶたのが育ちましてね。丸炙やきになって走り回つてますが、どれも背中に肉切り包丁こぶたが刺さっているので、ご所望の向き



はこれを使って焙り立ての汁気たつぷりな一片を切り取ればよいのです。

乾酪チーズとなると、のらくらシュラッフェンラント国では大きいのが石ころみたいにござろ。で、この石ころ自体、これまた、詰め物をした鳩の餌袋か、でなけりやちいちゃい肉入り小型捏粉菓子パステイテばかりなんです。冬、雨が降ると、これが全部甘い蜂蜜シズクの雫しずくでして、心行くまで美味しくべろべろやれます。雪なら真っ白なお砂糖がさらさら、雹ひょうだと角砂糖がばらばら落ちて来て、それに乾し無花果いちじく、乾し葡萄、扁桃アーモンドが混じっております。

のらくらシュラッフェンラント国では馬が落とすのは馬糞じゃなくて卵です。大きな籠一杯に幾つにも山盛りになるので、プフェニヒ銅貨一枚で千個も買えます。で、お金カステジはね、金櫃グーテ・カスターニエン（栗カスの木）から出すように、木から揺さぶり落しやあいんです。皆一番値打ちのあるお金を落としたがって、値打ちの低いのはほっぽつときますな。

この国にも大きな森があちこちにあります。そのの茂みや木の上にはこの上もなく素晴らしい衣装がぎっしり。黒、緑、黄、（駅通馬車の御者用の）青とか赤、といったありとあらゆる色の上着、外套、寛袖長上着シヤウベ、洋袴スボン、胴着がね。新しい衣服が必



要になると、森へ出掛けて行つて、石を投げて下へ落とすか、弩いしゆみを上へ射ます。野つ原には綺麗な婦人服がよき
 によき。天鵞絨ピロイド、縐子サテン、ナポリ絹布グロ・ド・ナポリ、バレージュ織ワ、マドラス織ワ、琥珀織タフタ、南京縐子ナンキンその他いろいろ。牧草はあ
 らゆる種類の色の布リボンなんできて、中にはほかし模様もありますよ。杜松の木ツギの幹には衿胸飾りプロシユや黄金製の胸着シマセツト・
 短外套用の留針マンレツトが生えていて、その実は黒くなくて、本物の真珠なんです。樅モミの木にはいかにも巧みを凝らした婦
 人用時計や帯飾り鎖シャトレンがぶら下がっておりましてね。榎木スズナに鈴生りすずななのは長靴と短靴、それから殿方用、ご婦人用の鏢つば
 広帽子ひろ、稲藁帽子いなわら、阿弗利加秃鸚帽子マフラといったありとあらゆる被り物で、これらは極楽鳥ゴ、蜂鳥ハチ、玉虫タマムシ、真珠、七宝、
 黄金莫臥児キンモウエルの飾り付き。

このよなき国では二つの大きな見本市メッセと営業ゴご随意の数多くの市マルクトが開かれましたね。女房が歳を喰っちゃつて、
 どうももう若くも可愛らしくもないや、とご不満な御仁はそこで初はつういしくって器量ケリヤウが好いのと交換でき、その上手
 付け金まで頂戴。老い朽ちただだつて諺ことわざにいわく「老いれば朽ちるくちる」つてね（88）ご婦人方はこの国の授かりものである
 若返りの温泉にまいます。これはまことに靈験れいげんあらたか。老女がまあ三日、せいぜいで四日も逗留とまりすれば、十七
 八の清楚せいそな娘むすめつこになつて引き上げて行くのです。

のらくらシユラッフェンラント国にはいろいろな気晴らしもどつさりありますよ。こちらの国では全然運に恵まれない手合てあひいが、あちら
 じゃあ賭け事でも射撃競技でも、一対一の槍試合サウみたいにとんびしゃりの大成功。こちらだと来る日も来る日も的を
 外はずしている人が、あちらではまん真ん中を射当てるんですな。あさつての方角を射ちまってもですよ。こちらでは
 怠け癖なまけくせのせいで窮乏、破産して物乞いをする羽目になる寝坊助ねぼけすけ、寝腐れ連中ねくたにとつてもあちらの国はすてきなんです。
 睡眠一時間につきグルデン銀貨一枚（90）、欠伸一回につきドッペルターラー銀貨一枚（91）の稼かせぎになります。賭け事で損をす
 ると、そのお金はまた隠かくし（92）に戻つて来ます。極上の葡萄酒は呑み助には只じゃありません。一杯飲み干すたんびに三

バツエン(92)もらえます。女も男と同じ。とつても上手に人をからかったりおちよくったりできると、そのつど一グルデン手に入ります。何をすることにつけても無報酬じゃいけないんです。一番の大法螺(93)を吹くと毎回一クロネ(94)ネ戴き。

こちらの国では時時二枚舌を使う人が少なくありませんが、こうした骨折りのお札に何かもらえるわけじゃありません。でもあちらでは嘘瞞(95)着が最高の学問。てなわけで、お顧客(96)をしょっちゅう誑(97)かして決して約束を守らないありとあらゆる番頭(98)さん、お医者先生(99)、その他のトア方(100)、馬喰(101)の面(102)面(103)、***市の職人衆(104)なんぞはあの国へ嘘をおつきにおいになるとよろしいな。

あちらで学者になりたければ、田夫野人(105)を研究しなければなりません。そういう大学生はご当地ドイツにもいるけれど、それで賞讃(106)されもしないし、榮譽(107)を贏(108)もいたしませんがね。この他ものぐさで大喰らいであることが必要。これこそ三大学問であります。そんなのが一人わたしの知り合いにありますが、あいつなんぞはいつなんどきでも教授様になれるでしょう。

働くのが好き、善行に励み、悪いことには手を出さない、そういう人物はあちらでは嫌われ者。のらくら(109)国(110)から国外退去を命ぜられます。けれども野卑(111)で、何にも取り柄が無くて、そのくせ自慢高慢ではちきれんばかりの能天気(112)な手合いは、あちらでは貴族と看做(113)されます。眠ること、食べること、飲むこと、踊ること、賭けること、これ以外は何もできないやつは、伯爵の位に叙(114)されます。全員の選挙で、この上もない怠け者、善いことには全然役に立たないって認められた代物(115)は、全土の王様となって莫大な収入にありつくんです。



さて、これでのらくらくらの国の流儀特質がご理解戴きましたね。それじゃひとつそこへ旅してみようか、という気にはなつたけど、どうにも道がよう分からん、という向きは、目の見えないおひとにお訊きあれ。口の利けない御仁にでもけつこう。だつてさ、それだと好い加減な道筋をしゃべることなんぞ絶対ないもんな。

この国の周りには山のように高い、米のお粥（かゆ）の壁が張り廻らされています。入国、出国したければ、まずこれを横切つてばくばく平らげて道を開かなきゃなりませんぞよ。

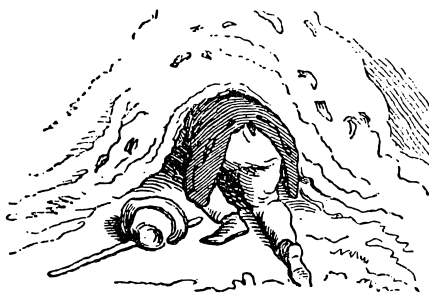
解題

民間で断片として語られるのみ、とベヒシュタイン。

KHMにはKHM一五八「のらくら国のお話」Das Märchen von SchauraffenlandとKHM一五九「デイトマルシエンの法螺話」Das Diekmarsche Lügenmärchenがあるが、どちらの話でもお

むね逆さまことやら全くありえないことの羅列で、あるへんてこりんな国（地方）の紀行所見として纏まっていはいない。このDMB五〇のようなおそろしくナンセンスに誇張されたてっちあげの法螺話はベヒシュタインの感覚にびったり合つたに違いない。ジヨヴァンニ・ポツカッチョの『十日物語』Giovanni Boccaccio: *Il Decamerone*（一三四九―一五二）の第八日第三話をも参照。

AT一九三五「逆30年国」The Topsy-Turvy Land + AT一九三〇「のらくら国（カケインの国）」Schauraffenland. (Land of Cokaygne).
原題 *Das Märchen von Schauraffenland.*



五一 雪白姫

解題

原題 *Schneeweißchen.*

KHM五三「雪白姫」Sneewitichenに相当するため訳出せず。

五二 茨姫

解題

原題 *Das Dornröschen.*

KHM五〇「茨姫」Dornröschenに相当するため訳出せず。

五三 白鳥、貼り付け

昔むかし三人兄弟があった。そのうちの長男はヤーコプ、次男はフリードリヒ、三男で末っ子はゴットフリートという名前だった。この末っ子、長男、次男のありとあらゆる悪ふざけの標的で、連中がくそおもしろくもない気分の時にはたいてい八つ当たりのお相手役を務めさせられた。何かが兄貴たちの思うようにならないと、ひどい目に遭うのはゴットフリート。何でもかんでもじっと我慢しなければならぬ。なにしろ体つきが弱よわしいから、ずっと強い兄貴たちから身を守ることができないでいたわけ。そういうしだいで人生が酸っぱい「辛い」ものにされたから、この弟、運命がもつと増しにならないかな、と夜も昼も物思いに耽っていた。ある時薪を集めるために森にいて、激しく泣いていると、婆様が一人やって来て、どうして泣いている、と訊ねた。そこでゴットフリートは悩み事を全て打ち明けた。「おや、お若いの」と婆様が返辞。「世間は大きいじゃないか。余所よそで運勢を試してみたらどうだね」。

ゴットフリートはこの言葉を心に留め、ある朝早く父親の家を後にして広い世間へ出発した。婆様が言ったように、運試しをするためにね。でも、生まれ故郷で少なくとも子ども時代は幸せだった土地に別れを告げるのはしみじみ悲しかったので、とある丘に腰を下ろし、もう一度ふるさとの村を眺めた。するとね、あの婆様がうしろに立ち、彼の肩を叩いてこう言ったのさ。「ま、よくやったね。でもこれからどうする」。これでようやくゴットフリートは、これからどうしたものか、と考えたんだ。今までは、幸せなんて炙やいた鳩トビみたいな口の中へ飛んで入ってくれるに違いない、と思っただのさ。婆様はこちらの考えを見抜いた様子で、にんまり微笑んで言った。「どうしたらいいか教えてあげる。なぜかって。そりゃあんたが好きだからさ。あんたが幸せの膝に座り込んで「幸せに巡り合って」も、あたしのことを忘れやしないって思うからさ」。ゴットフリートは、忘れはしない、と手と口で約束した。と、婆様は言

葉を続けて「今晚、お日様が落ちたら、あそこの十字路の脇に立っている大きな梨の木のとこへお行き。その下に男が一人横になって眠っている。さて、木の根元には大きな綺麗な白鳥が繋がれている。その男が目覚まさないように気を付けるんだよ。だからね、日が沈むのと丁度一緒にそこへ着いて、白鳥の紐をほどこいて、連れて逃げるのさ。だれでもこの鳥の見事な羽に夢中になる。そして、一本引っこ抜いてもいい、つて許しておやり。でも、白鳥は手が触るときゃあつて啼き声を挙げる。そしたら、あんたは『白鳥、貼り付け』と唱えるんだよ。そうするとね、触った人は手が鳥にびったりくつついちゃつて、もう離れっこない。あたしがあんたに贈り物にしてあげるの。ちっちゃな杖でほんと叩くまではね。こうやってご大層な人間の群を捉まえたなら、そのままどこまでもずんずんお行き。そうすると大きな都に着く。ここには王女が一人いるけど、これまでただの一遍も笑ったことがないのさ。このお姫様を笑わせることができたなら、あんたは幸せになれる。でも、そうなくてもあたしのことを忘れるんじゃないよ、お若いの」。ゴットフリートはもう一度約束を繰り返して、それから日没とともに教えられ



た木のところにちゃんと着いた。男が横になって眠っていて、大きな綺麗な白鳥が紐でその木に結びつけられていた。ゴットフリートは思い切つて鳥をほどき。男が目覚まさないうちに、連れて逃げた。

白鳥を連れたゴットフリートが、何人かの男連が洋袴ズボンの裾を捲り上げて「足で」粘土こを捏ねているある建築現場を通り掛かると、一同、鳥の綺麗な羽にすっかり感心、体中粘土だらけの出しゃばりこぞうが声を張り上げて「わ、こんな羽が一本欲しいなあ」と叫んだ。——「抜いてみな」と愛想良くゴットフリートが言う。こぞうが鳥の尻尾つかを掴む、白鳥が啼く、「白鳥、貼り付け」とゴットフリートが唱える。するとこぞうは、どんなにもがいても離れられなくなってしまった。こぞうが叫べば叫ぶほど、他人はげらげら。やがて近くの小川から小娘スケイトが一人やって来た。この子は下裳スカートを高高とからげてそこで洗濯をしていたのだった。こぞうを可哀そうに思い、離してやろうと手を伸ばす、白鳥が啼く、「白鳥、貼り付け」とゴットフリートが唱える。すると小娘は同じように捉まってしまった。ゴットフリートが獲物と一緒に暫く行くと煙突掃除煙夫



に行き逢った。こいつは奇妙奇天烈なご同行衆を見てどっと吹き出し、小娘に、一体何をやらかしてるんだい、と訊いた。「ああ、いとしい、いとしいハンス」と小娘は悲しい声を挙げて、「手を貸して、この忌まわしいぼうずからあたしを引っぺがしとくれ」。——「それしきのことならよ」と煙突掃除夫は大笑いしながら、小娘に手を掛けた。鳥が啼く、「白鳥、貼り付け」とゴットフリートが唱える。すると真つ黒けなのはご同様に魔法に掛かる。こうやって今度はとある村に入った。丁度教会堂開基祭の大事が開催中で、綱渡り芸人の一座が見世物を興行している。折しも道化役が滑稽な所作の真つ最中。白鳥の尻尾にびつたりくっついてるへんてこな三つ葉の和蘭紫雲英「三人組」が目に入ったので、口をぽっかり。「黒ちゃんやあい、おめえ、道化になつたのかあ」と笑い転げる。「てんから笑いのなんかじゃねえやい」と煙突掃除夫が返答。「このあまつちよめがおいらをつらまえちまつて、おいらの手は釘付けにされたみてえだ。おっ放してくれやい、道化役どん。いつかお返しをさせてもらうからよう」。黒助の伸ばした片手を道化役が掴む、鳥が啼く、「白鳥、貼り付け」とゴットフリートが唱える。すると道化役は四人目の仲間入りをした。見世物の観客の最前列にいた堂堂たる恰幅の村の領地管理官はこれをおいかに峻厳な面持ちで眺め、かかるまやかしごと、けしからぬ事態になりかねんわい、と大いに憤慨、道化役の空いてる方の手を掴んで挽ぎ離し、牢獄の番人に引き渡そうとした。鳥が啼く、「白鳥、貼り付け」とゴットフリートが唱える。すると領地管理官は前の連中と運命をともした。領地管理官の奥方は背高のつぼの瘦せっぽちだったが、旦那様の災難にびっくり仰天、その空いてる方の手を掴んで力一杯引つ張った。鳥が啼く、「白鳥、貼り付け」とゴットフリートが唱える。すると領地管理官夫人は、きやあきやあ悲鳴を挙げたけれども、哀れや随いて行かねばならなかった。その後はこの一行の人数を増やそうという気になつたのはいなかつたけど。

前方に都の塔が幾つも見えるようになった時、ゴットフリートは向こうから壮麗な豪華馬車がやって来るのに出逢

った。中には美しくうら若い、でも気難しい顔の貴婦人が一人乗っている。でもこの女性、この派手やかな行列を一目見た途端、高らかな笑い声を挙げて爆笑、その供回りも一緒にげらげらやった。「王女様がお笑いあそばした」とだれもかれも喜んで叫ぶ。姫君は馬車を下り、このていたらくをもっととつくり検分したが、ぴっしやり虜とりにされちゃった連中の跳カんだりはねプたりにいよいよますます笑い続ける。馬車は引き返さなければならぬということになり、ゴットフリートと並んでゆつくり町へと戻る。王様は、姫君がお笑いあそばした、との報せを聞くと、有頂天になりおんみずからゴットフリート、ゴットフリートの白鳥、それからその世にも不思議な随行者たちを実見に及んだが、こちらもおかしら涙がこぼれるほど笑わざるをえない。「そちはなんともおかしなやつだのう」と王様はゴットフリートに言った。「そちは知っておるか、余が姫を笑わせた者に何を約束したか。「存じませぬ」とゴットフリート。「それでは言ってきかせよう」と王様。「グルデン金貨千枚⑩か、それともなにかすてきなものかじゃ。二つのうちどちらかを選ぶがよい」。ゴットフリートはその「すてきなもの」という方に決めた。それから彼は、こぞう、小娘、煙



突掃除夫、道化役、領地管理官、領地管理官夫人にあの小さな杖を触れた。すると皆自由になって、後ろで地獄の業火が燃えているかのようにまっくらさんぼう、すたこらさつさと逃げ出した。これがまたいつまでも消えない哄笑を惹き起こしたものだ。一方王女はこの綺麗な白鳥を撫でてその羽を感嘆したくて堪らなくなった。鳥が啼く、「白鳥、貼り付け」とゴットフリートが唱える。こうして彼は王女を贏たわけ。さて白鳥は空に舞い上がり、遙か遠くの地平線に姿を消した。ゴットフリートは公爵領を下賜されたが、この幸せの基となったあの婆様のことをちゃんと忘れずにいて、婆様をその壮大な居城に招き寄せ、自分と自分の愛する花嫁の召使頭に任命した。

解題

フランケン地方の口承。類話多数。「ピフハーン、貼り付け」Piphahn, kleb an. とむ。

この物語の中心、お互いにびったりくっつくよう呪縛された人たちとそれを見物することによって惹き起こされる哄笑というモチーフは、しばしばエロティックな性格を帯びている古くからの笑い話である。これはギリシア神話にも、『新エッダ』にも見出される。

KHM六四「黄金の鷺鳥」Die goldene Gans。

AT五七「皆貼り付け」All Stick Together.

原題 Schwan, kleb an.

五四 七羽の白鳥

ある国に若い騎士が住んでいた。お金持ちで美男子、それに壮麗な城を構える身だった。ある時猟犬たちを連れて森へ狩に入ったところ、一頭の牝鹿が目に留まった。鹿は雪より白く、騎士から遁走して山地に聳え立つ原生林の中へ姿を隠した。騎士もせつせと跡を追い掛け、とうとう荒涼とした小暗い谷に辿り着いた。そこで犬たちのせいで牝鹿を見失ってしまった、あちこち馬を乗り回し、犬たちをまた呼び集めようとした。そうこうするうちとある流れのほとりに出た。この川辺に一人の愛らしい乙女が立っていて、水浴びをしていた。片手に黄金の鎖を持っている。この乙女が好きで好きで堪らなくな



った騎士はそおつと馬から下り、気付かれないよう忍び足で近寄り、乙女の手から鎖を取った。この鎖には不思議な力と惑星の魔法が籠められていたのだ。この乙女は恵みの娘(9)ながら、なんとも端麗だったので、騎士はその美しさに夢中になり、牝鹿のことも獵犬たちのことも忘れ果て、この乙女を妻として連れ戻ろうと思った。そしてそれを実行、同伴して居城に帰った。

さてこの若い騎士にはまだ母親が健在でいたが、この母親、嫁女(10)がどうにも気に喰わない。これまで城中を独り天下で切り回していたのが、こうなるとここでの権勢も声望も失くしてしまう、と心配になったからである。そこで嫁を恨み、憎んだ。で、息子に、妻を可愛がり過ぎないように、とたびたび戒め、できれば二人の間に不和と喧嘩の種を播(11)こうとした。けれど、実現はできなかった。というのも、息子はそうした言葉には耳を藉(12)さず、そのつど機嫌を悪くしたからだ。これに気づいた母親は、それからというもの、何事につけても息子とその若妻には下手(13)に出て親切にふるまうふりをした。でもこうしたことは全て本心からではなく、若夫人を万事につけ立てているように見えても、先方に対して胸の中で残酷な悪企みをもくろんでいたのである。そうこうするうち若い奥方が産褥(14)に就く時が来た。そして男の子を六人、女の子を一人産んだ。この子たちはいずれも頸の周りに黄金の鎖を懸けていた。するとすぐさま若い殿様の母親である邪な老婆がやって来て、生みの母が眠っている間に七人の赤児を盗み出し、余所(15)へ持って行き、代わりに同じ夜に棄てられた七匹の仔犬(16)を置いた。ところでこの二枚舌の不実な女には腹心の下僕が一人いたが、この男に七人の子どもたちを渡し、忠誠の誓いを立てさせ、深い森に運んで行き、殺して、地中に埋めるか、水に投げ込んでしまえ、と言いつけた。下僕は、そういたします、と誓言し、赤児たちを森へ運んで行き、一本の樹の下に寝かせると、絞め殺そうと掛かった。けれど殺すのが厭(17)で堪らなくなり、こうしたあさましい犯行にぞつとして、子どもたちを生かしたまま立ち去り、女主人には、ご命令は果たしました、と言上(18)した。

さりながら、なべての運命をいとも巧みに定めたもう万物の創造主は赤児たちを憐れとおぼしめし、一人の養い親をお送りになられた。これはこの森に住んで叡智ある行いにいそしんでいる年取った賢者で、ちびさんたちを自分の庵に引き取り、彼の許へふだんやって来る牝鹿の乳で七年というものを育て上げた。

さて、くだんの邪な女は子どもたちを母親から奪い取ると、息子をそのうら若い妻のところへ連れて行き、仔犬たちを見せてこう言った。

「息子や、ご覧なされ、そなたの妻が産んだ子どもたちを。仔犬なのですよ」と。息子が若妻を大層愛していたがために復讐心に燃えてこんなことをやってのけたのだ。これを見た騎士は母親の言うことを信じ、これまであんなに愛していた若い奥方を憎しみ、言い訳一つ聴こうとせず、城の本丸バラスの前の中庭の地面に胸まで埋め込み、その頭の上に水を満たした水盤を置かせ、召使一同にこう言いつけた。彼女の頭の上で顔を洗い、その手を彼女の美しい髪の毛で拭け、と。それから犬にやる食べ物以外はやってはならない、とも。

こうして可哀そうな妻は穴の中に立たされたまんま、苦しみと懊惱わづらひのうち七年暮らした。そして彼女を憐れむことはだれにも許されなかった。そうこうするうち美しい肉体は衰え、身に着けているものは朽ち腐



れ、四肢に纏うものは自らの皮膚のみ。

その間森の子どもたちは野獣や野鳥を射止めることを覚え、その肉を食べ物として育った。ところで騎士が、これは子どもたちの父親なわけだけど、またしてもあの森に狩に出掛けた。で、木立の中であっちこっち走り廻っている子どもたち、それから、頸に巻いた黄金の鎖に気付いた。すると心中の子たちが可愛くて堪らなくなり、どれか一人捉まえない、と思つたが、彼らは捉えられはせず、森の中に姿を消した。城へ戻った騎士は母親や客の貴族、友人たちに、森で頸に黄金の鎖を掛けた小さい子どもたちを見た、と語つた。それを聴いた母親は内心ぎよつとし、例の下僕を呼び寄せ、「そちはあの折子どもたちを殺したのか、それとも生かしておいたのかえ」と訊ねた。下僕は、あの子たちを我が手を下して殺すことはようできません、一本の樹の下に寝かせておきました、きっと間もなく死んでしまいましたでしょう、と白状した。そこで彼女は下僕に向かい、大至急馬で森に行き、決して死んでなんぞいない子どもたちを捜し、その黄金の鎖を奪つてしまふのだ、さもないとわらわたち両人は汚辱にまみれることになる、と命じた。下僕は戦戦兢兢として仰せに従い、森で三日間子どもたちを捜したが、見つからなかった。四日目によく見つけたのだ。彼らは小鎖を外しており、白鳥に姿を変えて水面で遊んでいるところ。でも女の子はまだ人間の姿のまま、白鳥たちが水面で遊ぶさまを眺めていた。そこで下僕はこっそり近付き、黄金の小鎖を六本奪つた。しかし女の子は逃げ出し、下僕は追いつくことができなかった。

下僕が鎖を老女の許に持ち帰ると、彼女はそれらある黄金細工師のところに届け、それで酒盃を一個造るよう言いつけた。鎖を溶かして酒盃を鋳しようとした黄金細工師は、その黄金がみごとで純良なのを見て取つたので、鋳で加工することも、火で溶かすこともできなかった。もつとも一本の小鎖だけは叩き潰し、それで指環を一個拵えた。他の鎖は秤に掛けてから取り除け、代わりに同じ重さの黄金を出して来て、これを使って酒盃を造つて献上、指環

も鎖も箱にしまい込んだ。

もう人間の姿に戻れなくなった白鳥たちは甘く切ない声で愁いに満ちた唄を歌った。これは幼児たちの泣き声のような響きだった。とうとう彼らは翼を拡げて高く舞い上がり、どこへ行つたものか、と見回した。すると鏡のように澄んだ大きな湖が見えたので、そこへ降り立った。ところでこの湖はとある高い峰を取り巻いていたが、この山の麓に巨大な巖山があり、その上に綺麗な城が建っていた。巖山はごく険しく、湖水は高い峰のすぐ傍までひたひたと追つていたので、城へ通じる路はとても狭い坂道しかなかった。そしてこの城こそまさしく、子どもたちの父親である若き騎士の居城だった。城の食堂である広間の窓は湖に臨んでいた。そこで領主は間もなく白鳥たちに気づき、驚いた。なんしろこんなに綺麗な鳥たちはこれまで見たことがなかったから。そこで彼は麴バクやらその他の食べ物や投げ落としてやり、召使一同に、決して狩り立てたり追ひ払つたりしてはならぬ、白鳥たちがここにずっと居つくようになるまで、しょっちゅう麴バクを投げ落としてやれ、と申しつけた。皆せつせとこの指図に従つたので、白鳥たちはここに親しむようになり、食事時にはいつもやって来て、餌えさをもらうほど馴れた。

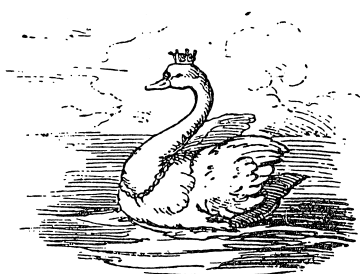
さて、白鳥たちの姉妹である、独りぼっちになった可哀そうな少女は、人間の恰好かっこうでいられたが、途方に暮れてしまい、父親の城へ上つて行って物乞いをした。食卓の残り物をもらうと、彼女は穴の中の憐れな女性と顔わけ合った。なぜならこの女の人を見るたびに、なんだかひどく泣かずにはいられたものだから。とはいふもの、お互いに相手がだれだか分からなかった。それから女の子はまだいくら残っている麴バク屑くずを城の下の湖畔へ持つて行き、兄弟である白鳥たちにやった。彼女が近付くたび、白鳥たちは飛んだり、羽ばたいたり、クイイ、クイイと啼きながら寄り集まり、女の子が前掛けから配る食べ物を啄つばむのだった。少女は鳥たちを優しく可愛がり、抱き締めることもよくあった。それから夕暮れになるといつも城へ上がって行き、土の中に立たされている女の人の前で

毎夜眠るのだった。この女性が自分の生みの母だということを知らずに。

城の住人はだれもこういったこと全て、それから、少女があ的女性の傍に立つ時いつも泣くこと、また、少女が女性にとてもよく似ていることなどを、とても不思議に思っで見守っていた。そのうち騎士も女の子をもっと近くで観察しようという気になり、妻と似ていることに気付いたし、頸に懸かっている黄金の小鎖にも目が留まった。そこで小娘を前に来させ、こう訊いた。「なあ、おまえ、好い子だ、言っておくれ、どこから来たのか、どういう生まれなのか。おまえの両親はどんな人だね。また、おまえはどうやって白鳥たちがおまえの膝から餌を食べるほどに馴らしたのだ」。

すると可哀そうな子は胸の奥底から深い溜め息をついて答えた。「お殿様、両親がどういいう人だったか全く存じません。逢ったことがあるのかさえ知らないのです。でも、白鳥のことをお訊ねとあれば申し上げます。あれは私の兄弟、森の中で牝鹿のお乳で一緒に育てられた兄弟なのです。ある時のこと、兄弟たちは水浴びをしたかったものから、黄金の鎖を外しました。そうすると白鳥の姿に変わるのです。そして鎖が取られてしまいましたので、兄弟た





ちは人間の恰好に戻れず、白鳥のままではいなければならなかったのでございます」。

この話を聞いた二枚舌の不実な女とその従犯者の下僕は激しく驚愕し、二人ながら罪をひしひしと感じて真ッ蒼まっ蒼になった。騎士もこれを認め、城から下へぶらぶら下りながらとつおいつ考えた。老女はいえば、女の子を殺せ、と下僕をそそのかした。そこで男はぎらぎら光る剣を抜き、いつものように白鳥たちのところへ歩いて行く少女の跡をつけた。しかし騎士は男に気付き、近寄って、下僕が悪行を働こうとしたとたん、剣をその手から打ち落とした。そこで下僕はくたくたと跪ひざまずき、何もかも白状に及んだ。このあと騎士は母親に歩み寄り、威嚇して告白を迫った。老女は手箱を開け、小鎖で拵しらえたという例の酒盃を息子に差し出した。騎士はすぐさま黄金細工師に使いをやり、酒盃の件を峻厳じゅんげんに問い質した。こちらは処罰が怖くてならなかったので、指環に造り直した一本は別として鎖はそっくり

そのまま手許にある、と真実をありていに申し述べた。騎士は黄金細工師に鎖を取って来させ、それを乙女に渡した。乙女が白鳥の頸にそれぞれ鎖を懸けてやると、皆人間の姿を取り戻した。ただし、一羽は除いて——これは白鳥のままではいなければならなかった。この白鳥についてはいろいろな本にどっさり不思議な物語が書かれているのが見つかる。さて騎士は大急ぎで気の毒な妻を土の中から出させ、高貴薬やら貴重な香料やらで元気を恢復かいかうするよう計らったので、彼女はまた元通りの麗人となった。騎士は自分の二枚舌の母親を、何の罪もない夫人が七年間も簍され衰え、姑の邪さのために苦しめ抜いた、その同じ穴に入れさせた。こうして老女は預言者の箴言しんげん通りになった。ほら、「人を呪わば穴二つ」^(註)って言ううじゃありませんか。

解題

ライプツィヒ大学図書館蔵古ドイツ語紙手稿に基づきM・ハウプトとH・ホフマンが出版した『古ドイツ草稿』*Altdeutsche Blätter* (一八三六)による。

ただし、子どもたちには相応しくないとベヒシュタインに思われた部分(麗しい乙女は裸。おまけに王——この物語では「騎士」——は彼女の肉体を奪い、自身の天幕に運び入れる)は削除し、しばしば字句を潤色した、とのこと。

つまり、これは「白鳥乙女」型の導入部なのであって、冒頭の乙女は黄金の鎖を用いて白鳥の姿となり、山峡の川に飛来、鎖を外して全裸で沐浴しているところを、騎士に見つかり、白鳥になるために必要な黄金の鎖を取られたので飛んで逃げることもできないまま、無理やり情交されたのである。

北宋の李昉(九二五—九九六)撰『太平廣記五百卷』(新興書局、中華民国五十一年初版)「虎類」卷四百二十七の二「天宝選人」(出典『原化記』)でも、男が、眠っている乙女から虎の皮衣を奪って隠してしまい、裸の乙女の肉体を奪い、妻にする。

当該箇所の前後を読み下ししてみる。「(前略)院後の破屋中に至り、忽ち一女子を見る。年十七八。容色甚だ麗し。虎皮を蓋いて熟寝之。此人乃ち徐ろに行き虎皮を剽きて之を蔵す。女子覚む。甚だ驚き懼る。因りて妻と為し、其の所以を問う。乃ち難を逃れて此に至り、蔵れ伏す。家を去ること曰に遠し、と言う。(後略)一寺の背後にあばら家があり、そこに一人の女がいるのに気づいた。年の頃は十七八で、こぶる美人。虎の皮をかぶって深く熟睡している。「当時の風習に従い、全裸で寝ていたのである」。男はこっそり近づいて、虎の皮を奪い、これを匿した。乙女は目を覚まし、大層驚き恐れた。「当時の風習に従い、全裸で寝ていたのである」。男はこっそり近づいて、虎の皮を奪い、こっそりと、難を逃れてここまでまいりまして、ひっそり隠れております、生家はすつと遠方なのです、との答え。この男、乙女を「妻にして」と訊くと、難を逃れてここまでまいりまして、ひっそり隠れております、生家はすつと遠方なのです、との答え。この男、乙女を「妻にして」しまつてから相手の出所来歴を訊くのだから、「妻にして」が常識的な結婚の契ではなく、「無理やり情交して」であることは言を俟たない。

これは「虎乙女」とでも命名できよう話だが、異類の女性と人間の男が通婚する異類婚という点で「白鳥乙女」型に分類され得る。

A T 七〇七「三人の金髪の息子」The Three Golden Sons + A T 四五一「兄弟を捜す乙女」The Maiden Who Seeks Her Brothers.
原題 *Die sieben Schwestern*.

五五 あばらや住まいの夫婦者

昔むかし男と女がいたが、長いこと一緒に一軒のあばら^(世)やに住んでいた。とうとう二人ともこれにはうんざり。亭主は女房にこう言った。「わしらがこんなおんぼろあばらやで暮らさにならにやあのはおめえのせいだ。住まずにいられりゃああのう」。でも女房は「うんにゃ、あなたのせいだよ」と切り返した。てなわけでそれからというもの、お互い喧嘩口論が絶えず、あばらやの中で追いつ追われつ。するとたまたま黄金^{こがね}色に輝く小鳥があばらやへやって来ていわく「一体全体お互いに何をやってるの」「あいさねえ」と女房。「あたしらこのちっほけなあばらやにうんざりしちまつてさ、余所^{よそ}の衆みたいな暮らしを試してみたいもんだと思ってるだよ。そしたら不平は言わないさ」。黄金色の小鳥は夫婦をあばらやから連れ出し、裏に気持ちのいいお庭のある、新築の小さな家に案内して、こう告げた。「今からこれはあなたがたのものだ。これからは二人とも仲良く平和にお暮らしよ。それからね、もしぼくに用があるなら、三回手を叩いて、こう呼べばいい。

『お日様の光の中の黄金^{きん}の小鳥

金剛石^{ダイヤモンド}の館^{やかた}の黄金^{きん}の小鳥

どこにでもいる黄金^{きん}の小鳥^(世)』

そうすりゃぼくはやって来る」。

こう言つて黄金色の小鳥は飛び去り、夫婦はもうおんぼろあばらやに住まなくていいのを嬉しがり、自分たちのものになった綺麗な小さな家と緑のお庭を楽しんだ。でもそれもほんのちよつとの間だった。何週間かこの家で暮らし、それから近在を歩き回つたところ、大きな堂堂たる百姓屋敷(16)が目に入ったのでね。これには大きな厩(うまや)がいくつも、庭がいくつも、畑がいくつも付属していて、たくさんの使用人と家畜(こいゑ)がいたのさ。そこで彼らはまたしてももうささやかな小家が気に入らなくなり、ほとほとうんざりしちまつた。で、ある朝のこと、二人ともほとんど同時に手を叩いて、こう呼んだもの。

「お日様の光の中の黄金の小鳥

金剛石の館の黄金の小鳥

どこにでもいる黄金の小鳥」

ぱさり。黄金色の小鳥が窓から飛んで入つて来て、



またしても一体何が欲しいのか、と夫婦に訊いた。

「ああ」と二人がいわく「この小家はなにしろささやか過ぎるだでね。わたしらもああいった大きくて素晴らしい百姓屋敷がもらえさえずりゃなあ、そしたら不平は言わないさ」。黄金色の小鳥はちよつとお目をぱちくりさせたが、何も言わずに、たくさんの畑、家畜のいる厩、下女下男らが附属している大きくて素晴らしい百姓屋敷に夫婦を案内し、そっくり彼らに進呈した。

夫婦は天井に届くほど飛び上がり、嬉しくって嬉しくって、手の舞い足の踏むところを知らぬといったありさま。そしてそれから丸一年は不平を言わず楽しく暮らし、もつといいことなんぞ全然考えなかった。でも今度もそれ以上は続かなかった、ただの一日もね。だって彼らは何度も町へ馬車で出掛け、美しい大邸宅の数数やら、綺麗に着飾った紳士淑女が散歩しているのを見たものだから、こう考えたんでね。おやまあ、町の暮らしは素晴らしいに決まっている。それに、あんまりいろんなことをやったり、働いたりせずに済む、と。女房は贅沢や豪華な生活をいくら見物しても見飽きなかったので、亭主に向かってこう言った。「あたしらも町さ行くべえ。あんた、黄金色の小鳥を呼ばつてくれろ。あたしらもうたつぷりこの百姓屋敷で暮らしただよ」。すると亭主いわく「おつかあ、おめえがあれを呼びな」。――結局女房が三回手を叩いて呼んだ。

「お日様の光の中の黄金の小鳥

金剛石の館の黄金の小鳥

どこにでもいる黄金の小鳥」

また黄金色の小鳥が窓から飛んで入って来て言った。「一体ぼくに何の用」。——「ああ」と女房。「あたしら百姓暮らしに飽きあきさ。町の衆になつてみたいだよ。そうして綺麗な着物を着たい、それから大きな素晴らしいお邸に住みたい。そしたら不平は言わないさ」。黄金色の小鳥はまたしてもお目をばちくりさせたが、何も言わず彼らを町で一番美しい邸宅に案内した。そこでは何もかもみごとに飾り立てられており、戸棚や箆筒たんすが数数あり、中には最新流行の衣装が吊り下がっていたり、置かれていたりした。そこで夫婦は世の中にこれほどけっこうな、これほどみごとなものがあるうか、と思ひ、ただもう嬉しくて嬉しくて我を忘れた。でも残念ながら今度も長くは続かなかった。またしても二人は飽きてしまい、お互いにこんなことを言ったもの。「貴族みたいになればねえ。あの人たちは素晴らしい宮殿やお館に住んで、何台もの馬車、何頭もの馬を持っていなさる。そして馬車の後ろには黄金きんの縁取りを付けた上着の従僕たちが立っている。そうさ、これでこそやつとこ真つ当な暮らしつものだよ。こっちはしがないおんぼろ人生」。そこで女房いわく「さあて、今度はあんたの番。黄金色の小鳥を呼ぶのはねえ」。亭主は長いことどうも気が進まないでいたけれど、でも女房がやいのやいのと責め立てて放っておかなかったの⑩で、とうとう三回手を叩いて呼んだ。

「お日様の光の中の黄金の小鳥

金剛石の館の黄金の小鳥

どこにでもいる黄金の小鳥」

さてさて、黄金色の小鳥がまたまた窓から飛んで入って来て訊いた。「一体ぼくに何の用」。亭主いわく「わしらは

貴族になりたいだ。そしたら不平は言わないさ」。これを聞いた黄金色の小鳥はひどくお目目をぱちくりさせて言うには、「満足しない人たちだなあ。一体全体どうすりゃ充分なの。ほくはあんたがたを貴族にしてあげられるけど、何の役にも立つまいよ」。そうしてたちどころに綺麗な館を夫婦に与え、何台もの馬、何頭もの馬、それから無数の召使も提供した。――さて今度はご兩人、貴族におなりあそばし、毎日馬車でご散策、考えることといったらただもう、その日その日をおもしろおかしく、新聞を読む以外は、何もしないでのらくら過ごすことだけ。

ある時夫婦は馬車で都に出掛けた。すると王様と王妃様がべた一面金箔きんぱくを貼ったお馬車にお乗りになっていた。金糸を縫い取りした衣装をお召しでね。お馬車の前後左右には元帥方、宮廷人、お小姓たち、兵士たちが馬でお供。王様と王妃様のご通過あそばす沿道ではだれもかれもが帽子や手巾しんかを振っていた。おやまあ、これを見た夫婦は辛抱できずになんとも胸がどきどきした。邸へ帰り着くが早いか、彼らが言うには「王様と王妃様になりたい、そしたらおと



なしく満足しよう」。そこでまたまた、今度は二人一緒に手を叩き、張り上げられるだけ声を張り上げてどなった。

「お日様の光の中の黄金の小鳥

金剛石の館の黄金の小鳥

どこにでもいる黄金の小鳥」

黄金色の小鳥が窓から飛んで入って来て訊いた。「一体ばくに何の用」。そこで二人の返辞は「王様と王妃様になりたい」。小鳥は目をおっそろしくばちくりさせ、体中の羽を逆立て、羽ばたきをしてこう言った。「あさましい人ちだなあ、一体いつになったら、これでもう充分、にするの。ほくは王様や王妃様にだっしてあげられるけど、でもそれだっして続きやしないよ。だって、あんなたちは決して、これでもう充分、にしないんだもの」。

さて今度は二人は王様と王妃様で、王国全土を治め、大宮廷を抱える身となった。大臣たちや宮廷人は、二人のうちどちらかの姿を見ると、ひざまず跪かねばならなかった。それから彼らはだんだんに全国の役人を悉く召し寄せ、玉座からこの上もなく峻厳な命令を下しおかれた。また、あらゆる君侯の領地にある高価なもの、贅沢なものは献上を余儀なくされたので、夫婦の周りはいとも絢爛豪華けんらん、なんとも言いようがない、といったありさま。それなのに二人はまだ満足せず、しょっちゅう「もつと何かこれ以上のものになりたいだな」と言ってばかり。すると女房殿いわく「皇帝ていと皇后くわうになろうよ」。——「いんや」とご亭主。「わしら教皇きやうになるべえ」。——「へへんだ、そんなこつちや足りないさ」と女房は夢中になつて金切り声を挙げた。「神様になりたいよう」。

こう口に出したとたん、ひどい疾風はやてが吹き起こり、花火の火の輪みたいにくるぐる回る燃えるような目つきをした

大きく真つ黒けな鳥が窓から飛んで入つて来て、こう叫んだので、だれもかれも震え上がった。「あんたたち、あばらやの中で朽ち果ててしまふがいい」。

ぱちつ、ありとあらゆる栄耀^{えいよう}栄華は雲散霧消。夫婦は二人つきりでもたしても狭苦し
いあばらやに座っていた。夫婦はいまだにそこにいる。最後の審判の時までいるかもな
あ。

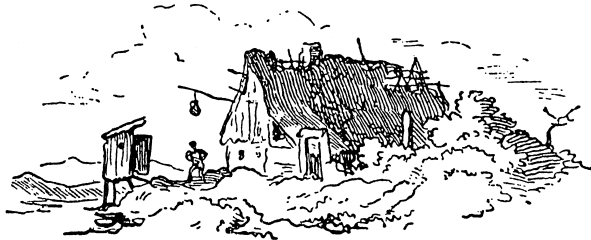
これはどんなに恵まれても決して満足できない人たちへの教訓です。

解題

KHMにおける類話であるKHM一九「漁師とその妻の話」Von dem Fischer und seiner Frauは、KHM初版第一部が一八二二年刊行されるとドイツ語圏で大層評判になった。これは、KHM四七「杜松の木の話」Von dem Machandelboomとともに、バルト海に面したボンメルン地方のヴォルガスト生まれの画家フィリップ・オットー・ルンゲ Philipp Otto Runge（一七七七—一八一〇）によってボンメルン方言で記され、『少年の魔法の角笛』*Des Knaben Wunderhorn*の出版元ツィンマー J. G. Zimmer に一八〇六年に送られ、同民話集の編纂者の一人アヒム・フォン・アルニム Achim von Arnim を通じて一八〇九年クリム兄弟に手に渡った原稿に基づいている。さて、こちらDMBでは、エルザスのアウクスト・シュテーバー August Stöber（一八〇八—一八四）編著『エルザス小民衆本』*Elsässisches Volksbüchlein* Straßburg 1842収録のものに基づき、ベヒシュタインが底本のエルザス方言からほとんど逐語的に翻訳した、とのこと。

A T五五五「漁師とその妻」The Fisher and his Wife。

原題 *Mann und Frau im Essigberg*。



五六 小鼠ザンボール、あるいは動物たちの信実の友情



ある広大な森にたくさん野生の動物が棲んでいた。そこに大枝をたくさん伸ばした大木が一本あり、樹上に鴉が一羽巣食っていたが、ある時鳥獲りがやって来て、木の下に罫を張るのを見てびっくり仰天、よくよく思案してこう考えた。この獵師が狩りの道具を張ったのはおいらのためか、それとも他の動物のためか。一つ見届けてやるうじやないか、と。そのうち鳥獲りは地面に種をばら撒き、罫

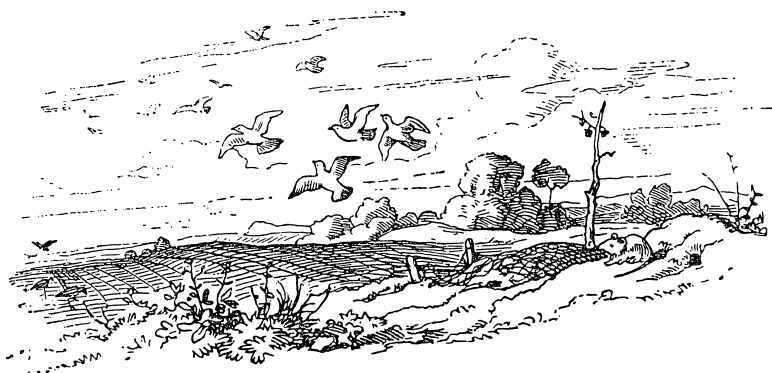
をうまく仕掛けて、そっと待ち伏せした。その後間もなく一羽の鳩が一群の他の鳩とともにやって来た。この鳩は群の指導者だった。鳩たちは種は見つけたが、罫に気付かなかったので、それに掛かってしまい、罫はぱっと閉じ、鳩たち全部に被さった。鳥獲りは喜び、鳩たちは騒がしく羽ばたいて右往左往した。すると指導者の鳩が他の鳩たちに向かってこう言った。「自分の力だけに頼らないのよ、自分の身だけを可愛がらないのよ。皆で一遍に飛び上がりましょう。もしかしたら、罫と一緒に空へ持つて行けるかも知れない。そうすればだれか一羽が自由になって、他のも一緒にそうなれるかも」。他の鳩たちはこの忠告に従い、一遍に飛び上がり、罫も一緒に空高く持つて行った。鳥獲りはあつげに取られ、自分の網がどこでまた地面に落ちるか見届けようと後を追っ掛け、一方鴉は、自分も後を随いて行って、この奇蹟がどうなるか見たいものだ、と考えた。

利口な鳩の指導者は自分たちが飛んで行くのを狩人が追っ掛けて来るのを目にして、仲間たちに言った。「ご覧、獵師がわたしたちの跡を跟けて来る。わたしたちが道の真上の方向を飛び続けると、ずうっと獵師に見られっぱなしで、振り切ることができないでしょう。でも、山や谷を幾つも越えて行けば、わたしたちを目に留めていられなくな

って、追跡を中止するに違いない。もう見つからない、と諦めるだろうから。ここから遠くない場所に穴が一つあってね、わたしのお友だちの鼠が棲んでいるの。あのひとのところに行けば、この網を噛み破って、わたしたちを救い出してくれるに決まってる」。

鳩たちは指導者の忠告に従い、鳥獲りから自分たちが見えなくなるようにした。鴉はというと、この顛末がどうなるのか、鳩たちはどうやって救い出されるのか、自分が危ない目に遭った時にそうした救助策を利用できるかどうか、知りたいものだ、と鳩たちの後ろをゆっくり飛んで行った。

そうこうするうち鳩たちは小鼠が棲んでいる穴に辿り着き、下に降りた。見ると、鼠は地下の住まいのために何百という穴と入り口を持っていて、危険が迫ると至るところに身を隠すことができるようにしているのだった。鼠の名はザンパールといった。例の利口な鳩は友だちの名を呼んだ。「ザンパール、出ておいで」。すると小鼠は穴の中から叫んだ。「あんたはだあれ」。そこで鳩が叫んだ。「わたしよ、あなたのお友だちの鳩よ」。すると鼠は穴の一つから用心深く外を覗いて訊ねた。「おや、お仲間さん、そんな風にだれに網を掛けられたの」。鳩いわく「あら、いとしいお友だち、神様がひどい運命をお遣わしにならないものなんていないってこと知らないの。この時期と来たらまあ、当てにならない中でも一番ひどい陰険な季節だわ。美味しい麦の粒が撒かれて



いたんで、わたし、目をごまかされて嘘八百の網がつい見えなかった。それで仲間と一緒にそれに嵌まり込んでしまった。上から下される宿命から身を守れっこないわよね。なにしろお月様やお日様だって月蝕・日蝕は免れないし、底なしの湖の深処からだって人間の騙くらかしの仕掛けは魚をおびき出すもの。そんな具合に人間って空という海原から鳥をまやかしの罠に掛けるんだ」。

鳩がこういったことを大いに雄弁にしゃべり終わると、鼠は網を噛み破り始めた。それもお仲間さんの鳩がいる場所から。でも鳩が言うには「他の鳩たち、わたしの姉妹たちのところから始めて。で、あなたが皆を自由にしちゃってから、わたしも自由にして」。でも鼠はそれに従おうとしなかった。相手は繰り返し頼んだのだけれど。そしてもう一度鳩が鼠にそう頼み込むと、鼠はこう訊ねた。「あなた、助けて欲しくないみたいなのに何度もそんなこと言うのね、どうして」。鳩はこう答えた。「そう頼んでも怒らないでね。ここにいるわたしの姉妹たちはわたしを信用して群の指導者にしたの。進んでわたしに従って、信頼しきってね。そうしてわたしの不注意のせいで網に掛かってしまったのですからね、姉妹たちの解放の方がわたしの解放より先だって考えるのが当然なものだわ。皆が一斉に力添えをしたんでなけりゃ、鳥獲りの罠ごとわたしも空に飛ばしてもらえなかったんだから、なおさらよ。それからね、あなたはそのうち他の鳩たちところの網を噛み破るのに疲れちゃうかも知れない。でも、わたしが、あなたの一番大事なお友だちが、まだ網の中にいるってことが分かかっていけば、わたしを見捨てたりしないものね」。

そこで小鼠はこう言った。「おお、いとしい、優しい鳩さん、鳩の君さん。そんな風に考えるなんて、あなた、とっても立派ねえ。お蔭であなたとあなたのお仲間の愛がうんと強まるわ」。そうして鼠は網を至るところで噛み破ったので、鳩たちは自由の身になって嬉嬉として目的地へ飛んで行き、鼠は元通り小さい穴にちよろりと潜り込んだ。近くの木の上に止まっていた鴉はこれをすっかり見届け、聴き澄まし、こう独りごちた。「おいらがこの鳩たちと

同じような陰呑けんのんな立場にならんとは限るまい。となれば、災難から救出してくれる気高い友だちがいるってのはなんと素晴らしいことじゃないか。この鼠と親しい仲になればいつでもどこでも役に立つかもなあ」。

そこで鴉は止まっていた木から下りて、穴のところらびよんびよん跳ねて行って「ザンパール、出ておいで」と呼んだ。すると穴の中で小鼠が叫んだ。「あんたはだあれ」。そこで鴉いわく「おいらは鴉でな、あんたの大事なお友だちの鳩の身の上に起こったことを見たんだ。そしてあんたの信実まことのお蔭でありがたいことに鳩が助かったこともな。

それでおいらもあんたと仲良しになればなあ、と思って来たんだよ」。するとザンパールは、利口な小鼠は、穴から出て来ないでこう言った。「あんたとあたしの間には友情なんてできっこない。賢い者がやつのけようと努めるのはできることだけ。できないことをやろうとするのは賢くない連中だわ。舟を陸の上で、手押し車を海の上で動かそうってなものよ。どうしてあたしたち、仲間になれるっての。あたしはあんたの餌えさで、あんたはあたしを食べる方なのに」。鴉が言った。「小鼠や、おいらの言うことを分かっておくれ。おいらのしゃべることをよく考えておくれ。

おいらがあんたを喰ったりして、あんたが死ぬのがおいらに何の役に立つ。おいら、あんたが生きることがおいらにとっても助けになるようにしたいんだ。隠して身につけていても好い香のする龍涎香りゅうぜんこうみたいにいついつまでも続くようにしたいんだ」。それに対して鼠の言うよう「あのねえ、鴉、貪欲から生じる憎しみほど大きいものはないのよ。獅子と象は強いがためにお互い憎み合う。これは勇氣と闘いから出る高貴で平等な憎しみだわね。でも、弱い者への強い者の憎しみはしんから凝り固まっている。これは賤しい不平等な憎しみ。大鷹おおたかは鷓鴣しよこを、猫は鼠を、犬は兎を、そしてあんたは——あたしをね、こんな風に憎むものなの。水を火の傍に寄せて熱くしてご覧。そうすると傍の火みたくにかっかとなるわね。でも、だからといって火じゃあないんだし、決して火の友だちでもなくって、火の中にぎつとぶちまけられりや、火をしゅうつと消しちまう。賢いひとたちは言ってる。敵に好意を持つ者は、毒蛇を手

にする者同然、いつ咬かまれるか分かりやしない、ってね。利口者は絶対に敵を信用しないで、遠ざかっているもの。さもないと、蛇に拘かわった男の身に起こったようなことが起こるのさ」。

「そいつに何が起こったんだい」と鴉カが訊ねると、鼠は次のような昔話メルヒェンを語った。

解題

以下五九「鼠ザンバルの身の上話」まではいわゆる枠物語の形式になっている。

ペヒシュタインいわく。連鎖昔話 *Marchenkette*。部分的には口承。KHMでも語られている。ここで専ら依拠したのは『古いにしえの賢者たちの諭し、金言、その他』*Der alten Weisen Exempel, Sprüche, etc.* (フランクフルト・アム・マイン、一五九二)なる書籍。

これはインドの『パンチャタントラ』(サンスクリット語で記された古代インドの教訓書。『五部から成る書』の意。王の子息の教育のため編まれた、ということになっている寓話・説話集成。第一部「友人仲違いの巻」、第二部「友人獲得の巻」、第三部「鴉と梟の戦いの巻」、第四部「得た物を失うことの巻」、第五部「細かい配慮を欠いた行為の巻」から成っている。人生の知恵に満ちている枠物語形式の書。インドで広く普及、ために少なからぬ異稿が存在するが、それからまたベルシアなど周辺諸民族の文学に流入した。寓話の比較研究に重要な意味を有する)の最初の独訳書である。『パンチャタントラ』はアラビア語訳(イブン・アル・ムクアッファアの『カーリラとデイムナ』*Dunai-Muqatta. Kalila und Dimna*)からヘブライ語に訳され(ラビ・ヨエル Rabi Joel)、それから更に十三世紀にラテン語に訳され(ヨハンネス・デ・カプア)〔カプアのジョヴァンニ〕「人生の導きの書、もしくは古の賢者たちの寓話」*Johannes de Capua* 〔*Giovanni da Capua*〕*Directorium vitae humanae alias parabola antiquorum sapientum*。ちなみに *directorium* は中世ラテン語で *iter rectum* (正しい道)の意。 *sapientum* (「賢者たちの」)は古典ラテン語的には *sapientium* となるべきだが、複数属格で「落着くのは、中世ラテン語にはよくある癖」、十五世紀の七十年代にドイツ語になった(フライザハ出身のアントン・フォン・プフォル Anton von Pforr aus Breisach)の手で。ヴェルテンベルク伯爵エーバーハルト五世の命により)。この独訳稿が最初に上梓されたのは一四八三年ウルムにおいて、最後の印刷は一五九二年フランクフルト・アム・マインで。ペヒシュタインは後者、すなわち一五九二年版の底本にかなりきちんと従っているが、しばしば短縮したり、時として脚色を施したりしている。

なお、同書はその後、『古の賢者たちの譬諭の書』*Buch der Beispiele der alten Weisen* という題で、ルートヴィヒ・ホラントにより一八六〇年シュトゥットガルトで、また、フリートマール・ガイスラーにより一八六二年ベルリンで出版されている。

原題 *Das Mäuslein Sambar, oder die treue Freundschaft der Tiere*

五七 男と蛇

昔一人の男がいた。男の家には蛇が一匹棲んでいた。この蛇は男の妻に優しく扱われ、毎日餌をもらっていた。その棲処はいつもぼかぼか暖かい竈のすぐ近くの壁の穴の中にあつた。なんとね、男とその妻は、良く知られている俗信が唱えるように、蛇が家にいると運が向く、と思ひ込んでいたんだ。さて、ある日曜日のこと、こんなことが起こつた。主人は頭が痛かつた。だもので、自分は早くから寢床に潜つたままで、妻と雇い人たちには教会に行くように言つた。そこで一同が出掛けてしまい、家中がしんと静かになると、蛇が音も無く巢穴から這い出して来て、そこいらじゆうをしげしげと見回した。男の部屋の扉は開けっ放しだったので、男はそれを目にして、蛇が日頃の習慣とは反対にこうしてしげしげと見回しているのを内心訝しんだ。蛇は台所の隅から隅まで這い回り、男の部屋にも来て、中を覗き込んだ。でもだれも見えなかつた。主人は隠れていたから。すると蛇は汁の入つた深鍋が火に掛かつている竈に這い上がり、頭を垂らすと、毒液を深鍋の中に吐き、それからまた自分の穴に戻つて隠れた。主人はすぐさま立ち上がり、深鍋を手に取り、それを中の食べ物と毒ごと土の中に埋めた。やがて飯時の、蛇も普通出て来る時間になると、男は斧を一丁持つて穴の前に立つた。蛇が這い出したら胴体から頭を切り落としてやろう、と思つて。しかし、蛇はまず穴からほんのちよつと、とても用心深く頭を出しただけだったので、男が斧を叩きつけると、電光石火の速さで引つ込み、良からぬ魂胆があつたことを明らかにした。数日後女房は夫に言つて聞かせた。蛇と仲直りしなさいな、多分もう悪いことはしないでしょうから、と。亭主は気のいい人間だったので、ご近所の一人を呼んで、蛇との和解の約束の証人になって、お互いに害を加えないという協定を蛇と結んでくれるよう頼んだ。そうしてから蛇に声を掛けて提案したところ、蛇はこう返辞した。「だめだね。あたしらのつきあいにはこれからもう信義なんて

ありやしない。だって、あんたはあたしがあんたんとこの深鍋にしたことを忘れないだろうし、あたしはあたしで、あんたが良く切れる斧でこの頭目掛けて切りつけたことを忘れっこないから、あたしらのどっちも相手を信用しないでしようよ。手出ししないであたしを出て行かせとくれ。あんたにして欲しいのはそれだけさ。あんたから距離を置けばおくほどあたしにやけっこうだ。で、あんたはのんびりうちにいればいい」。そこで、そういうことになった。

小鼠のザンボールからこうした物語を聴かされた鴉カラスは、また言葉を継いでこう言った。

「あんたの話に含まれてる教訓は、おいら、よく分かるさ。でも、あんたの性格とおいらの真心を考えておくれ。そんなに厳しくならないで、あんたの仲間になりたいっていうおいらの気持ちを拒まないでおくれ。高貴と賤しいの間には違いがある。黄金きんでできてる酒盃さかずきは硝子ガラスでできてるのより長く保もつし、硝子の高脚杯ポカールが壊れりやそれつきりだが、黄金の高脚杯ポカールに傷が付いても、値打ちは無くならない。邪で賤しい根性の持ち主同士の友情は友情なんかじゃないさ。でもあんたは高貴な心を持つてる。おいらにやそれが分かったんで、あんたと友だちになりたいと焦がれているし、おいらにやそれが必要なさ。おいら、あんたの棲処の入り口から引き下がらない。あんたがおいらの願いを聞き届けて



くれるまで飲みも食いもしないつもりだ」。

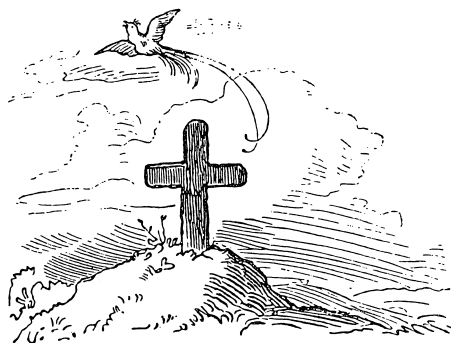
これを聞いた利口なザンパールはこう言った。「それじゃあんたのお仲間付き合いを承知するよ。なにしろこれまであたしは真つ当な頼みごとを聞き入れなかったことは決してないもの。でもね、よく考えておくれよ。あたしがあんなに無理強いらしたんじゃないし、自分の住まいにいてあんたからは安全な身なんだったことをね。けれど、あたしは自分の助けが要り用なひとならだれの役にも立ちたいと願っているんだ。だからまあ、あんた、自慢しないことだよ。はは、あたしと来たらうっかり者の分別の無い鼠だねえ。——狐に拘わったあの雄鶏おんどりみたいなことがあたしの身に起こりませんように」。

「そりゃまたどういふこつたね」と鴉カラスが訊くと、小鼠はこんな譬たとえ話を語った。

解題

この物語冒頭の「蛇が家にいると運が向く」という俗信（裏返せば、「家に出る蛇を殺せば不幸を招く」となる）は、KHM一〇五「蛇のお話（その一）」Marchen von der Unke（二）を想い起させる。こうした俗信により、家付きの蛇 Hausschlange には皿にミルクを入れてあてがう風習が生じたし、KHM一〇五のたぐいの話が少なからず語られた。

原題 *Der Mann und die Schlange*.



五八 雄鶏おんどりと狐

ある寒い冬のこと、腹を空かせた狐が巣穴から出て、獲物を捜していた。するとある莊園ぢやんで一羽の雄鶏が続けさまに啼ないているのを聞きつけた。この雄鶏、一本の桜の木の上に止まって、もう一晩中ずうっと啼ないていたのだった。

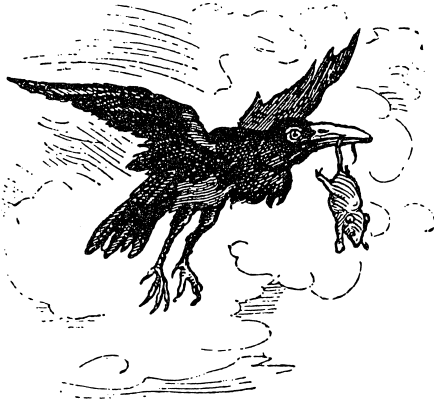
さて狐はそつとその木に歩み寄り、こう訊ねた。「雄鶏さんや、寒い真つ暗な夜だつてのに何を歌つてるのかね」。雄鶏いわく「わしは夜明けを告げておるのだ。わしは天性夜明けの到来が分かるのでなあ」。狐応えて「おお、雄鶏よ、未来の事が分かるなんて、あんた、神様みたいな力を持つてるんだねえ」。そうしてすぐさま踊り始めた。今度は雄鶏が訊いた。「狐さんや、あんた、なんで踊ってるんだね」。狐の返辞「あんたが歌うのと同じだよ、おお、賢者よ。

おいらが踊るのはもつともなことさね。だつて、楽しくやつて喜ぶのに相応しいもんな。おお、雄鶏よ、あらゆる鳥たちの高貴な王者よ。あんたは空を飛ぶ才能に恵まれてるばかりじゃない。自然は気高い予言の力も授けてくれたのだ。自然は他のどんな動物よりあんたが格段にお気に入りなんだ。ご好意を戴ければ、おいらとつてもありがたいんだ。あのね、賢さで一杯のご尊頭そんちゆうに接吻くちづけしたくて堪らないんだ。そうしておいらが友だち連に、おいら幸せ者よ、ある予言者が接吻せよ、つてその頭を垂れてくださつたんだぜ、としゃべることができたら、ひどく羨ましがられるだろうなあ」。愚かな雄鶏は狐のお世辞たらたらを信じ込んで、木から飛び下りると、接吻させるために頭を狐の前に突き出した。ぱくつと一咬かみで頭は喰いちぎられ、狐はげらげら笑つてこう言つた。「おいら、まるつきり分別つてやつを持ち合わせない予言者様にお目に掛かつたわい」と。

こうした寓話を語り終えると、小鼠は鴉に向かつてこう続けた。「あたしがあんたにこんなことをしゃべつたのは、あたしがその雄鶏であんたがその狐、あたしが餌えさであんたがあたしを食べる方だ、つて思つてるからじゃないんだよ。

それよかあたしは、あんたが蛇みたいに二又ふたまたに割れた舌「二枚舌」を使ったんじゃない、って思いたい。こう言うかきと鼠はそのちいちゃい巢穴の口に引っ込んだ。鴉かきは訊ねた。「ねえ、どうしてあんた戸口を動かないんだい。どうしてそんなにためらって、おいらのところへ出て来ようとしなんだい。相変わらずおいらのことがおつかないんかい」。すると小鼠はこう返辞。「あたしはあんたを信用もし、信頼もしてる。なにせあんたが好きだからね。それにあんたが裏切るんじゃないか、って心配だからそっちへ出て行かないんじゃないか。でもね、あんたにゃ同じ種類のお仲間が大勢いるだろ。そのお仲間はお仲間とお仲間と同じ気立てじゃないかも知れない。そういうのはあんたのようにあたしと友だちにゃならない。だれかに見られたら、そいつがあたしを食べるんじゃないか、って怖おそいのさ」。すると鴉はこう言い切った。「信実まことの仲間同士ってのはとりわけこういうもん





なんだ。ほんとに信実ある友だちなら、友だちの敵もやっぱり敵なのさ。信じておくれ、ザンパール、おいらの女友だち、おいらと全く同様にあんたの友だちにならないような友だちなんておいらの友だちじゃあない。それにおいら、あんたを守り、庇い抜くほどの力だって十分持つてるよ」。そこでとうとう小鼠ザンパールは穴の中から外へ出て来て、未来永劫^{かわ}渝らぬ友情の契^{ちぎり}を鴉と誓った。それが済むとふたりは和氣藹藹^{あいあい}と仲睦まじく隣り合っつて一緒に暮らすようになり、毎日楽しくいろんなお話を語り合っつたもの。

でもやがてある時鴉が鼠にこう言った。「ねえ、ザンパール、いとしいおいらの女友だち、あんたの棲処^{すまか}はとつてもやかましいし、道路つぱたに近過ぎる。おいら、いつかあんたかおいらを射ち殺したり怪我させたりするようなやつが現れるんじゃないか、って気懸かりでならない。それにここだとおいらの食べ物を見つるのが難しいんだ。でもね、おいら、知ってるんだ。愉快で、ここより何かと便利な居場所をさ。そこにや池もあれば草原もある。果物も餌もある。それにね、その池にはおいらの古馴染みの女友だちも住んでるんだ。いやもう全く信実のある仲間なんだ。あんたがおいらと一緒にあっちへ引っ越ししてくれるといいんだがな」。

「あんたのためなら喜んでそうするよ」と鼠。「あたし自身だつてここじゃびくびくもので、ほんとにわが身が安全だなんて思っつてない。そういうわけで、ご覧の通りあたしの住まいにやどっさり出入り口があるんだもの。大好きなお友だち、実はね、あたしはこれまでなんともいرونな危ない目に遭つたんだ。これについちゃあ、あたしたちが新しい居場

所に着いたらとつくり話してあげる」。

そこでふたりはこれまでの棲処におさらばをすると、鼠の尻尾をくちばし嘴にくわえた鴉は鼠と一緒に意中の土地へと飛んで行った。そこに到着すると、一匹の動物が水の中から頭を突き出したが、鼠を目にするとびっくり仰天。なにしろ鴉が嘴から放した生き物の素性を知らなかったから。そこで急いで潜ってしまった。鴉は一本の樹に飛び上がると「コラクス、コラクス」と叫んだ。するとその動物は水から出て来た。これは鴉の女友だちのカメ亀だった。亀は鴉に再会できたのを喜び、どうしてこんなにも長いこと余所よそに行っていたのか、と訊いた。そこで鴉は鳩と鼠の話物語り、女友だち同士を紹介した。亀は鼠の優れた思慮分別に驚嘆し、は這い寄って挨拶すると、知り合いになれたのをことのほか嬉しがった。それから鴉は、自分と古馴染みの女友だちに身の上話をしてくれるよう、鼠に頼んだ。鼠はいそいそと承諾して、次のように語り始めた。

解題

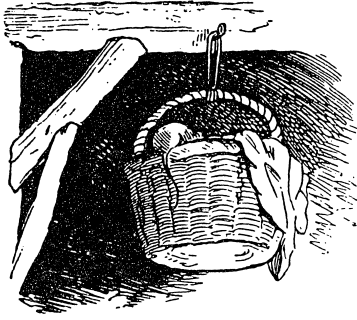
ベヒシュタインがなゼラテン語で「鴉」を指す「コラクス」*Corax*と同じ音の *Kornix* を亀の名にしたのかよく分らない。D M B 五〇「のらくら国の昔話」解題でも言及したが、ベヒシュタインはでつちあげのおふざけが好きだから、これもその一例か。

原題 *Der Hahn und der Fuchs*

五九 鼠ザンパールの身の上話

「あたしが生まれたのはあ
る信心深い隠者の家でね。あ
たしらは兄弟姉妹がうんと
こさだったけど、あたしの父さ
ん母さん——もう死んじゃ
ったけど——以外にもその
兄弟姉妹がいたし、それから
男や女のいとこたち、その連
中の子どもたちちつてのが、
皆みいんな一緒にこの家で暮らし
てた。食べ物に事欠いたこと
は一遍もなかった。なんでも
かんでもあった。だって、親
切なご近所の衆が隠者のと
ころに毎日麴パンや粉チーズ、
卵バターや牛酪、果物や野菜なんぞ





を運んで来てくれたもんで。必要よりずうつとたくさん。自分たちのためにお祈りして欲しい、ってわけだね。隠者が皆の衆のためにお祈りしたか、それでそれがいくらか皆の衆に役立ったか、そりゃあどうだかあたしにや分からな
いけどさ。ところで、隠者はあたしやあたしの家族親類縁者一同にこういったものをくれやしなかった。台所の真
中にそれをしまっておく籠をぶらさげてあつたんだ。あたしらがこれに届かないように。でも、年若の小鼠だつた
あたしは深謀遠慮つても兼ね備えてた上、こと勇氣となるとつても図抜けていたから、近くの壁から籠の中にびよ
んと跳び込んで、食べられるだけ美味しく戴くと、残りを身内に投げ落としたものさ。ああいう日は連中にとつてほ
んとにお祭り騒ぎだつたよ。隠者は台所に入つて来て、事の次第が分かると、籠をもつと高く吊り直す手配をした。
ところでそのうち隠者の巡礼仲間（註）がお客に来て、隠者は及ぶ限りのおもてなしをしたもんだ。一緒に食つたり飲んだ

りが済むと、隠者は食べ残しを籠に集めて、新規の場所に吊るし、それでも小鼠
がやっぱり潜り込むかも知れない、用心しなけりゃ、と物思いに耽つた。お客の
方は陸路海路（註）を辿つた自分の巡礼行や、でくわした冒険、凌いだ苦難の数数につ
いておしゃべりを始めたが、主人役が終始一貫、半ばは心ここにあらず、半ばは
体も目も籠の方に向けている、つてな風なのに気付き、機嫌を損ねてこう言つた。
『わしはこの上なくおもしろい冒険の話をしとるのに、おぬしはついで注意を払
わず、どうやらてんから興味はなさそうだの。——『めっそももない』と隠者
は答えた。『わしは喜んであんたの話をお聴いておる。だがな、鼠どもがまたぞろ
食糧籠に入り込まんよう目を配つてもおらにゃならんだ。なにしろ害獣の奴ら、
悉皆（註）わしを喰い倒しよつて、こちらの食糧はろくすっぽ残らぬといつていたらく。

特に一匹の鼠が問題で、こやつ、他の連中の代表で食糧籠に跳び込みよるのだて。隠者が言ったのはこのあたし、ちびのザンボールのことだったの。すると巡礼仲間はどう言葉を返した。『おぬしがそう言うたので、ある女についての寓話を思い出すのだがの。この女、仲間の女に言うたもんだ。《あの女がね、箕で振るった小麦をまだ振るってないのと取り換えっこするのには、必ず何か訳がある》、とな。』「へえ、そりやまたどういうこった。いったい何の話だね」と隠者が訊くと、巡礼が言うには『ま、聴くがいいわさ。旅の途中ある時わしはある立派な男の許に宿を借りた。わしが隣の部屋で寝ていると、家の主人は妻にこう言うた。《おまえなあ、わしは明日友人たちを何人かお客に招くつもりだ》とな。おかみさんの返辞ときたらこうさ。《来る日も来る日もお客を呼んでちゃ所帯を張っていられませんよ。あなたと来たらそうやって持つてる物を使い散らす。とどのつまりは家屋敷中あたしたちにはもう何一つ残らないってことになります》。すると亭主いわく《女房どん、わしがそうしたいちゆうことに、目くじら立てんでおくれ。とりわけこういったことではな。あのなあ、いつもけちけちして、浚い込み溜め込む一方だが、決して吐き出そうとしないくせに、持つてる物を楽しむことがないやつは、あの狼同然の最期を遂げるのだ》。《その狼の最期っていったいどんなことなんです》とおかみさんが訊くと、旦那はこんな物語をした。《昔むかし、猟師が一人おったそう。この男が得物の飛び道具、つまり矢と弩いしゆみを携えて森に出掛けたところが牡のろ鹿こに出くわした。で、これを射倒して、うちに運ぼうと背中に背負ったのさ。ところが今度は熊に出くわした。熊公、まっしぐらに猟師に向かって来た。そこで猟師は身を防ごうと慌てて弩の弦を張り、矢を装填そうてんした。装填したはいが狙うことができなんだ。のろ鹿が邪魔だったものだからの。そこで急いで弩を地面に置き、山刀やまばを引き抜いて、熊と闘い始めた。で、猟師は山刀をぐっさり熊の胴中に突き刺したが、その瞬間熊が猟師を抱きすくめ、押し潰して殺しちまった。熊は大層な傷を負ったのを感じると、吠え猛って、怒りのあまり傷口をもっと大きく引き裂いたんで、まもなく血を流

して死んじまった。夕方一匹の狼がそこへやって来て、死んだ牡のろ鹿と、死んだ熊と、死んだ獵師を見つけたわけさ。これにゃあ心底喜んで、お腹なかの中でこう言ったもの。ここでおいらが見つけたものは全部おいらのものに取っておこう。これで長いこと食って行けるわい。兄弟どもにゃあこれっぽっちもやらねえ。蓄えがあれば殿様とんざう、と諺で言うからな。今日のところは儉約して、何にも触らずにおこう。おいら、腹べこだが、そうすりゃ宝物は長持ちすらあ。だが、弩が転がってるわい。こいつの弦なら舐めてもよかるうて、とな。で、こうして狼が弦を引き絞った弩に拘かかわり合っていると、弦の掛け金がばちんと外れ、装填されていた鋼鉄の矢が狼の心臓のまん真ん中を貫いたのさ。

——ほらね、おまえ、そう、わしが聴き耳を立てていると、亭主が言葉を継いだのだ』と隠者に向かつて巡礼仲間が言ったのよ』と小鼠ザンパールは友だちの鴉と亀に物語った。「『——ほらね、おまえ、これが手本だよ、集めたあげく、その集めた物を信実まことの友だちと一緒に味わおうとしなのが必ずしもいいわけじゃない、っていうな』。これを聞いておかみさんは言うたもんだ。『あなたのおっしゃる通りかも知れないわね』と。さて、朝になると、この女房は起きて、脱穀した小麦を取り出して水洗いし、乾燥するように拡げ、その番をするように自分の子を傍に座らせ、それから他の仕事を片付けに出掛けた。だがな、この子は他の子どもたちと同じで遊びほうけ、小麦に注意したりはせなんだ。するとそこへ牝豚がやって来て、小麦をむしゃむしゃ喰い散らかし、喰わなかった残りは穢よごい物で汚してしまった。女は帰って来て、残った小麦を見てげつとなり、拾い集めると、市いちに出向いて、その小麦を脱穀してないのと同量で交換する、と店を張った。すると、わしは、この女の近所の女が起こったことを見届けていて、他の女に皮肉たっぷり言うのを聞いたのだ。『ご覧な、あの女と来たら、脱穀してある小麦を脱穀してないのと格安で交換するんだとさ。こうしたことには何でも訳があるもんだよ』とな。同じことがおぬしの言う、他の鼠ども皆のためにあの籠に跳び込むちゅう、その鼠にも当て嵌はまる。それにゃあ多分そうなるだけの訳があるうさ。わしに鶴嘴つるはし

を一丁貸してくれい。一つ鼠穴を掘り返してみるでな。そうしてその訳なるものを見つけやろう』ってね。――

この話をあたしは」とザンボールは語り続けた。「遊び仲間の一人のちっちゃな穴の中で聴いていたんだけどね。あたしの巢穴にはギョルデン金貨(註)が何千枚と隠されていたのさ。だれがそこに置いたものやら、あたしも隠者も知らなかったんだけど。あたしは毎日金貨を玩具にして、気晴らしにたつてわけ。巡礼は穴を掘り返して、すぐに黄金を見つけてしまい、それを取り出してこう言った。『そら、見たことか、この黄金の力のお蔭で、その鼠公(註)は高く吊るされた籠の中に大胆に跳び込めるほど強くしてもらったのだよ。これからはもうそんなことはできまいがな』。この言葉を耳にしてあたしはがっくり。そしてまもなく悲しいことにそれがほんとだつて分かったのさ。朝になると、他の鼠たちが勢揃いでやって来て、いつものようにあたしから食べ物をもらおうとした。一同これまでになくお腹を空かせていた。でも、あたしには、これまではいつもできたし、やってのけもしたことが――籠の中に跳び込むことが――できなかつた。力がすっかり消え失せていたもんでね。そしたらすぐさま、自分が他の鼠たち、ごくごく近い友だちや身内からさえまるきり冷たくあしらわれるようになったのが見て取れた。いやね、あの連中は心配になったのさ。しまいにはあたしに何かくれてやらなきゃならなくなる、あたしを養わなきゃならなくなるだろう、って。そういうしだい皆でんで行ってしまい、だれ一人あたしに目を向ける者はいなかつた。まるであたしが連中をこの上もなくひどく侮辱したとでもいうように。

そこであたしは胸の裡(註)で心悲しくこうつぶやいた。『親友たつていざつて時には大して当てにはならぬもの。切羽詰まった境遇ならばいよいよもつて頼みにやらぬ(註)。一文無しには兄弟無し。兄弟無ければ、身内もない。身内が無ければ、友だちもない。友だち無ければ、忘れられてしまう。貧乏つてのは切羽詰まった境遇。貧乏ならば病氣も同じ。貧乏ほどひどく痛む傷はない。金持ちはちやほや褒めそやされるが、一旦貧乏になつたとすると、二倍三倍



に誇られる。鷹揚で客好きだったなら、浪費家ってことになるし、上品で開明的だったなら、高慢ちきで議論好きってことになる。静かで無口だったなら、憂鬱症ってことになる。話好きだったなら、おしゃべりってことになる。死だつて貧乏ほど酷くない。貧乏人にとっては、けちん坊に、助けてください、と頼むより、毒蛇のかつと開いた口に手を突っ込む方がまし」とね。それからあたしが見ていると、巡礼と隠者は見つかったギョルデン金貨をぴったり半分づつ分け合つて、ご満悦で別れを告げた。で、隠者の方は分け前の金子を寝台の枕の下に置いた。あたしは、消え失せた力を元に戻すためにそのうちから幾らかせしめられないかな、と考えた。だけど隠者はあたしの立てたかすかな物音に目を覚まし、ぴしゃりと一撃を喰わせたので、あたしは、自分の頭がどこへ行つたやら、どうやって自分の穴に帰つたものやらも分からなくなつた。それでも黄金が欲しくていたたまれなかつたので、もう一度やってみた。すると隠者はまたしてもひどくあたしを打つたので、あたしは血を流し、瀕死の重傷を負つて巢穴に逃げ込んだ。それでももうあたしはこりこりし、黄金だのお金だのって考えるだけでも

おっかなくなり、苦しませつなさの中でこんな四つの格言を唱えたものさ。自分の身上をけつこうと思ひ、ひとの物を欲しがらないのが何にも増しての上分別。行儀が良くなきゃ上品じゃない。足るを知るのが豊かつてこと。賢者は手が届かない物は欲しがらない、とね。そこであたしは貧しくとも清い心で頑張ろうと思ひ切り、隠者の家をおとにして、曠野に彷徨い込んだ。そしてそこに棲処をかまえ、あの温厚な鳩と知り合いになつたわけ。あの鳩があたしのとこに助けを求めに来、それであんたも、ねえ、お友だちの鳩、あたしの仲間になつた

のね。で、この鴉は、亀のコラクス、あんたとお友だちだつてことをいろいろあたしに話した。そこであたしは、あんたとぜひ知り合いになりたいな、つて思うようになったの。だつて、この世には信実まことあるお友だちとつきあうようになるほど素晴らしいことはないし、たった独りで、お友だちがいなくているほどひどく悲しいことはないもの」。

こう言つて利口なザンバルは身の上話を締め括くつた。亀はこの言葉を聞くと、しごく穏やかに親しげにこう言つた。「とっても為になる身の上話をほんとにありがとうね。あんたはたくさんさんのことを経験したから、知恵があんたの宝物になつたわ。知恵は黄金なんかよりずっと増しよ。さあ、これからこの土地で淋しさ辛さを忘れて頂戴。そして、たとえこの世の富が無くても、清い心映えは敬われる、と考へて。獅子は眠つていようと目覚めていようと怖がられるわ。どこへ行こうと力が共にあるもの。賢者は居場所を変えるのが好きよ。知らない土地の風俗と馴染みになれるように。そしてお伴に選ぶのは黄金なんかじゃない。そうじゃなくて——分別なの」。

鴉はこうした言葉を聞き、自分の女友だち連が互いにすっかり打ち解けたのを心から喜び、友情溢れる挨拶を述べた。そうしていると、一頭の牡角鹿ヒルシユが走つて来た。信実ある動物たちはその物音を聞きつけるなり逃げ出した。亀は水の中へ、鼠は穴の中へ、鴉は樹の上へ。牡角鹿ヒルシユが水辺に近寄ると、鴉は空に舞い上がり、もしかして獵師がこの牡角鹿ヒルシユを追っているのかしらん、と見届けようとした。でも、だれも見えなかつたので、女友だち連に呼び掛けると、二匹はまた出て来た。亀は、牡角鹿ヒルシユが水を飲むのをためらうかのように頭を伸ばしまま水辺に佇たずんでいるのを見て、こう声を掛けた。「御前様ごぜんさま、喉が渴かわいてらっしゃるなら、お飲みなさいな。ここじゃだれも怖がることはありませんよ」。すると牡角鹿ヒルシユは頭を下げて亀に挨拶を返し、歩み寄つたので、亀は、どこから来たのか、と訊ねた。答えて「わたしは長いこと深い森の中にいた。そこで蛇たちが森の端から端まで移動しているのを見掛けたので、獵師たちが森を包圍しているのかも知れぬ、と心配になり、ここへ身を避けたのだ」。亀いわく「ここへはまだ獵師が来たこ

とはないわ。だから怖がることはありません。それで、あなたがここに住むつもりなら、あたしたちのお仲間になる
 とい。ここにはそこいらじゅうに上等の草原があるんですよ。牡角鹿はこれを聞いて喜び、自分もやはりずつと
 いることにした。さて、動物たちは蔭の多い一本の樹の大枝の下に場所を定めて、皆でそこに集まり、世の来し方行
 く末を語り合ったり、いろいろすてきなお話をしたりした。

こうしたある日のこと、信実ある動物たち、鴉、鼠、それから亀がやはり集まった。でも、牡角鹿は一向姿を現さ
 ず、不参だった。そこで動物たちは、牡角鹿が獵師にでも出くわしたのではないかと気遣い、鴉が、牡角鹿を探し
 ことづつて
 言伝を届けることになった。鴉はしばらくして自分たちの居場所からほど遠からぬところで網に絡まれて倒れている
 牡角鹿の姿を見つけ、引き返して、そのことを仲間たちに告げた。鼠はそれを聞くなり、自分を牡角鹿の許に運んで
 くれるよう鴉に頼み、そこに着くと牡角鹿にこう言った。「兄弟、いったいだれがこんな風にあんたを捉まえたの。
 あんたはとても分別のある動物の一つだって評判なのに」。牡角鹿はほうつと溜息をついて答えた。「おお、いとし
 姉妹よ。分別も上天から下される宣告から庇護してはくれぬ。走者の迅速も強者の力量も宿命という名の網を引き裂
 くことはない」。二匹がこうして語り合い合っていると、そこへ亀がやって来た。亀はできるだけの速さで這って来た
 のだった。すると牡角鹿は亀に向き直つていわく「おお、いとしい姉妹よ。そなたはなぜわれらの許へまいったのだ。
 そなたがいてくれてもわれらに何の役に立とうぞ。鼠だけならわたしを解き放つことができる。して、獵師が近づい
 ても、わたしは甚だ速やかに逃亡するし、鴉は飛び去り、鼠はちよろりと隠れる。しかし、そなたには、自然が、速
 い足取りでなく、ゆつくりとしたものに、逃げるのに不向きなものに創つたそなたには、不面目な虜囚の憂き目が差
 し迫っておるぞ」。そう言われた亀は答えた。「信実の友は、分別がありはしても、友のために死ぬならば、自分の命
 を惜しがりはいしない。救うことが叶わなくとも、力の限りを尽くしたのだ、とせめて心が慰むもの。信実の友は胸か

ら心臓を引き出して、自分の信実の友に差し出すのです」。亀がまだこう話しているうちに、鼠はもうせつせと網を噛み破ってしまっていたが、動物たちは獵師が近づいて来るのを聴きつけた。そこで牡角鹿ヒルシユは駈け去り、鴉は飛び去り、鼠はちよろりと隠れた。網が噛み破られていたのを発見した獵師が見つけたのは亀だけ。獵師は亀をとつ捉まえ、網の切れっぱしに入れてぎゅつと引つ包んだ。鴉と鼠はそのさまを目撃して悔しいともなんとも。鼠は鴉にこう叫んだ。「ああ、ああ、なんて悲しいこと。幸せに巡り合つて、次の幸せは何かな、つてわくわくしてたら、不幸せに見舞われた。すぐにまた二番目が来るんだわ。あたしは黄金を失くしただけじゃ悩みは足りなかつたんだ。今度は大好きな姉妹を取られちゃうんだ。ことのほかこの心が大好きな姉妹をねえ。悲しい、悲しいこのあたし、この身。この身は愁嘆の網から網へと投げ込まれ、授かるものといったらただ悲運だけなんだわ」。

すると鴉と牡角鹿ヒルシユが鼠に言った。「ああ、利口なお友だち、そんなに嘆くものではない。嘆いたからといって友だちの亀に役に立つわけではないし、われらが嘆き悲しんでも亀を縛いましめから自由にはできない。どうすれば仲間を救い出せるか、計略を考えておくれ」。

そこで利口な小鼠ザンパールはしばらく思案ふかに耽り、それからいわく「思いついた。あんたはね、牡角鹿ヒルシユ、急いで獵師の歩く道筋に待ち伏せして、すぐ道端に半死半生といった様子で倒れて頂戴。そして、鴉、あんたは、牡角鹿ヒルシユの体に止まって、肉を啄つばんでいるふりをしておくれ。それを獵師が見たら、持っているものを手から下ろすだろう。したら、お友だちの牡角鹿ヒルシユ、あんたはゆっくりゆっくりちよいと森の深くへと体を引きずって行くの。獵師が跡を追って来るようにね。その間にあたしが網を噛み破ってあたしらのいとしい姉妹を自由の身にするわ」。

この提案はただちに実行された。牡角鹿ヒルシユと鴉は急いで回り道を通って獵師に先行、鼠の教えた通りにした。獵師は牡角鹿ヒルシユを手に入れたくって矢も盾もたまらず、持っている物を何もかも投げ捨てた。牡角鹿ヒルシユは茂みに這いずり込み、

鴉はその後から飛んで行き、猟師は跡を追った。鼠は亀を包んでいる網を噛み破り、一緒に棲処に帰った。するとともう鴉と牡角鹿もそこにいた。この動物たちはさつさと猟師の目から隠れてしまったので。さて猟師が持ち物を投げ捨てた場所へ戻ってみると、網が噛み破られているのを発見、なんともかとも訝しくて堪らない。「こりやあてつきり悪魔の仕業に違いない。善い精霊なんかじゃあるもんか」と罵り散らしたものの、この界限には悪霊や妖術使いどもがのさばっていて、動物の姿に化け、猟師たちをおぢやらかすのだろう、と考え、震え上がって家に引き揚げ、この森では二度と再び狩りをしなかつた。こういうしだいで仲の良い動物たちは安心して睦まじく幸せに一緒に暮らした。そして時どき例の鳩もこの人里離れた美しい土地にやって来て、大好きなお友だちである利口な鼠ザンパールのお客になり、外の世界のくさぐさの噂やらいろいろのおもしろい話やらをお土産にしたので、一同これを嬉しんだ。

解題

この物語前半でベヒシュタインはこのほか粹物語形式を楽しみ、話を複雑な三重の入れ子にしている。そこで訳者は、会話部分を明示するために、三種もの括弧、すなわち、「」「『』『』」を使わなければならないが、そればかりではない、この物語全体には少なくとも次の五つの話が含まれている。

- (一) 黄金がひそかに力を与えてくれる、という伝説のモチーフと結びついている、特別な取り柄を失う者は友だちも失くしてしまう、という喩し。
- (二) 狼が獲物をたつぷり見つけるが、それを仲間と分け合いたがらず、そうした貪欲さのため命も何もかも奪われてしまう、という喩し。
- (三) 脱殻してある小麦をしていない小麦と取り替えようとした女のように、だれかが気前の良い交換をしようとする場合には、多分何か理由がある、という喩し。

(4) 牡角鹿が網に捉われの身となるが、その網を鼠が噛み破ってくれる寓話（A T 七五「弱者の援助」The Help of the Weak）。

(5) 死んだふりをした兎の笑い話を想起させる、捉まった亀を半死半生のふりをして助ける牡角鹿の計略の話。

原題 *Die Lebensgeschichte der Maus Sembar.*

六〇 兎と針鼠(18)の競走

そりゃあこの話はとっても嘘っぽいさ、
ぼうずども。嘘っぽいがな、わしにこれを
聴かしてくれた祖父様はよ、これをしゃべ
るたんびにこう言うのが癖だったよ。
「なんちゆうてもこれはほんまもんに違え
ねえ、俵はがれたち。だつてな、さもなきやひ
とがしゃべるわけがなかんべえ」とのう。
この話はな、こんな具合だったげな。

昔むかしのことだがの、刈り入れ時のあ
る日曜日の朝、丁度蕎麦そばの花が咲いとつた
頃のこと。お日様は黄金色で空に昇ってご
ざらしたし、朝風が気持ち良く畑の刈り株
の上をそよそよ吹き、雲雀ひばりは空で歌い、蜜
蜂は蕎麦の中でぶんぶん翅は音を立おとて、村の
衆は晴れ着を着て教会へ出掛けた。つづめ
て言やあ、神様がお創つくりあそばしたものは



なにかもご満悦で、針鼠⁽¹⁰⁾どもまたご同様だった。

針鼠⁽¹⁰⁾どもは自分の家の戸口に立って、腕組みをし、朝風が吹いて来る方を見やり、なにか小唄の一節をふんふん唸っていた。こういう晴れた日曜日の朝によかれあしかれ針鼠⁽¹⁰⁾どもが歌えるような小唄をな。そうやって聞き取れないくらいの声でぼやっと鼻歌を口ずさんでいるうち、女房が子どもたちの顔を洗って服を着せている間に、ちよつくら畑へ散歩に出掛け、おらがの瑞典⁽¹¹⁾典⁽¹²⁾燕⁽¹³⁾がどんなあんばいか見回って来るべえ、とふつと思いついた。瑞典⁽¹¹⁾典⁽¹²⁾燕⁽¹³⁾は針鼠⁽¹⁰⁾どもの家のすぐ近くに植わっていて、針鼠⁽¹⁰⁾どもは家族ともどもいつもこれを食べていたから、自分のもののように思っていたわけ。針鼠⁽¹⁰⁾どもは後ろの扉を閉めると、畑目指してとつと歩き出した。家からまだそう遠ざからず、丁度畑のこちら側にある樺木⁽¹⁴⁾の茂み⁽¹⁵⁾を廻ってぶらぶら上がって行こうとした時、兎に出くわした。兎もやっぱり似たような用事で家を出て来たところだった。つまり、わたしの玉葉畑⁽¹⁶⁾を檢分いたすかな、てなあんばいでなあ。針鼠⁽¹⁰⁾どもは兎に気付くと、愛想よく、お早うさんとやつた。ところが兎は、自分じゃあ上品な紳士様だと思っていたし、その上ひどく高慢ちきにかまえていたから、針鼠⁽¹⁰⁾どもの挨拶になんのお返しもせず、おつそろしく軽蔑した口調でこう言ったもんさ。「一体どうしたわけで、こんなに朝早く野良⁽¹⁷⁾をうろつき回つとるのかね」と。「わっしや、散歩してるのさ」と針鼠⁽¹⁰⁾ども。「散歩だって」と兎は笑い飛ばす。「思うに、おまえさん、その足





をもっと上等なことに使った方がいいのではないかな」。この対応に針鼠どんは突拍子もなく腹を立てた。大抵のことは我慢できるけど、足についてはこれっぽっちも触れてもらいたかった。なにしろ生まれつき曲がってるからの。「どうやらあんた」と今度は針鼠どん。「あんたのその足ならましなことをやってのけられる、と思っとられるようで。「そう思っておる」と兎。「それじゃ一つ試してみたらどうだんべえ」と針鼠どんが言った。「一緒に駆けつくらをしたら、わっしがあんたを追い抜いてみせる、つちゅうのに賭けるだよ。「こいつあ大笑いだ、おまえさんのその曲がった足でねえ」と兎。「でも、わたしはかまわない。そんなにやりたくてうずうずしてるのなら、で、何を賭けるね。「ルイエ金貨ドールを一枚と火酒シネチップスを一壇びんだに」と針鼠どんが言った。「よしきた、承知だ」と兎。「手打ちシネチップス「取り引き成立の徴しるし」と行こうや。そうすりやすぐに始められる。「うんにゃ、そねえにやたら急ぐこたあねえ」と針鼠どん。「わっしは胃袋がまだ空っぽでな。まんつ、うちさ帰かえってちよっくら朝飯をかつこむつもりだ。半時間したら位置につくだよ」。そして針鼠どんは立ち去った。兎はそれでよかったのでな。

道みち針鼠どんは思案した。「兎のやつはてめえの長い足を頼りにしてる。だが、わっしはやつを懲こらしめてやるわい。なるほどやつは自分がお上品な旦那だとお高く留まっとるが、抜け作だで、痛い目に遭うことになるだ」。家に着くとおかみさんにこう言った。「かかあどん、急いで服を着な。わっしと一緒に畑へ行ってもらわにやらん」。「一体どうしたただね」とおかみさん。「わっしは兎のやつとルイエ金貨ドールを一枚と火酒シネチップスを一壇賭けて力較べをすること

になっただ。わっしはやつと競走するつもりだあよ。だで、おめえにつきあつてもらいてえ。「あれま、なんたるこんだ」とおかみさんは針鼠どんに向かつて金切り声を挙げた。「おめえさまは利口者じゃねえのかね。分別を失くしちゃっただかね。どうしてまた兎なんぞと競走しようつちゆうことになっただ。「黙れ、女房」と針鼠どん。「わっしに任しとくがええ。男の仕事につべこべ口出するでねえ。さつさと服を着て、一緒に来な」。おかみさんとしちゃ針鼠どんをどうすることもできやせん。⁽¹⁰⁾ いやおうなしにご亭主の言うことを聞かなくつちやならなんだ。一緒に歩き出すと、針鼠どんはおかみさんにこうしゃべつたもんだ。

「わっしがこれからおめえに言うことをよつく聴きなよ。ほら、あそこ長い畑な、あそこでわしら競走するつもりだ。つまり、兎のやつは畝合うねあひいの一つを、わっしはまた別のを、つちゆう具合にな。それで上から走り出す。⁽¹¹⁾ おめえはただもうこの下の畝合いの中におつてな、兎のやつが傍に着いたら、『わっしやもう来とるぞ』と怒鳴りつけさえすりやええだ」。

こうして二人は耕地の傍に到着、針鼠どんはおかみさんに、ここにいるんだぞ、と言いつけ、耕地を上がつて行つた。上に着くと、兎はもうやつて来ていた。「始められるかね」と兎が言つた。「ええともさ」と針鼠どんが応じた。「それじゃやるべえ」。こうしておのおの畝合いに入った。「一、二、三」と兎が数え、疾風はやてのように耕地を下へ突つ走つた。針鼠どんはまずまあ三歩ほどしか走らず、畝合あひあひいに屈かがむと、のんびり座り込んだ。



兎が全速力で下に着くと、針鼠どんの代わりに針鼠どんのおかみさんが「わっしゃもう来とるぞ」ととなりつけた。兎は立ちすくんでえらく驚いた。自分にそう叫んだのは針鼠どん自身だ、とばっかり思い込んだでな。なにせ、だれでも知ってるんだが、針鼠どんのおかみさんはそのご亭主とそっくりそのままの恰好かっこうだからのう。

さあて兎は考えた。「こいつあどうも尋常なこっちゃない」って。で、大声で言った。「もう一遍駆けるんだ。ぐるりつと廻れ右」。そうしてまたまた疾風のように突っ走ったので、頭で耳がさあつと靡なびいたもんだ。針鼠どんのおかみさんというと落ち着き払ってその場を動かなかった。兎が畑の上に着くと、針鼠どんが面と向かってどなりつけた。「わっしゃもう来とるぞ」ってな。兎はもう無我夢中になって金切り声。「もう一遍駆けるんだ。ぐるりつと廻れ右」。「いいともよ」と針鼠どんが応じる。「あんたにその気がある限り何遍だってわっしゃかまわねえ」。そこで兎は七十と三回走り、針鼠どんはずうつとその相手をした。兎が畑の上か下に着くたびに、針鼠どんかそのおかみさんが「わっしゃもう来とるぞ」と言ったのさ。



ところが七十と四回目には兎は終点まで行き着かなかった。耕地の真ん中で地面にぶつ倒れ、頸から血を流してその場でくたばったままになっちゃった。針鼠どんの方は賭けで勝ったルイエ金貨一枚と火酒一壺を手に入れて、女房を敵合いから呼び出すと、二人してご満悦でうちに帰った。二人とも死んでなけりや、まだ生きとるがな。⁽¹⁸⁾ちゆうわけで、ブクステフェーデの原で針鼠どんが兎が死ぬまで兎と駆けつくらをしたんだが、それからつもの、ブクステフェーデの針鼠どんと競走しようなんて考える兎はおらんかった。

で、この話の教訓だがの、一つ目はこうだて。だれでも、ま、自分がお上品だ、とかまえておつてもだ、取るに足らん男を喰いものにしてしようなんて考えちゃいかん、それがたとえ針鼠どん風情でもな。それから二つ目はな、縁組するなら、同じ身分の女をもらうようにするのがお勧め、つてこつた。自分自身とそっくりそのままのをな。つまり、自分が針鼠なら、女房もやっぱり針鼠にするよう気を付けにやらんちゆうこと。

解題

KHM一八七「兎と針鼠」Der Hase und der Igelと全く同じ。その理由は簡単で、グリム兄弟もベヒシュタインも一八四〇年に刊行されたある出版物から採録したのである。⁽¹⁹⁾これは、*Ein plattdeutsches Volksmärchen. Das Wettlophen zwischen den Hasen un den Stunngel up de lütje Heide bi Buxtehude* (in *Hannoversches Volkslied*, 1840, Jahrgang 1, Nr. 51) なるもの。ただし、KHMの方は「ブラットドイチュ」plattdeutsch、すなわち、低地ドイツ語（当時のハノーファー王国、すなわちドイツ北西部現ニーダーザクセン州オスナブリュック地方の口承とか）そのまま、DMBではベヒシュタインによって高地ドイツ語に忠実に訳されたわけ。邦訳で最も先行するものとしてはKHMにおける金田鬼一の訳があるが、難解な北ドイツ方言をよくもまあ訳したものだ、と心底脱帽するしだい。金田鬼一訳『完訳グリム童話集』、岩波書店第五卷二〇九番「兎とはりねずみ」とその注を参照のこと。さて、DMBでは前述のように読み易い高地ドイツ語に移されているわけだが、現代標準日本語にするとうつにも平板になってしまつたので、訳者なりに逆の工夫を試してみた。

A T 一〇七四「騙して勝った競走（親類の援助）Race Won by Deception: Relative Helpers。

原題 *Der Wettlauf zwischen dem Hasen und dem Igel*.



六一 ツイテリンヒエン

昔むかし貧乏な日傭取りが住んでいた。子どもが二人で、息子はアブラハムという名で、娘はクリステインヒエンという名だった。父親が亡くなった時、二人ともまだごく幼かったので、善良な人たちが引き取ってやらなければならなかった。さもなくば、死んでしまったことだろうよ。それくらい貧乏だったんだもの。女の子はやがて、界隈にまたとない、咲き匂う花のように素晴らしい美人に成長、アブラハムは屈強な若者になり、ある人の引き立てを蒙り、さる裕福な伯爵の許で召使奉公を始めた。さて、妹と別

れる折、彼は親しい友人に妹の肖像画を描いてもらい、これを身に付けて行ったのさ。というのも妹が好きでならなかったからね。伯爵はアブラハムの奉公ぶりに至極満足していたが、この従僕がだれかの肖像画を懐から出しては接吻するのにはしばしば気づいた。アブラハムが物静かで控えめな上、めったに外出もしないだけに、伯爵はこのことを訝しく思い、その肖像画はその恋人を描いたものか、と訊き、しげしげと眺めた。するとアブラハムは、わたしの妹でございます、と答えたもの。「もしかように麗しいのであれば、そちの妹は貴族の妻となるのにも相応しかろう」と伯爵。「もつとずっと美

しゅうごございます」とアブラハムが返す。伯爵は無我夢中になり、自分の乳母をクリスティンヒエンの住まいに遣わし、館へ連れて来させることにした。

乳母は四頭立ての馬車でクリスティンヒエンの養い親の家に乗りつけ、お兄さんがよろしく、とのことですよ、あたしと一緒に伯爵様のお館にいらっしやいまし、と告げた。クリスティンヒエンは、お兄様にまた会える、と思うと、胸がわくわくして堪らず、喜んで同行した。さてクリスティンヒエンは小犬を一匹飼っていた。これは水中で溺れるところをこの娘がかつて助けてやったもので、名前はツイリンヒエンといい、とつても彼女になついていた。この小犬はクリスティンヒエンにくつついて馬車にびよこんと跳び込んだ。ところで乳母は邪な企みを抱いていたのさ。大きな河の険しい切岸きりぎしを馬車が走っている時、乳母は、青い波間で遊び戯れている黄金色の魚たちにクリスティンヒエンの注意を惹き、クリスティンヒエンが無邪気に馬車の扉から身を乗り出してそれを眺めているところを、河の中へと突き落してしまった。この乳母には従妹が一人いた。もう歳を喰くった行かずい後家ごけだったが、乳母はこの女と、これこれの場所で待っているよう、あらかじめ示し合わせてあった。そして御者が馬たちに水を飲ませている間に、こつそり馬車に乗せたわけ。この女は分厚い面紗ヴェールを掛けていた。乳母は従妹に、自分は半年の間は面紗ヴェールを上げない、と誓いを立てている、と伯爵に言うよう教えておいた。

顔を覆った上臈じょうろうが伯爵の前に連れて来られると、伯爵は、面紗ヴェールを撥はねのけて欲しい、としきりに頼んだが、相手は断固として拒み続け、伯爵は一層見たくて堪らなくなつた。そこで、妹が肖像画ポルトレよりずっと美しい、と述べたアブラハムが正直一箇なことを信頼しきつていた伯爵は、奥方にして進ぜたい、と申し出た。司祭が呼ばれ、婚儀が執り行われた。式が済むと、この女性、面紗ヴェールを上げるのをそれ以上断れなくなつた。だけれども、若やかに生き生きした容貌の代わりに盛りを過ぎた妻しほんだご面相を目の当たりにした伯爵の驚いたことつたらない。かんかんに憤いらいつた

伯爵は、このご婦人はわたしの妹ではござりませぬ、と断言したにも拘わらず、アブラハムを牢獄に投げ込ませた。そして、嘘つきの絵の方は暖炉だんろの煙出しに吊るさせた。⁽⁶⁾

ある日のこと、伯爵の寢室の控えの間で眠っていた従僕が奇妙な幻影を目撃した。なにやら白い姿が自分の寢台の前に立ち、じゃらじゃらと鎖を鳴らし、低い声で、悲嘆を籠めて「ツイテリンヒエン、ツイテリンヒエン」と言ったのだ。するとこれに応えて、これまでこの館でなんとか大目に見てもらって生きていた例の小犬が寢台の下から這はい出し、「いとしい、いとしいクリステインヒエン」と返辞。——「お兄様のアブラハムはいつたどこにおいでなの」とその姿は続けて訊いた。「鎖かざと柵かざに繋がれてとても厳しく牢屋の中に」と小犬が返す。「私の絵はどこにある」。

——「煙出しの中に吊るされて」。——「あの年寄りの腰元は」。——「伯爵様のお腕で寝んね」。——「神様、お憐れみください。私はあと二回こちらへ来ますけど、救われなければこの世とはお別れ」。そうして姿は霧のように散り散りに消え失せた。従僕は、夢を見たんだな、と思い、この幻影について何一つ主人の伯爵に報告しなかった。けれども次の夜同じ情景が寢台の前で繰り返された。その姿は鎖を前よりずっと高く鳴らし、もう一度やって来る、と口にした。今度という今度、従僕は身を起こった事柄を確信し、このできごとを逐一主人に注進した。伯爵はとっくり思案を巡らし、その幻影をひそかに見届けようと決心、十二時、寢室の扉を閉め切らずにその陰に立ち、様子を窺った。そしてとうとう控えの間の暗闇に突然浮かび出た白い姿を見、その姿が鎖をじゃらじゃら鳴らし、「ツイテリンヒエン、ツイテリンヒエン」と言うのを聞いた。小犬は「いとしい、いとしいクリステインヒエン」と返辞。——「お兄様のアブラハムはいつたどこにおいでなの」。——「とても厳しく牢屋の中に、鎖と柵に繋がれて」。——「私の絵はどこにある」。——「煙出しの中に吊るされて」。——「あの年寄りの腰元は」。——「伯爵様のお腕で寝んね」。——「神様、お憐れみください」。その時伯爵ははっと扉を開き、幻影に手を延ばし、重い鎖を片手に握った。



するとその瞬間鎖は姿からがちやりと外れた。亡霊のような幻影は優雅な女性の形に変わり、につこり伯爵に微笑み掛けた。まことあの絵によく似ていたが、それより遙かに美しかった。伯爵は無我夢中になり、秘密の謎解きをせがんだ。するとクリSTEINヒエンはこう物語った。年取った乳母が悪巧みをして、自分を河に突き落したが、女の水の精たちがその緑色の面纱ヴェールで受け止めてくれ、地底の宮殿へ連れて行った。そして彼女たちの仲間になるように、と言われたが、それを拒んだので、結局水の精たちは三夜伯爵の控えの間に出現することを許してくれた。この三回の間に鎖が外されなければ、今度こそほんとうに水の精にならない、との条件で、と。

伯爵はこうしたことを聞かされて喜びもし、驚きもした。アブラハムは囚獄ひとやから解き放たれ、伯爵のお引き立てを蒙こうむったが、邪な乳母は同じ牢屋に投げ込まれ、その従妹は笞打むちたれて館から追い出された。クリSTEINヒエンの絵は煙出しから取り出され、伯爵はそれを心臓の上に帯びた。クリSTEINヒエン自身はというと、伯爵の奥方になったらしい。さて、ツイテリンヒエンは甘えて女主人の手を舐なめたが、女主人が優しく撫でながら、これからは私の傍で幸せな毎日を送らせてあげますよ、と約束した途端、麗しい姫君に変身した。そしてびっくり仰天したクリSTEINヒエンに自分の身の上を物語った。彼女はある邪な魔法使いに呪われていたのであって、クリSTEIN

ンヒエン自身が救われることによって救われたのだった。

解題

拘り替えられた花嫁の物語は既にジャン・バティスト・パジール『五日物語』^{『五日物語』} Giambattista Basile: *Il Pentamerone* (一六三四—一三六)にある。「二つのケーキ」*Le dose pozzerte* (第四日第七話) がそれ。冒頭では、容貌も性格も正反対の二人の従姉妹がそれぞれ一人で泉に行き、老婆の姿をした妖精に出会い、片方は相手に親切にケーキをあげたので素晴らしい贈り物もらい、片方は邪険にふるまったのでひどい報いを受ける(ペローはこの部分を「妖精たち」*Les fées*——妖精は一人しか登場しないので、このタイトルは奇妙だが——でそっくりそのまま継承した)。美しく気立ての好い方の娘の兄が王宮で王に妹の魅力を語る。王は、それが真実なら妻に迎えようとする……。また、ドーノア夫人 *Mme d'Aulroy* は、その『新妖精物語あるいは当世風の妖精たち』*Les contes nouveaux ou Les fées à la mode* (一六九八) 所載二四編中の一編で、拘り替えられた花嫁の物語を語っているが、この物語「ロゼット姫」*La princesse Rosette* にはフレティオン *Frétilion* (frétilier は「跳びはねる」の意。従って「フレティオン」は「びよんびよこちゃん」くらいか) という名の小犬が登場し、少なくともその名前に関する限り、この「ツイテリンヒエン」と隔たること遠くないのは、注目すべきであろう。もともこの小犬、女主人の危急を救うため、ツイテリンヒエンを遙かに凌ぐ活躍をする。なおこの物語でもロゼット姫の二人の兄が「孔雀の王」に妹の肖像画を見せる。KHM一三五「白い嫁御と黒い嫁御」*Die weiße und die schwarze Braut* は——それから、奇妙な断片であるKHM一四一「仔羊と小魚」*Das Lämmchen und Fischen* もおそろしく——これと近縁である。

A T 四〇三「黒い嫁と白い嫁」*The Black and the White Bride*。

原題 *Zitternchen*。

六二 灰かぶり

解題

原題 *Aschenbrödel.*

KHM 二 *Aschenputtel* に相当するため訳出せず。

六三 三つの贈り物

昔むかし貧しい亜麻布織り工(こう)があった。
そこへ金持ちの大学生(だいがくせい)が三人来て、この
男がとっても貧乏なのを見たので、暮ら
しの足しにターラー銀貨(ぎんが)を百枚やったも
んだ。織り工はこの贈り物に大喜びして、
うまく使おう、と考えはしたが、まあし
ばらくの間はびかびかする銀貨を眺めて
目の法楽(ほうらく)をしたかった。そこで、留守だ
った女房には降って湧いた幸せについ
ちやあこれっぽっちも言わず、その金を、
だあれも探しっこないところ、つまり
襦袢(ほろ)されの中に隠した。

その後男が外出した時、襦袢(ルンペン)され買
がやって来た。そこで女房は溜まってい
た襦袢(ほろ)をそっくりクロイツァー銅貨(どうが)何枚
かで売っぱらった。織り工が帰宅して、



おかみさんが嬉しそくに襦袢で儲けた僅かのおあしを見せる
と、大愁嘆場だいしゅうたんばとあいなつたわけ。

一年経って例の三人の大学生が、さぞかし織り工が楽な暮
らし向きになっているだろう、と思つて戻つて来たが、前よ
り一層貧乏でいるのに出会つた。なにせ男は三人にわが身の
災難をこぼしたんでね。今度はもつと気をつけるんだよ、と
注意して、学生たちはまたしても百ターラー恵んだ。次はち
ゃんと利口に立ち回ろうと思つた男は、またまたおかみさん
には何にも言わないで、その金を灰入れ壺にしまいこんだ。
するとね、前と全くおんなじことになつちまつた。女房は灰
を灰の引き取り人（取）に渡して二、三個の石鹼せっけんと取替かえつこし
たのさ。これまた丁度ご亭主が、どこかのお客に注文の亜麻
布を届けににかけて、留守してた時にね。帰つて来て、この
灰の取引とりひきを聞かされた男は、おかみさんを燃える前の灰
「薪」で灰汁あく洗あいした「したたかにぶんなくつた」もんだ。

一年経って例の三人の大学生が、これで三度目だけど、や
つて来たところ、おんぼろ浮浪人（浪）といつたていたらくの織り
工を発見。それで鉛を一塊ひとかたまり、男の足許あしもとに投げ出して、こ



言ったもの。「牝牛に肉豆蔻ビクゾク役には立たぬ。^(註) あんたみたいなどんちきに金をやるなんざ、あんた自身よりどんちきなこった。もうあんたんとこにやあ来ないよ」。こう引導いんどうを渡すとぷりぷりして立ち去った。織り工は鉛の塊を床から持ち上げ、窓枠に乗つけた。それから間もなく近所の衆が入って来た。これは漁師で、こんにちは、と挨拶をしていわく。「お隣さんや、おめえさま、なんか鉛の塊みてえなもん、でなきやなんか重たいもん、持ってねえかの。そうすりやわしの網に使えるでな。わしんとこにやあそういうったのがもう皆目かいもくねえだ」。そこで織り工が鉛の塊をくれてやると、相手は大層ありがたがって、「わしが捕まえる最初のでっかい魚を、これのお代にさしあげるだ」と言った。「それでええとも。こりゃあそれだけの値打ちはねえだが」とほくほくした織り工は答えた。

やがてご近所の衆は一フント四から五(註)もあるうというすてきな魚をほんとに持って来て、織り工に、どうしても、と受け取らせた。男がすぐさまこの魚をさばいたところ、胃袋の中に大きな石が一つ見つかった。織り工はこの石をやっぱり窓枠の上に載のつけておいた。夕方になって暗くなると、石は光り始め、暗くなればなるほどいよいよ明るく輝き、まるで灯明のようだった。「こいつは安上がりな洋灯ランプだわい」と織り工はおかみさんに言ったもの。「おめえ、二百ターラーを溝とぶんなかにおっほりこむような真似をしたみてえに、こいつを二束三文にそくさんもんで売り飛ばしちまおうって気は起こさねえだろうな」。そうして、石の位置をあんばいすると、部屋中が煌煌くわんくわんと照らし出された。

翌日の宵、一人の旦那衆だんなが馬で通り掛かり、光っている石を見ると、馬から下りて部屋に入り、とつくり石を検分すると、ターラー銀貨十枚で売らないか、と申し出た。織り工「この石は売り物じゃありませんねえ」。「銀貨二十枚ならどうかね」と旦那衆が訊く。「それでも」と織り工が答える。旦那衆はどんどん付値を上げ、とうとう千ターラー払う、と言った。だってね、これは貴重な金剛石ダイヤモンドだったんで、ほんとはもつとずつと値打ちがあったのさ。これで織り工は手打ち「取り引き成立の徴しるし」をして、村一番の金持ちになった。すると女房は亭主をこうやりこめ

た。「ほうらね、あんた。あたしが二度もあのお金をうっちゃっちゃまわなかったら、どうだったろうねえ。なんとつてあんた、あたしに礼を言わなくっちゃ」。

解題

サーレ河谷の口承。

愚かな妻を扱った笑い話は無数にある。とりわけ、こんな主題。おばさんなので夫の宝を人に掘り出させてしまふ。ターラー金貨（古くはターラーは金貨だった）を、南瓜の種（アメリカ大陸原産の植物である南瓜がヨーロッパの庶民にとってありきたりの野菜になった時代には、ターラー金貨は既に存在していないはずだが）だ、と思いきも。あるいは同様の阿呆おりで、貴重なものを無価値なものに取り替え、その上それを嬉しがる。KHM五九「フリーターとカーターリースピエン」Der Frieder und das Cathieschen 参照。ただしベヒシュタインの例話は、笑い話というよりむしろ、幸せはなるようにしかならないもので、摂理に任せるべきだ、との趣旨であって、こうした話型の源は何なのか今のところ不明。

A T 七三六 「幸運と富」 Luck and Wealth、九四六 D 「幸運と偶然の一致」 Fortune and Coincidence。

A T 一三八一 「おしゃべりな女房と宝の発見」 The Talkative Wife and the Discovered Treasure を参照

原題 Die drei Gaben.

六四 神様はどこにでも

昔むかし男の子と女の子の兄妹きょうだいがいた。名前はゲルゲル(註)とリースヒエン(註)、どちらもとても気立ての好い子たち。ある時二人きりでおうちにいることになった。親たちは余所よそに出掛けたわけ。柳で編んだ籠を幾ついくつも担いで、町へ売りに行ったのだった。優しい親たちは子どもたちのゲルゲルとリースヒエンのそれぞれにかなりの量の麩パンの塊をやっておいた。この日一日の食べ物のもりでね。でもゲルゲルはすぐに自分の分を平らげてしまい、それでもまだまだお腹が空いていた。とは言え、口に入れるものは何一つありやしなかった。リースヒエンは自分の麩パンを少しあげたけれど、これでも男の子は満腹にはならなかった。お茶目な甘い文句で妹をたらし込もうとした。「ねえ、リースヒエン、母さんがお部屋の外の食器戸棚にしまっている甘い甜菜糖蜜てんさいとうみつをちよっぴりつまみ食いしてみようよ。大きな壺一杯あるでしょ。母さんはきつと気がつきやしないよ。それにさ、だあれも見えないもん」。しかしリースヒエンはこう言った。「あら、とつてもいけないわよ、ゲルゲル、そんなことしたら。あそこの戸棚ひに陽が射しているの見えないの。あれは神様がびかびかさせてらっしゃるのよ。だから、もしあたしたちがつまみ食いたら、神様のご覧になるわ」。するとゲルゲルいわく「じゃあ、屋根裏部屋へ行こうよ。母さんはあそこにおいしい梨(註)を置いている。それを食べよう。あそこには窓がないから、太陽は射し込めない。だから神様もぼくたちをご覧にならないさ」。

リースヒエンは初め厭いやがっていたが、とうとう子どもたちは屋根裏部屋へ上がって行った。散乱した日光が屋根瓦の隙間からたつぷり洩れていて、とてもおもしろい具合に梨の上にきらめき渡り、まるでそこで踊っているかのようだったから、リースヒエンはまたこう言った。「ああ、ゲルゲル、ここだって神様はあたしたちをご覧になつて。つまみ食いなんかしちゃいけないわ」。二人は下へ引き返したが、階段を降りている時ゲルゲルは何か思いついて、

と戻った。でもゲルゲルは居残って、びくびくしながら裂け目に苔を詰めて塞ぎ、それから乳脂ライムを舐め始めた。でも盛大にべろべろやっている最中、強烈な雷鳴が一発頭上で轟き、例の壁の裂け目から稲妻が閃き、穴蔵はかっと思ろくなつた。そして真っ黒けな男が一人穴蔵の隅から出て来て、ゲルゲルに歩み寄り、その真ん前に座り込んだ。こやつ、火のような目をしていて、乳脂ライムの小壺をぎろぎろ睨にらみ続けたので、ゲルゲルは怖くて指一本動かさないまま、ひっそりかんと座っていないならなかつた。



すぐそれを口に出した。「そうだ、穴蔵に母さんが乳脂ライムの一杯入ってる小さい壺を置いてるぞ。地下だから真っ暗で、神様だって覗のぞけっこないや。さあ、下へ行こうよ、リースヒェン、さあ、急いで、急いで」。——ゲルゲルはためらっている妹の手をしっかりと握り、どんどん引張って穴蔵に降り、日光が入らないように、そして自分たちが乳脂ライムの味見をするのを神様をご覧にならないように、注意深く内側から扉を閉めた。でも何分か経つと穴蔵の中はほんのり明るくなった。壁の裂け目からお日様が丁度乳脂ライムの小壺の上に射し込んでいるのを見た好い子のリースヒェンはびっくり仰天してとつとまた部屋へ



上の部屋にいるリースヒエンのところにはなんとも愛らしい小天使がやって来て、綺麗な玩具や衣装の他に砂糖菓子や甘い乳ミルクを持参、両親が帰って来るまでリースヒエンと一緒に遊んでくれた。親たちはこんな綺麗な品モノを見てとても喜んだ。それから、ゲルゲルはどこ、と訊いた。リースヒエンはそう言われて驚いた。だって天童てんどうが持つて来たみごとな贈り物のために、お兄ちゃんが穴蔵に残っているのをすっかり忘れていたから。そこで大声を挙げた。「ああ、神様、あの子ったらまだ穴蔵にいるんだわ。早く迎えに行つてあげましょうよ。もしかして戸が開けられなくなつてるのかも」。皆急いで下へ降り、穴蔵の扉を開けた。するとね、ほら、ゲルゲルが相変わらずこちこちになつて座つていて、手に乳脂ラウム壺ウチを持つていたのさ。そして物音を聞いて、母親の姿を目にすると、ひどく驚いて縮みあがり、わあつと泣き出した。母親はその両手から半分空になつた乳脂壺ラウムウチを取ると、穴蔵から引つ張り出して、当然の報報いいだけど、ぴしゃつと引っぱりたいんだ。

さてゲルゲルはそれからというもの生涯二度とつまみ食いなぞしませんでした。後になつて何か悪いことや危ない行為に誘われるたんび、いつもこう応えたもの。「ぼくはそんなことしない。一緒に行かない。神様はどこにでもいてご覧になつてる。神様、どうかお守りください」って。——そしてほんとに正直でしっかりした男になりましたよ。

解題

フランケン地方の口承。

どうやらこれは、ともすると誘惑に駆られそうな子には怖い想像を、お行儀の良い子には楽しい想像を呼び覚まし、つまみ食いを防ごうという子ども脅かしの物語にはかならないようだ。とは言え、本来の意図は、人間の目には見落とされる非行も神はちゃんと見そなわし、これを罰する、という極めて厳粛かつ衝撃的な戒めに発している。たとえば、DMB七九「鶴鵠」Das Rehuhn、KHM一一五「曇りのないおでん」という様が明るみに出す」Die klare Sonne bringt's an den Tag」を参照。

AT該当なし。

原題 *Gott Überall*。

訳注

- (1) ヴァルター・シエルフ Walter Schert. 一九二〇年マインツ（現ラインラント＝プファルツ州）に生まれる。児童文学・昔話研究者。
- (2) ハンス・イェルク・ウター Hans-Jörg Uther. 一九四四年北西ドイツのヘルツベルク・アム・ハルツ（現ニーダーザクセン州）に生まれる。文芸学者・口承文芸研究者。ゲッティンゲンの『昔話（メルヒェン）』百科事典『Enzyklopädie des Märchens』編集スタッフ上級メンバー。AT U編纂者。MdW前編集者。KHM（一九九六、二〇〇四）、『ハウフ昔話（メルヒェン）集』（一九九九）、DMB（一八五七版）・NDMB（一九九八）などの校訂編纂（いずれもMdWシリーズの一卷）を出版。その他業績は夥しい。

四二 金髪さん

- (3) 金髪さん Goldenen. 金髪の男性・女性の愛称としてドイツ語圏や英国で golden をもとにした続名が付けられる。英国だと Goldie, Goldy。これはドイツ語圏のその男性形。

- (4) 月のように輝く女の姿 eine Frauengestalt, leuchtend wie der Mond. 「金髪さん」が幸運に恵まれることを予言するこの女性は紡錘を操っている。ヤーコプ・グリムがその著『ドイツ神話学』Jacob Grimm: *Deutsche Mythologie* で記しているように「紡錘は、ドイツ人であってもケルト人であっても、ギリシア人であっても、古代の全ての賢い女 alle weise Frauen の本質的な徴である」（Bd.1, S.347）。ドイツ語圏の「賢い女」weise Frau は「魔女」Hexe と対極にある存在で、超自然的力をもつ、善良な女性のこと。グリム兄弟は、フランス語圏の昔話の「妖精」fée をドイツ語圏の昔話に移す（次の訳注「紡錘」参照）際、この語「賢い女」weise Frau を用いたことがあったが、同一ではない。

妖精には意地の悪い者がいることがあるけれども、賢い女は全て善良である。

- (5) 紡錘 Spindel. L・リヒターの挿絵では糸巻棒 *Recken* と紡錘とを用いる最古の方法での糸紡ぎが描かれている。こうした糸紡ぎは一九二〇年代でもドイツ語圏の田舎の住人の間ではなお行われていた。糸紡ぎ女は、麻櫛で梳いた亜麻や抜いた羊毛を糸巻棒に巻き付け、片手で適當と考える細さになるよう繊維を引き出し、導き糸に結んで、それを紡錘の先端に固定し、もう一方の手で斜めにした紡錘を回す。紡錘は木製(稀に象牙ないし青銅)、長さ二〇―三〇センチ、真ん中が膨らみ両端へ細くなっている形状。下端に錫か角でできた巻き器具 *Wind* が付いている。繊維が腕の長さほど引き出されると、繊維がちやんとした縋り糸になるよう、紡錘は急速に回転される。するとできた縋り糸は垂直に立つた紡錘に巻き付けられる。こうした糸紡ぎは熟練者であれば歩きながらでもできる。ただし、インドで紀元五〇〇年頃―一〇〇〇年頃に発明された糸繰車 *Spinnrad* が導入されると、糸紡ぎは部屋の中で座ったまま行われるようになり、熟練度も、おそらくは、労力もより少なくて済むようになった。こうなると紡錘は糸紡ぎ装置に嵌め込まれ、糸が一杯に巻かれた時取り外される存在となる。シャルル・ペロー著『過ぎし昔の物語あるいはお伽話、ならびに教訓』(一六九七) Charles Perrault: *Les Histoires ou Contes du temps passé. Avec Moralitez (= Moralités)* の「眠れる森の美女」*La Belle au bois dormant* や、それがドイツに移入されたの KHM 五〇「茨姫」*Dornröschen* で、王女が指を刺してしまうのは最初に述べた最古の糸紡ぎの方法で用いられる紡錘である。KHM では「そんなに楽しそうに跳び回っている物はいったいなあに」*Was ist das für ein Ding, das so lustig herumspinnet?*、と古い塔の中で糸紡ぎをしている老婆に王女が訊いている(決定版。一八五七))とで明白。ただし、これとて危険なほど紡錘が尖っているわけではないので、呪いが成就するにはそうでなければならなかった、とこの了解を。なお、「眠れる森の美女」に更に先行する類話であるナポリ人ジャンバッティスタ・バジレ著の通称『五日物語』*Gianbattista Basile: Il Pentamerone* (一六三四―三六) 所収の「太陽と月とターリア」*Sole, Luna e Talia* (第五日第五夜) では、前記のように歩きながら糸巻棒と紡錘とで糸紡ぎをしている老婆に道で出会った王女ターリアは、紡錘ではなく亜麻の繊維に混じっていた何かの棘を指に刺して魔睡に陥る。
- (6) 花鶏 Fink. 普通 Finken。雀目花鶏科の鳥。小型で頬白に似る。大体栗色と黒色で腹は白。
- (7) 「白」花鶏 黄金の薔薇 / 海に抱かれた王妃様」*Der weiße Fink, die goldene Ros. / Die Königin im Meeresschloß*。主人公に関わる予言「王妃様」というのは後出の王冠のこころであるうか。ドイツ語では女性名詞なのでそのようにこころづけ得るかも知れない。「白い花鶏」黄金の薔薇」も後出するが、なぜ「花鶏」なのか「薔薇」なのか、筆者ケルナーの説明はない。
- (8) 木苺 *Brondbeeren*。薔薇科。大抵棘があり、しばしば攀延状に成育する。一メートルほどの小灌木。果実は小核果から成る集合果実で、熟すと黄色または赤色となる。生食もできるし、ジャムや果実酒にもなる。
- (9) あなたの赤い羽根 *deine roten Federn*。主人公の金髪をからかったもの。黄金色はヨーロッパで赤とも形容される。

(10) ぶちのめされた狐 ein verschlagener Fuchs. 狐は黄色いから、これも主人公の金髪をからかったもの。

(11) 「」の白い花鶏と一緒にとことと失せろ」と鳥獲りは金切り声を挙げた——「きさま、悪魔と関わりがあるに決まってる」Packer dich mit dem weißen Finken¹, schire der Vogsteller — du hast es mit dem Bösen zu tun.² 純白の花鶏などは極めて稀な存在。これを容易に手に入れた主人公は実は「幸運児」Glückskind³なので、このことは彼に相応しい瑞祥だったのだが、鳥獲りは、少年が悪魔と契約しているためにそうしたことができた。極めて不祥なことだ、と逆に考えたわけ。が、鳥獲りがそう考えたお蔭で、主人公は元来居るべきでない場所に定着しないで済んだのである。

(12) 向日葵 Sonnenblumen. ドイツ語では「太陽の花」。菊科の一年生草本。メキシコ原産。茎は長大で剛毛を生じ、高さ一—二メートルに達する。夏直径二〇センチにもなる大型で黄金色の頭状花を開く。

(13) 「」の黄金の薔薇と一緒にとことと失せろ」と庭師は金切り声を挙げた——「きさま、悪魔と関わりがあるに決まってる」Packer dich mit diesen golden Rosen⁴, schire der Gärtner — du hast es mit dem Bösen zu tun.⁵ 黄金色の薔薇などは極めて稀な存在。これを容易に手に入れた主人公は実は「幸運児」Glückskind⁶なので、このことは彼に相応しい瑞祥だったのだが、庭師は、少年が悪魔と契約しているためにそうしたことができた、極めて不祥なことだ、と逆に考えたわけ。が、庭師がそう考えたお蔭で、主人公は元来居るべきでない場所に定着しないで済んだのである。

四三 羊飼いの少年の吉夢

(14) 籠を編んで mit Korbelächten. 柳の枝のような細くよく撓う木の枝で籠を編むのだが、もとより儲かる手仕事ではない。DMB三四「ちびっこの親指ごぞう」冒頭参照。

(15) 三ヘラー銅貨 Dreier. Drehleierstück⁷と考えておいた。「ドライアー」は、三プフェニヒ銅貨 Dreipennigstück⁸でも、三シユテューバー銅貨 Dreißigstüberstück⁹でもよいのだが、とにかくドイツ語圏の昔の小銭の名称。DMB四四「王の大聖堂」注「ヘラー」をも参照。

(16) 晩課の刻限 Vesperzeit. DMB三三「風呂屋の王様」訳注「晩課」参照。日没時。
 (17) 羊を小屋へ入れに来たのを叱りに掛かった 羊飼いの少年が牧場へ連れて行き、また連れ戻していた羊たちは、ほとんどが村の他の農家のもの。僅かな賃銭で草を食ませる仕事を請け負っていたのである。まだ日が高いうちに、羊を家畜小屋へ返しに来られては、羊を預けた村人が怒るのは無理もない。

(18) ドゥカーテン金貨 Dukaten. 極めて良質の金貨。詳しくはDMB三八「ちいちゃな卓子食事の仕度、驢馬公踏んばれ、棍棒出て来い袋から」訳注「ドゥカーテン金貨」参照。

- (19) 三角帽 dreieckiger Hut. 「ドライマスター」Drummasterとも。ルイ十四世の時代あたりから鍔広帽の前面と後部が巻き上げられたもの(二角帽)、三方が巻き上げられたもの(三角帽)がヨーロッパで流行り始め、百年以上続いた。二角帽、三角帽とも陸・海軍の軍帽(大体は将軍・提督・士官のそれ)として多く用いられた。現代でもある種の制服には残っている。
- (20) 兵隊が一個連隊 ein Regiment Soldaten. 中世ヨーロッパの傭兵の場合、皇帝や王侯の依頼を受けて傭兵隊長となった百戦錬磨の軍人が募兵指揮に当たる一個傭兵隊(歩兵・騎兵)そして後期には砲兵も——混合)を、人数の如何に関わらず「連隊」Regimentと呼んだ。従って一個連隊の兵員数は数千から(壊滅状態の)数十までばらばらだった。近世ヨーロッパの正規兵連隊でも、兵種(歩・騎・砲)により、国により、あるいは平時・戦時編成により、兵員数はまことにさまざま。あくまでも一つの目安だが、十九世紀初頭の英国の一個歩兵連隊(二個歩兵大隊編成として)で、定員が充足している場合、兵員一四〇〇ほど。明治期日本における「歩兵聯隊」は、明治二十三(一八九〇)年の「陸軍定員令」によれば、兵員一四四〇、士官・下士官を合わせれば一七二二で構成された。
- (21) 一歩動かすたんびに七哩行つちまふ legst man mit jedem Schritt sieben Meilen zurück. 有名な「七哩靴」のこと。DMB三四「ちびっこ親指(こぢい)」訳注「七哩靴」参照。
- (22) マドリッド Madrid. イスパニア(エスパーニヤ)語発音の近似値は「マドリ」であろうが、日本では「マドリッド」「マドリッド」で通っている。これを踏襲。イスパニア中央部のカステイリヤ地方(北のカステイリヤ・イ・レオンと南のカステイリヤ・ラ・マンチャから成る)のそのまた中央に位する。カステイリヤ地方は乾燥した大陸性気候で、荒涼とした台地上にある。マドリッドは中世を通じてなんら重要な都市ではなかった。カステイリヤ国王エンリケ三世(在位一三九〇—一四〇六)がここを首都に選んで以来、時折カステイリヤの諸王がここで宮廷を開いたくらいである。神聖ローマ帝国皇帝カール五世(在位一五二〇—一五六)にしてイスパニア国王カルロス一世(在位一五一六—一五六)がその古い城を王城に変え、その子フェリペ二世(在位一五五六—一五九八)が一五六〇年最終的にここをイスパニア王国の首都と定めてから、徐徐に現在の重要度まで到達した。さて、この物語でのイスパニアへの侵入者とその撃退とは何かを考えるのは無意味に近いだろうが、野暮は承知で一言。フランス帝国皇帝ナポレオン・ボナパルトによるフランス勢力の侵入(一八〇八。即位したばかりのイスパニア国王フェルナンド七世の廃位とナポレオンの兄ジョゼフのホセ一世としての即位)とその終焉(一八一三末)はどうか。この物語におけるこのような地名の選択に、仮になんらかの歴史的事実の反映があったとすればの話である。なお、DMBが出版された一八五七年当時イスパニアは女王イサベル二世(在位一八三三—一六八)の統治下にあった。もっとも、昔話では地名・人名は本来登場しないものだし、登場しても容易に置き換えが利く。
- (23) 黄金の縫い取りを施した馬衣を掛けた mit goldgewirkten Decken. 「金の刺繍の被いを掛けた」。ここで「被い」というのは、ヨーロッパの馬衣、馬衣、馬被い(英語 trapper)のこと。馬衣とは、馬の頭部、首、背、腰を覆って膝の少し下まで垂れ下がる馬のための外衣である。

(24) ^{ビロード}馬勒 ^{ばろ}Zaum. 馬の装具の一部で、轡、面繫、手綱の総称。
 天鵝絨、綾織などの高価な織物や豹皮のとき珍奇な毛皮で作り、絢爛たる色彩の豪華な装飾馬衣（英語 caparison）があった。

四四 王の大聖堂

(25) ヘラー ^{ヘラール} H. 文脈から考えてごく小額の銅貨だと思われる。しかし、十三世紀末以降（最初はヴェルテンベルクの帝国直屬都市シユヴェー
 ービシュ・ハルで）鑄造されたヘラーは銀貨で、間もなく南ドイツや東ドイツにも広まった。十五世紀の最初の四半分期にはおおむねヘラー銀
 貨二枚でプフェニヒ銀貨一枚に相当した。やがて、ヘラー銀貨にもプフェニヒ銀貨にも銅が多く、あるいはほとんど混入されるようになり、一
 五〇〇年頃ライヒスターラー銀貨 Reichstaler が登場すると、五七六ヘラーでやっと一ターラーに兌換される始末（プフェニヒは二八八枚で一
 ターラー）。十九世紀になるとヘラーは銅で鑄造され、クロイツァー銅貨やプフェニヒ銅貨よりやはり値打ちが低かった。

四五 魔女と王様の子どもたち

(26) 魔女 ^{ヘクセ}Hexe. ドイツ語圏の民間伝承における「魔女」は邪悪な女性と決まっている。人肉を喰うとされることもある（KHM一五「ヘンゼ
 ルとグレーテル」Hansel und Gretel、KHM五一「めっけ鳥」Fundevoegel）。中世から近世に掛けてヨーロッパなどで荒れ狂った酷い「魔女
 裁判」Hexenprozesse の哀れな無辜の犠牲者とは全く関係ない空想上の産物である。その淵源は古代ギリシア、ローマにも遡る。なお、やはり
 超自然的力を駆使できるが善良な女性術者は「賢い女」weise Frau と呼ばれる。従って「良い魔女」gute Hexe 「白い魔女」weiße Hexe と
 いった表現はドイツ語圏にはめつたにない。皆無ではないが。

(27) 林檎は幹から遠くに落ちぬ ^{リンゴ}der Apfel fällt nicht weit vom Stamm. 「瓜の蔓には茄子は生らぬ」。「血筋は争えない」ということ。

(28) 触らぬ神に祟りなし ^{リンド}Weit davon ist gut vorm Schuß. 'Weit davon ist gut für harte Schüsse.' 「どんな場所からは離れるにしかず」と
 も。「鉄砲の前には近づくかぬが無事」。

(29) 嵐、雹、霧、霜、寒気を招き寄せる ^{ヘクセ}悪天候を齎して人間や家畜、果樹や穀物を損なうのは魔女のしわざの一つとされた。そうした悪天
 候を「魔女天気」Hexewetter と称し、また「天候魔女」Wetterhexe という言葉もある。ただしこうした危害を与える行為で魔女がどんな利
 得を受けるのか明らかでない。

(30) 牝の角鹿たち ^{ヒルシュ}Hirschkuhe. この物語の「牡角鹿」Hirsch は、挿絵にある通り、大きな枝角を持つ堂堂たる「殿様角鹿」（後掲訳注
 「殿様角鹿」参照）。牝には角はない。

(31) ケートビュン ^{カッターナ}Käthchen. 「カッターナ」Katharina、^{カッターナ}「カテリーナ」Katherina の愛称。

(32) 兄妹 (Geschwister. 「はらから」。男の子と女の子のどちらが年上か示されていないが、一応このような漢字を当てた。後掲訳注「兄は妹に……と試いた」をも参照。

(33) 黒麴 (schwarzes Brot. ライ麦粉だけ、あるいはライ麦粉と小麦粉を混ぜ合わせたパン。ドイツの場合ライ麦粉だけで作ったパンの代表は「ブンバーニッケル」Pumpernickel) (元来は北西ドイツのヴェストファーレン地方の名物)。もっちり、ずっしりしていて、酸味がある。こうし
たパンの上に載せて食べるなら、塩鱈や塩鯖の酢漬け、鮭の卵(イクラ。塩漬けでも卵巣をほぐしたそのままでも)や燻製の鮭などが好い組み
合わせ。小麦粉との混合パンには「パウエルンブロート」Bauernbrot(農民パン)、「ミッシュユプロート」Mischbrot(混ぜパン)などさまざま
がある。黒パンは決して不味くはないが、近世ドイツ語圏の場合、白パンはゆとりのある階層の、黒パンは貧しい階層の食べ物だった。

(34) 衣装櫃 (Lade. 長持。身の回りの品や衣類を入れておく木製の重厚な箱。金属で補強されたりもする。

(35) 開錠 (Springwuzel. どんな錠(あるいは錠に類する物)でもたちどころに開く強力な魔力を持つ、と中世ヨーロッパで民間信仰
の対象となっていた植物。甘野老、ホルト草、恋茄子など諸説あつて分ならず。DS九番「開錠根」には、それを入手する方法について
詳しい記述がある。VdD所収「宝物探し」では主人公ペーターが同様の遣り方で無事獲得、それを用いてハルツの山の精が教えてくれた莫大
な宝の一部を我が物にする。鈴木満訳・注・解題『メルクザーラ ドイツ人の民話』(国書刊行会、平成十九年)を(覧ください。

(36) 魔女の跳躍 (Hexensprung. 「ハッセン」から魔女ならほんの「一」跳びの「nur einen Hexensprung von …」という言い方があるから、魔女は
けっ(こう)飛び跳ねるらしい)。ここではただそれだけのことか。ただし、南西ドイツの謝肉祭Faschingである「ファスナハト」Fasnachtでは、
仮面・衣装で魔女に扮装、箒を手にして焚き火の焰を飛び越える「道化連」Narrenzunft(オッフエンブルク Offenbung)のそれが特に有名だが、
その他少なからぬ市町村にもある)があり、この跳躍も「ヘクセンシュブルンケ」というが。

(37) 殿様角鹿 (Edelhirsch. 牡角鹿のヨーロッパにおける代表格「エーデルヒルシュ」の「エーデル」は名詞なら「貴族」、形容詞なら「高貴な」
の意。「ロートヒルシュ」Rotirsch(赤牡角鹿)とも言うが、確かに堂堂として高貴な風格。体長一・八五―二・一五メートル、一五センチの
尾を持ち、肩までの体高一・二―一・五メートル、体重一六〇―二七〇キログラムに達する。両の角には少なくとも合わせて十本の枝がある。この物
語では、「エーデルヒルシュ」を文字通り鹿の貴族に見立てて、それ相応の敬称や名詞を使っているわけ。

四六 修道士と小鳥

(38) ウルバーヌス (Urbanus. 結びの近くでは「ウルバーン」Urbanusとなっている。「ウルバーヌス」は修道士らしくラテン語的表記。

(39) 図書室 (Bücherst. 西欧中世の修道士たちは、定時の祈祷や食事、割り当てられた作務の合間に「聖なる読書」にいそしむよう奨励された。
また、礼拝堂でのミサ典礼、聖務日課、あるいは一堂に会しての食事の際に書物の朗読が行なわれた。従って修道院には相当数の書物が備えら

れ、また、写字室での筆写により新たな巻が生産され続けた。ただし、一修道院の蔵書数はせいぜい一千冊を下回るに過ぎなかったようだ。もっとも、羊や牛などの獣皮紙を漂白し、羽ペンで字を丁寧に記し、これを束ねて製本した書物自体は多く大型で重く、神聖かつ高価だった。彩色したり、金箔を施したり、挿絵を入れたりしたものはなおさらである。このためこれらの書物が保管された部屋には聖遺物、祭具、各種重要文書なども共に置かれていたかも知れず、現代のように書籍だけを入れる部屋として独立していたかどうか。また「図書室」と呼ばれていたかどうか。いずれにせよこうした部屋の管理者は修道院内で重い役割とされていたに違いない。

(40) 一夜警時 *eine Nachtwache*. 日没から夜明けまでを四等分した用語。少なくともローマ時代から用いられている。野営する軍の哨兵や都市住民の夜番は夜警時ごとに交代する。

(41) 神の御前にては千年は一日のごとく、また一夜警時のごとく *Vor Gott sind tausend Jahre wie ein Tag und wie eine Nachtwache*. ルター訳。ドイツ語聖書でこれにはほほ該当するのは以下の章句。Denn tausend Jahre sind vor dir wie der Tag, der gestern vergangen ist, und wie eine Nachtwache. すなわち、「なぜかなれば」なんじの目前には千年もすでにすぐる昨日の如く、また夜間のひとときにおなじ」（旧約聖書詩篇九十章四節）。これは「モーセの祈禱」の一部とされている。ペテロの詞として聖書に見出されるのは「主の御前には一日は千年のごとく、千年は一日のごとし」（新約聖書ペテロ後書三章八節）。

(42) 夜鶯 *Nachtigall*. 小夜啼鳥。燕雀目鶉科の小鳥。ヨーロッパ中部から西南部に分布。習性は鶯に似て、灌木林に多く、春、夏には早朝、薄暮、または月明の夜などに啼くのでこの名（ドイツ語の語源は「夜の歌姫」がある。ヨーロッパでは多くの文学に取り上げられて愛されている）。

(43) 逃竄せし *entflohen*. 修道士あるいは修道女は、自分自身の意思で俗世を棄て、俗世にあった全ての絆を断つ、と決意して終生修道誓願をした者。それゆえ、修道院長の（期限を切つての）許可がなければ修道院を離れることはできない。許可なしではしいままに修道院を去れば、中世ヨーロッパでは、「逃竄した」とされた。ただし、戻って許しを乞えば、再び、場合によっては三度までは受け入れられたとか。現代の教会法典 *Codex Iuris Canonici* では「公員が上長の権限から逃れようとする意図で不法に修道院を不在にする場合には、上長は入念にその会員を探し出し、会員が修道院に戻って、自己の召命に徹するように援助しなければならぬ」（羅和対訳『新教会法典』第Ⅱ集第三卷第四章「会並びに会員の義務及び権利」第六六五条（2）、有斐閣、一九九二）とある。「退会」「除名」についても厳密な規定がある。

四七 七匹の仔山羊

四八 犬の難儀

- (44) 凝乳乾酪 Quarkkäse. 酸乳チーズ Sauermilchkäse、(牧羊) 小屋チーズ Hüttenkäseとも。生乳チーズ Südmilchkäseは凝乳酵素 Labferment (英語「レンネット」rennet) を用いて乳中の蛋白質カゼインを不溶性のパラカゼインとし、これを固めて熟成させるが、こちらは凝乳酵素を使わない製法によるもの。英語「カティジ・チーズ」cotage cheese。以下は百年ほど前のドイツの文献から得た凝乳乾酪手作り法。ほとんど脱脂乳 Magermilch (クリームを分離したミルク) を原料とする。この酸味のある脱脂乳、あるいはバターミルク (バターを採ったあとの残り。酸酵していて酸っぱい) を混ぜた脱脂乳を摂氏三七―四〇度に暖めると、表面にチーズ成分が分離して来る。これが「凝乳」Quark。これを亜麻や木綿の袋に入れて絞る。水のような絞り汁は乳清 (乳漿)。凝乳には塩 (好みでキユンメル Kimmel 〓 キヤラウエイ・シード (妬回香) など) を入れて捏ねて形を整える。白くて柔らかいチーズができる。そのまま食べてもよいが、これを暖かい部屋の簀の上に並べ、何度も引っくり返して乾かし、壺に入れて四―八週間熟成させてもよい。一二―一四キロのミルクから一キロができる。
- (45) 打穀場 Tenne. DMB 一〇「老魔法使いと子どもたち」訳注「打穀場」参照。ここで穀穂を用いて穀物の穂を打ち、粉殻を除く。
- (46) 穀穂を振るっていた draschen. 「穀穂」Dreschegel とは、穀類、豆類の殻を叩くことによって脱する道具。長い棹の先に回転するようにした短い棹を取り付けたもの。長い棹を振って短い棹を回転させ、穀付きの穀物、豆を連続して叩くと、乾燥した殻が外れる。舞い杵、くるり棒、とも。漢語では連枷。

四九 三匹の犬

- (47) 兄は妹に……と訊いた .. fragte der Bruder die Schwester. 「兄弟は姉妹に……と訊いた」。つまり、どちらが年上か分からないが、一応男性が女性より年長としておく。根拠はない。
- (48) 日曜日生まれの子 Sonntagkind. 日曜日に生まれた子どもは幸せになる、という民間信仰がある。
- (49) 食へ物持ごといで bring Speisen. 「プリンク・シュバイゼン」。
- (50) ずったずったに引きさかれ zerrissen. 「ツェムライゼン」。
- (51) 鋼鉄も鉄もぶっ壊せ brich Stahl und Eisen. 「プリヒ・シュタール・ウント・アイゼン」。
- (52) 口拭き布 Serviette. ナフキン。

五〇 のらくら国の昔話

- (53) のらくら国 Scharaffenland. のらくら国 Scharaffe (中高ドイツ語 für (意)けいぞらひく) + Affe (猿) が働かずにのんびり暮らせる逸

楽郷。

- (54) ヴェルシュ・クカーニャ Welsch Cucagna welsch は古高ドイツ語の walahisc (ロマンズ語系の) が語源。「フランス・イタリア・イスパニアなど南欧の」だが、「異国(「ちんぷんかんぷんな」)らしい意味合いをも持つ。Cucagna はフランス語なら cocagne (「ココアニユ」楽しみ、お祭、なんでもある夢の理想郷。後者は「ココアニユの国」pays de cocagne と訳)。解題参照。
- (55) アイアールフラデーデン Eierfladen 鶏卵入りパンケーキ。
- (56) レイプツェルテン Lebzellen. レーブクレーヘン。小麦粉に、蜂蜜、鶏卵、丁子、肉桂、肉豆蔻など数種の香料を混ぜ合わせて焼き上げたクッキーのような菓子。中世から存在。特にクリスマス用に作られる。
- (57) 焙り豚 Schweinebraten. 脂肪皮付きの豚腿肉を天火で焙り焼きにしたもの。
- (58) ドウカーテン金貨 Dukaten. D M B 三八「ちいぢやな卓子食事の仕度、驢馬公踏んばれ、棍棒出て来い袋から」訳注「ドウカーテン金貨」参照。
- (59) プフェニヒ銅貨 Pfennig. 「プフェニヒ」とは元来「貨幣」の意に過ぎなかった。中世初期には銀貨。やがて純度はどんどん下がり、最後には全部銅となった。次いで一三〇〇年頃登場したグロッツシェン銀貨の補助貨幣(一グロッツシェン＝二プフェニヒ)として用いられる。一五〇〇年頃ターラー銀貨が登場すると、一ターラー＝二四グロッツシェン＝二八八プフェニヒの換算となる。更に一八四〇年のザクセン王国では一ターラー＝三〇〇プフェニヒ、バイエルン王国では一グールド＝二六〇クローイツァー＝二四〇プフェニヒとごく小額の貨幣。現代、EUの通貨制度一オイロ/ユーロ Euro = 一〇〇ツェント/セントCent が導入される前のドイツでは一マルク Mark = 一〇〇プフェニヒだった。
- (60) 炙き腸詰 Bratwürstchen. 豚肉、牛肉、仔牛肉などを混ぜてソーセージにしたもの。生なので早く調理する必要がある。皮がかりかりになるように炙いて食べるのが普通。この名で売られているものには数種あり、それぞれお国自慢となっている。たとえばバイエルン州レーゲンスブルクの場合は、米粒大に刻んだ豚肉に生のマヨラナ(紫蘇科の香草)の葉の微塵切りを加え、羊の腸に詰めた緑色の小さいソーセージ。
- (61) バイエレン小型腸詰 bayrisches Würstel. 原料の肉など未詳。どなたかご高教を。小型腸詰はドイツ語圏のそこいら中に美味しいのがあるが……。
- (62) 鉄灸 Rost. 焼き網。
- (63) マルヴァシア葡萄酒 Malvasier. 元来はギリシア産の、リキュールのように甘く濃厚な上質葡萄酒。特に白。ラコーニア(ギリシアのペロポネソス半島南東部)の町ナポリ・ディ・マルヴァシア(現地名モネムバシアのイタリア名)にちなむ。しかし、他のギリシア諸島や、マデイラ島、アゾレス諸島、テネリフェ島、サルディニア、シチリア、ポルトガル本土、フランスのプロヴァンス地方の似た風味の酒もそう呼ばれた。蜜のようにこってりした葡萄酒で、かつてはさっぱりした辛口の白よりこのような酒がヨーロッパ人には好まれたのである。

- (64) 白麴ゼンメル Semmel. DMB二九「兎と狐」訳注「白麴」参照。
- (65) グレーテルちゃん Grethel. マルガレーテ Margarete の縮小形。
- (66) シュテツフェルくん Stefel. シュテファン Stephan の縮小形。
- (67) 去勢雄鶏 Kapun. 英語「ケイバ」capon. 雄鶏を雛のうちに去勢したもの。成鶏でも柔らかくて美味、かつ肥大しているのが好まれる。
- (68) 雲雀 Lerche. ヨーロッパにおいて雲雀は、小禽類の中でも特殊で、食用にされるばかりか、狩猟の対象にもなっている。現代では地面に設置される鳥網や、大きな霞網の使用は法律で禁止されているが、狩猟自体は許されている。古代ローマ人は既に炙って詰め物をした雲雀を賞味していた。十七世紀にはライプツィヒの雲雀の評判は確定していた。この地方には豊かな穀物畑が広がっていたので、雲雀は上質でたっぷりした餌を摂ることができたからである。雲雀のパテ（後掲訳注「肉入り小型捏粉菓子」参照）や雲雀の煮凝りは近世の発明。このように雲雀は鶴、鶉、鶉雀とともにヨーロッパの美食家が好む小鳥なのである。
- (69) 杜松キアメツvogel Kiametvogel. 好んで杜松の実を食べる鶴の一種。
- (70) 乳呑み仔豚 Spanferkel. 離乳前（生後六箇月以内）の仔豚の肉は美食家好みである。内臓を抜いてさまざまな詰め物をし、葉味を効かせて天火で丸炙きにするのがよらしい。林檎を口にくわえさせて飾りにするのが普通。挿絵左下の仔豚はこれ。
- (71) 肉入り小型捏粉菓子 Fleischpasteten. 「バステーテ」は、フランス語「パテ」pate、英語「パイ」pieに相当。バターと小麦粉を捏ね合わせたパイ生地を薄く延ばし、これで肉類や果物を包んで天火で焼いたもの。更に詳しくはDMB四〇「四人の楽士」訳注「肉餡頭」参照。
- (72) 金櫃（栗の木）Kasten (gute Kastanien). ドイツ語の音は両者確かに似ているし、栗の実は金貨に似ていなくもないか……。しかし何のことやら分からない。となたかい高教を。
- (73) 郵便馬車の御者 Postillon. 昔の郵便馬車の御者。郵便馬車はあらかじめ替え馬や交代人員が確保されている宿駅から宿駅へ郵便物や旅客を運んだ。ヨーロッパでこのように今日の意味での郵便制度が誕生したのは一五〇〇年以降である。ドイツ、イスパニア、フランス、イタリア、ネーデルランドといった地域において、定期的かつ安全に書簡や小荷物の運搬が行われるべきだ、との需要認識を持ったフランチェスコ・タッソ Francesco Tasso（一四六〇頃―一五一七）を始めとするベルガモ（イタリア北部ロンバルディア地方の都市）のタッソ一族が、王侯と契約を結んで郵便組織網を作り上げた。ただし、十八世紀になるとロシア帝国を含めヨーロッパの各国が郵便制度国営化を進める。英国、スイスなど早くから独自の条例を制定、異なった発展を遂げた国もある。
- (74) 寛袖長上着 Schaub. 十五、十六世紀ドイツで流行した袖の寛い外套状の長上着。しばしば毛皮の襟を付けた。
- (75) 袴 Armbrust. DMB二〇「丸ころと丸ころい二人の粉挽き」訳注「袴」参照。
- (76) ナポリ絹布 Gros de Naples. イタリアのナポリ、あるいはフランスのトゥール産の絹布の一種。

- (77) バレージュ織 Bâregé. 綾織にしない軽い毛織物。バレージュBâregésはフランスの町の名。
- (78) マドラス織 Madras. 絹糸と綿糸の交ぜ織りの更紗。マドラスはインドの港湾都市の名。
- (79) 琥珀織「art. フランス語「タフト」artificus. 光沢のある平織絹。
- (80) 南京縞子 Nankin. 経糸に絹糸、緯糸に綿糸を用いた縞子。中国産の軽い木綿生地（南京木綿）をも言うが、これはヨーロッパでは夏の普段着などに用いたもので、ここでは該当しないだろう。
- (81) アフリカ加禿鶴帽子 Marabouts. Maraboututの訳。「マラブー」は元来イスラム教の一派の隠者・戦士（アラビア語「ムラービト」）のフランス語訳。しかしここでは、鶴の一種である「アフリカ禿鶴」を指す。「マラブー・フト」はその羽根を飾った帽子。「シャポー・マラブー」chapeau marabout は十九世紀半ばあたりからしばらくヨーロッパの服飾文化中心地パリのご婦人方の間で流行したようだ。今日でもこれの羽根飾り付き婦人用三角帽が売られている。
- (82) 極楽鳥 Paradiesvogel. 風鳥の別称、雀目風鳥科の鳥の総称。大きさは雀から鳩くらい。雄は栗色・緑色・黄色など種類の飾り羽を持ち美麗。ニューギニアとその付近の島嶼に約四〇種が分布。
- (83) 蜂鳥 Kolibri. 雨燕目蜂鳥科の鳥の総称。一般に小さく、最小は体長約六センチ。雄は鮮やかな赤・緑・青・褐色などで金属光沢がある。中南米に約三二〇種が分布。
- (84) 玉虫 Brillantkäfer. 玉虫科の甲虫の総称。またその一種で、体は紡錘状で長さ四センチ。金属光沢のある金緑色で、金紫色の二条の縦線がある。美しいので装飾用に使われる。
- (85) 黄金莫臥児 Goldborten. 縞子に似た浮織の織物。経糸は絹糸で、緯糸に金糸を用いたのを金モールと言います。後世では金糸、銀糸を縫り合わせたものを指す。
- (86) 見本市 Messe. 大市。「ライプツィヒの見本市」Leipziger Messe が昔から有名。こういうところへは多くの町から商品が出される。書籍の出版もこうした大市の開催に合わせてた。
- (87) 市 Markt. 町の中心部で開かれる交易場。ドイツにおける都市形成はこれを中心として進化した。ここに店舗を出すには営業許可が必要（もっとも、臨時に催される「歳の市」では原則としてだれでも商いができる、いわば「楽市」だった）だが、のらくら国ではありがたいことにそれも不要。
- (88) 「老ごれば朽ちる」Wenn man alt wird, wird man gartzig. 直訳「歳を取れば穢くなる」。諺自体は男性・女性いずれにも当て嵌まるのですが、「婦人の皆様はさぞかしお憤りでしょう。どうか、この前後、男性・女性をどうぞ適宜に入れ替えてお読みください。
- (89) 一対一の槍試合 Gesellenstechen. 騎士が個人同士で対戦、重武装して戦馬にまたがり、右手に構えた槍を操り、向こうから自らの左側を

- 突進して来る相手を突く競技。集団対集団で行う槍試合とともに中世西欧騎士のお気に入りの遊びである。一対一の槍試合だと、相手の盾（練達であれば面類）を突けるのが通常で、外してしまうのは余程未熟だった。
- (90) グルデン銀貨 Gulden. 十七世紀中葉以降は銀貨であろう。それ以前はグルデン金貨もあったが、その頃にはほとんど消滅していた。一グルデン銀貨はクロイツァー銅貨六〇枚に相当。
- (91) ドッペルターラー銀貨 Doppeltaler. 一八三四年ハノーファー王国で铸造された純度十分の九、重さ三七・一二グラムの銀貨。ドイツの大部分の領邦国家で受容された。ターラー銀貨二倍の価値があった。DMBが発行された一八五七年、南ドイツにおいてだが、一ターラー銀貨は一・七五グルデン銀貨に相当したとか。これで計算すると、睡眠一時間の稼が一グルデン、欠伸一回の報酬は三・五グルデン相当となる。僅かな時間で片付く欠伸の方がずっと単価が高い。いかにもこの国らしいですね。
- (92) 三バツツェン drei Batzen. バツツェン銀貨は十五世紀末スイスのベルンで初めて铸造された。ベルンの紋章である熊(Bäz (= 熊 Bar))の模様が付いているのでこの名がある。一バツツェンは四クロイツァー。三バツツェン銀貨(南ドイツとスイスで流通した)というのもあり、V d Dの「宝物探し」に登場。ここでもこれを指すか。
- (93) クローネ Krone. 一八七一年建国のドイツ(第二)帝国の単位通貨マルクMarkは二七九〇分の一〇〇〇グラム(〇・三五八グラム余)の金含有と制定され、一九二四年まで存在したクローネ金貨は一〇マルクに相当した。ただしベヒシュタイン在世時にはマルクは地方通貨。文脈から察すると、のらくら国ノラクラクニのクローネは金貨だろうが、ターラー銀貨やグルデン銀貨との兌換率は分らない。どなたかご高教を。
- (94) ありとあらゆる番頭さん、お医者先生、その他のトマ方 alletlei Prokura-Dok. und andere toren. 「ゼナートア」Senator(上院議員)、「ディクタートア」Diktator(独裁者)、「レクター」Rektor(校長)、「レクター」Lektor(講師)、「まだまだありそう。英語だけれと」「トランスレイトア」Translator(翻訳家)なんてのもこれに相当しますかね。
- (95) 馬喰の面面相觑 Robräucher. 馬匹売買に携わる稼業の人びとは、商売物売る場合、その年齢やら健康状態やら血統やらについて嘘八百を並べるもの、とやられていた。
- (96) **市の職人衆 die **Handwerksleute. 当時ベヒシュタインが住んでいたマイニンゲンの仕立て屋、靴屋、帽子屋、などなどを指しているのかも。商品の品質や納期についてしゅちゅ嘘はつきり並べて、といった皮肉。
- (97) 田夫野人 Grobian. 「グローブヤーン」は形容詞「グロブ」groß(粗野な)から揶揄を籠めてラテン語の名詞のように作った言葉「グロブヤーン」Grobianusの短縮形。
- (98) 米のお粥 Reisbrei. V d Dの鈴木満訳・注・解題「沈黙の恋」ドイツ人の民話(国書刊行会、平成十九)所収「沈黙の恋」にあるムゼーウス自身の原注によれば次の通り。「たっぷり砂糖を入れた米のお粥は(中略)ことのほか美味しい物として高く評価され、王侯の饗宴に出された。

今に保存されている昔日の古文書が語るところによれば、米のお粥無しでは選帝侯のお床入りの儀は執り行われなかったそう^{レヒ}な。

(99) Cockayne 英語では普通 Cockayne と綴る。

五一 雪白姫

五二 茨姫

五三 白鳥、貼り付け

(100) 炙いた鳩 *eine gebrat[ene] Taube*. 狐で獲られる鳩は勿論、決定版 KHM 二一「灰かぶり」Aschenputtel で、王子に追われた女主人公が

一時的に身を隠す父親の鳩小屋 Taubenhaus のような場所で飼育される鳩も、ヨーロッパでは（伝書鳩を除き）専ら食用に充てられる。卵から孵った雛は四―六週間ですぶしてもよい状態になるが、更に蕎麦やとうもろこしなどを与えて肥育もされる。

(101) 梨の木 *Birnbäum*. 薔薇科の落葉喬木。南ヨーロッパで野生化している樹には二〇メートルにも達するものがある。果実の「ピルネ」Birne（日本では「洋梨」で知られている）はヨーロッパにおいてホメロスの時代から知られていたが、種類が豊富になったのは古代ローマ時代。ドイツ語圏への普及に多大な貢献があったのは修道院である。ドイツでは温暖な西部や南部（特にラインガウ）では最上の果実が採れ、より荒涼とした北部では汁気や滋味に欠け、石のよう^{トカ}だ、とか。

(102) 煙突掃除夫 *Schornsteinfeger*. L・リヒターの挿絵から見ると、これは大人である親方ではなく、これに使われる（体の小さな）少年。中！上流階級の家の三〇センチ×三六センチくらいの煙突（中には一八センチ四方しかないものもあったとか）を這い登って、堆積する煤を掃除しなければならなかった。もっとも、白鳥にくつついた人人は、物語によれば、片手と片手を繋いで引つ張られているはずで、この点でこの挿絵は不適切。

(103) 教会堂開基祭の大市 *Kirchweih*. 実際^{マールクト}に開基祭でなくとも、これに名を借りて、年一回あるいは数回、比較的大きな町村で、近隣の庶民を対象に開かれた家畜の交易、日用品や安価な装飾品などの売買を目的とする市。都市の市と異なり、営業許可は必要でなかった。もっとも店も屋台程度だったわけだ^{ヤメルクト}が、歳の市。

(104) 道化役 *Batzzo*. フランス語の「ベラッス」*Palaisse*（薬布団、道化役、道化師）、あるいは、イタリア語「バイア」*Bia*（からかい、悪ふざけ）から。道化役、道化師。イタリアでは「パツリアッチョ」*patriccio*。パツリアッチョは大きなボタンの付いた、おそろしく幅の広い、ぶかぶかの白い衣装を纏い、白塗りの顔に真っ赤に塗った唇。頭には漏斗状の大きなフェルト帽を被る。

(105) 「道化師」だが、「ばか」「阿呆」の意味もある。

(106) 領地管理官 Amtmann. ドイツの領邦国家の主権者や、その領邦の土地貴族の委託を受けて一定地域の行政に当たる官吏。領地裁判官も兼ねた。

(107) 跳んだりはねたり Capriole. フランス語。魔語。現在ドイツ語では capriole と綴る。ダンスなどでの跳躍。

(108) グルデン金貨 Goldgulden. 西欧では長期に亘り銀貨の単独支配が続いた（イスラム諸国や東ローマ帝国では金貨も流通）が、一五二一年イタリヤのフィレンツェ共和国で初めて金貨が鑄造された。これがグルデン金貨と後にドイツ語圏で称されるようになる貨幣。片面には市の紋章である百合の刻印と「フィオレンティヤ」の文字があったので、「フィオリーノ」（イタリヤ）、「フロリーノ」（フランス）、「フロレーン」（ドイツ）と呼ばれた。十七世紀半ばにはほとんど無くなり、グルデン銀貨に取って代わられる。もともと、ネーデルラント（オランダ）では十九世紀末でも十グルデン金貨があった。

五四 七羽の白鳥

(109) 恵みの娘 Wünschelweiblein. ヤーロップ・グリムは「ヴェンシエルヴァイブ」Wünschelweib（「恵みの女」。Wünschelweiblein はその縮小形）をゲルマン神話のツマルキューレ（Odins Wünschelweibchen）と結び付けて説明しようとした（*Deutsche Mythologie*, Bd.1, S.347ff.）が、H d A の Frau, Weib の項目の執筆者はこれをほとんど否定している（Bd.2, S.172）。この執筆者によれば、「困窮している人間に金や穀物を与えたり貸したりする（ボルクガーベ、おばさん）Frau Borgabe、また（ハボンデの奥方）die Dame Habonde や（恵みの女）das Wünschelweib は（ホレのおばさん）Frau Holle とか（ホルダ）Holda のように、俗信に登場するあの無数の超自然的な妖精形態の一つである」。一般に Wünschel 複合語を形成すると「望みを叶えてくれる」の意になる。民間信仰に登場する、願った物をなんでも出してくれる帽子である Wünschelhut や地下の水脈を発見させてくれる占い棒 Wünschelruthe などがある。

(110) つのこ女 die Jungfrau. いわゆる「白鳥のこ女」Schwanenjungfrau である。どこか異郷から、あるいは異界・天界から白鳥の姿で水辺に飛んで来て、そこで人間になって沐浴する。白鳥になる道具（つづ）は黄金の鎖。しばしば羽衣。面纱のこともある。奪われると、故郷へ戻れないので、それを奪った男の意のままにならざるをえない。

(111) その黄金の鎖を奪ってしまう。こうした指図ができたのは、この女が、単なる嫁憎しの姑なのではなく、さまざま秘密に通じた魔女的的存在であるためだろう。騎士の妻の母親であるのかどうかはかなり疑問。しかし、れっきとした血縁という設定でも、昔話ではこの物語の結末のようになることはありうる。

(112) 預言者の箴言 Prophezenspruch. 「だれかある人に穴を掘る」jn. eine Grabe graben、すなわち「自分の没落の仕度をする」というドイツ

語の慣用句は、旧約聖書箴言二十六章二十七節によって一般的になった。いわく「坑を掘るものは自ら之に陥らん、石を転しあぐる者の上にはその石まろびかへらん」。「預言者」とはソロモン王のこと。「箴言」は「ソロモン王の箴言」とされるので。

(113) 「人を呪わば穴二つ」 In die Grube fällt wer andern sie gegraben. 直訳すれば「他人に穴を掘る者は自分自身が中へ落ちる」。一般的には Wer andern eine Grube gräbt, fällt selbst hinein.

五五 あばらや住まいの夫婦者

(114) あばらや Essigkrug, Eschkrugとも。本来は「酢を入れる壺」。類話のKHM一九「漁師とその妻の話」Von dem Fischer un syner Fru (低地ドイツ語)では「小便壺(尿瓶)Pissputtとなつてゐる」。

(115) 『お日様の光の中の黄金の小鳥／金剛石の館の黄金の小鳥／どろにでもいる黄金の小鳥』Goldvöglein im Sonnenstrahl / Goldvöglein im Demantsaal / Goldvöglein überall. 稚拙だが韻を踏んでいる。このような呪文あるいは唄の存在は元来語り物だった昔話では重要。

(116) 百姓屋敷 Bauernhof. 大きな農園を経営している農民は、数人、あるいは十数人の男女の使用人を雇い、牛、馬、豚、羊、鶏、鶯鳥、家鴨など家畜・家禽もたくさん飼育、広大な屋敷(母屋、使用人の住む長屋、納屋、脱穀場、厩舎、鳥小屋、その他付帯施設、井戸のある中庭から成る)を持っていた。江戸時代の日本語「百姓屋敷」に相当。DMB二五「婚礼の客お三方」訳注「百姓屋敷に飼われている犬が三匹」をも参照。

(117) 女房がやいのやいのと責め立てて放っておかなかつた die Frau gar nicht nachgelassen hat mit Dringen und Drängen. 前述のKHM一九では、妻が常に欲求不満で、無欲な、あるいは無気力な亭主を駆り立てるが、この話ではどこでようやくそうした描写となる。

(118) 皇帝 Kaiser. 神聖ローマ帝国皇帝。

(119) 教皇 Papst. ローマ教皇、法王。英国国王ヘンリー八世の教会離脱(英国国教会の創立)、新教諸派の台頭までは西欧における宗教上の最高権威者。俗権の最高権威者が神聖ローマ帝国皇帝だった時代はこれとのせめぎ合いが頻繁に起こった。

(120) あんたたち、あばらやの中で朽ち果ててしまふがいい。 das ihr versauern müßt im Essigkrug! 原文はこのように斜字体で強調されている。直訳「おまえたちは酢壺の中で酸っぱくなつてしまふがいい」。

(121) これはどんなに恵まれても決して満足できない人たちへの教訓です Das ist eine Lehre für solche, die nie genug bekommen können. シヤルル・ペロー著『過ぎし昔の物語あるいはお伽話、ならびに教訓』の話には最後に必ず教訓が付いているが、昔話には普通そんなものは無い。

五六 小鼠ザンパール、あるいは動物たちの信実の友情

(122) 龍涎香 Ambra. 普通 Amber と綴る。「アンバー」。ある種の状態の抹香鯨から採れる柔軟、蠟質、すぐれて香気が麗しく芳しい物質。煉香、高価な蠟燭、頭髮用香粉、香膏などの香料に用いられた。麝香鹿から採れる麝香に似た典雅な芳香がある。

(123) 大鷹 Habicht. 鷹目鷹科。雌は体長七〇センチ、翼開長一三〇センチ。雄は体長五五―五八センチ、翼開長一一二―一一五センチ。背中は灰青色がかつた暗褐色、腹部は灰黒色の横斑が全体に入った白。黄色い脚。北アフリカ、ユーラシア大陸、北アメリカの温帯、亜寒帯南部で繁殖。ずんぐりした胴体、強く彎曲した嘴、尾の半ばに達する翼を持つ。巧妙な捕食者で、生きた獲物しか食べない。鶴ぐらいの大きさの小鳥が主だが、鳩、鴨、鳴、兎なども。飛んでいる鳥を襲うことが多いが、藪や木の枝の中で待ち伏せしたり追ったりすることもある。

(124) 鷓鴣 Rebhuhn. 森を避け、地面に定住する雉の仲間の中でヨーロッパで最も知られた種類。鷓鴣目雉科の鳥。鷓鴣の類でそれよりやや小さい。日本では「ヨーロッパ山鶉」ともいう。ずんぐりした胴体、短い嘴、短い翼を持つ。体長二六センチ。北緯六五度までのヨーロッパ、アジアに棲息。藪のある平地を好むが、森林周辺、葡萄畑にも棲む。餌は植物質。その肉は鴉鳥の中で最も美味な物の一つだそう。

五七 男と蛇

(125) 手出ししないで Sib du nur frei Geleit. 「安全通行権を与えよ」。「安全通行権を与える」Freies Geleit geben とは、敵対する相手の使者などに、こちら側の武装兵を護衛として随行させ、安全な通行を保障すること。

五八 雄鶏と狐

(126) 莊園 Meierhof. 「マイアー」Meier (王侯や大貴族、大修道院の所有する農園の管理者、莊官、庄司。莊園領主の家臣。農地の賃貸契約をしているに過ぎない借地契約人 Pächter とは異なる) によって管理されている農園。

(127) サンパール、おいらの女友だち Freundin Sambar. 「鼠」Maus はドイツ語で女性名詞なので、「女友だち」となるわけ。

(128) コラクス Korax. 亀の名。しかし、ラテン語「コラクス」corax は corvus と同様「鴉」「大鴉」のことである。

(129) 鴉の女友だちの亀 seine Freundin, eine Schildkröte. 「亀」Schildkröte はドイツ語で女性名詞なので、「女友だち」となるわけ。

五九 鼠ザンパールの生涯の物語

(130) 巡礼仲間 Walbrüder. ある巡礼の旅での道連れ。

(131) 矢と弩 Pfeil und Armbrust. 弩については DMB 二〇「ころころと丸っこい二人の粉挽き」訳注「弩」参照。ただし、これで射出する短

く太い筋は普通「ボルツェン」Bolzenと称し、「プファイル」Pfahlではない。

(132) 牡ののろ鹿 Rehbock DMB一四「黄金の牡ののろ鹿」訳注「牡ののろ鹿」参照。

(133) 山刀 Weidmesser 鹿猟などに用いる獵刀「ヒルシユフェンガー」Hirschjägerより刃が短く、幅が広く、頑丈な揷え。

(134) 蓄えがあれば殿様 Vorrat ist Herr. 直訳すれば「備蓄はご主人」。

(135) ギュルデン金貨 Goldgulden. 「グルデン金貨」Goldguldenと同じ。DMB五三 白鳥、貼り付け」訳注「グルデン金貨」参照。

(136) 親友たつてごやつて時には大して当てにはならぬもの。切羽詰まった境遇ならばいよいよもって頼みにやならぬ Gute Freunde in der Not gehn funfundzwanzig auf ein Lot: soll es aber ein harter Stand sein, so gehen fünf auf ein Queinteln. 直訳すれば「困った時の親友たちは二十五」この数は百あるいは千にも置き換え得る」人で一ロートに当たり、万一厳しい状況ならば、五」この数ももっと大きな数に置き換え得る」人でほんの一クヴェントに当たる。「一ロート」も「クヴェント」もドイツの昔の重量単位だが、共にごく僅か。一ロートは一六グラムほどで、一クヴェントはその四分の一か十分の一。

(137) 牡角鹿 Hirsch DMB四五「魔女と王様の子どもたち」訳注「殿様角鹿」参照。

(138) 御前様 edler Herr. 前掲注参照。

六〇 兎と針鼠の競走

(139) 針鼠 Igel. 食虫目針鼠科の獣、体長二〇―三〇センチ。体の背面全体に強い剛毛が密生しており、敵に襲われると体を丸め、針を立てて防禦する。豪猪（デューアウチ）鬣類（ギョウリ）豪猪科の獣、主に熱帯に棲む）に似るが、針が短い。体側と腹面の毛は柔らかい。雑食性。ヨーロッパおよびアジア大陸の各地に産し、種類が多い。（日本では化石が発見されているものの、歴史時代以降は棲息していなかった。ただし現在は移入種が見つかる）。ヨーロッパ針鼠は北緯六〇度までのヨーロッパの大部分に棲息、著しい高度の山地でも生活する。つまりドイツ語圏ではまことにありふれた存在。ずんぐりした胴体、豚のように突き出た鼻、大きな耳、反った短い脚を持つ。林檎が熟して地面に落ちると、針鼠が林檎の上に仰向けに転がり、幾つも針に刺して起き直り、かくして背中の林檎を巣穴に持ち帰る、などといった微笑ましい伝承もあり、絵本、玩具、木製や陶器の置物などでその愛嬌のある姿は民衆に親しまれているが、敬意の対象とは程遠い。もともと民間信仰によれば、その脂を肌を擦り込むと薬効がある、という（VdB所収「ローラントの従士たち」に登場するピレネー山地に棲む極老の巫女は古い羊皮紙の巻物みたいな肌を針鼠の脂をせっせと塗り込んでいる）。一九二五年刊のドイツの百科事典『マイアース・レクシコン』Meyers Lexikonに拠れば、肉は特にロマ人（いわゆるジプシー。ただし、これは差別語）が食用とするそう。また、第二次世界大戦以前のある英国人の随筆に拠れば、彼らロマ人は、流浪の旅路における野営の場合、調理器具が無いと、頭と内臓を取っただけの針鼠を皮付きのまま粘土でくるみ、団子状にして焚き火に入れる（中国の

「叫化(チイバ)鶏(チキ)」の調理法は遙かに洗練されているが加熱原理は同一)。焼き上がったら粘土を取り除く。そうすると皮も粘土に付いて剥げ、綺麗な白い肉が現われる、とある。

(140) 蕎麦 Buchweizen. 蕎麦科の一年生草本。高さ五〇―六〇センチ。秋になると花茎を出し、多数の白い花を繖状につけ、三稜形の黒い皮の果実を結ぶ。果実の胚乳で蕎麦粉を作る。極めて瘠せた砂地でも育つので、十九世紀ドイツ語圏では、果実収穫のため、または、クローバーや紫うま(こやし)の代わりの青草飼料あるいは緑肥としても栽培された。花は蜂に豊かな蜜を提供する。果実は専ら粥(かゆ)として、また、豚や家禽の肥育飼料として用いられた。おそらく中国原産で、南ロシアやシベリアでは野生のものが見受けられる。最初は地中海沿岸で知られるようになり、次いでアラブ系諸民族によって広まったものであろう。現在はヨーロッパ全土(ただし南欧では僅少)に広まっている。ロシアの蕎麦粥やブルターニュ地方(フランス北西部)の蕎麦粉の平焼き菓子(クレープ)などが蕎麦を食材とする素朴な郷土料理の例として挙げられよう。

(141) 針鼠(チヌ) Swinegel. 「シュヴァインエーゲル」は「イーゲル」に当たる北ドイツ方言。「シュヴァイン」Schwein(豚) + 「イーゲル」Igelから。この物語では題名を除き、この語が用いられている。

(142) 瑞典(スウェーデン)蕪(カブ) Steckrüben. 蕪と同じく油菜科だが別種。十七世紀にスウェーデンでキャベツと蕪を掛け合わせて作られた、という。根は蕪状に肥大し、肉質は緻密で白または黄色。寒冷地で良く育つ。食用・家畜飼料として北欧・ロシアはもとより、北ドイツ、スコットランドなどで栽培される。貯蔵性に優れているのでこの地域の冬の重要な野菜の一つ。皮が厚く肉質が固いので蕪より南瓜に似た手触りであり、食味も蕪より南瓜にいくらか類似。肉類やベーコン、ハム、ソーセージなどと煮込み揚げっこう旨いが、油脂を用いず、しかも単品で調理したとなると、美食家向き(カブ)の食材とは到底申せまい。英語「ルタバガ」rutabaga、和名蕪葉牡丹(カブ)。

(143) 樺木(カハ)の茂み Schlehbusch. 「樺木」Schlehe, Schlehdorn, Schwarzdorn は桜属の低木喬木。高さ約五メートル。葉は楕円形。秋に白い小さな花が咲く。青くて丸い桜桃大の果実を付けるが、これは長いこと苦いままで、ドイツ語圏では霜が到来する頃(日本では翌春)になって黒く熟し、ようやくいくらか甘くなる。ヨーロッパやアジアの森林周辺や乾燥した丘に見受けられる。生垣などに向く。

(144) 玉菜 Kohl. 油菜科の越年生草本。ヨーロッパ原産。畑に栽培。葉は厚く、無毛で緑白色。中央の葉は密に重なって、大きい球を成す。結球した葉は食用。和名甘藍(カブ)玉菜。

(145) ルイエ金貨 Luedor. フランス語「ルイドール」lousdor(ルイエ金貨)の北ドイツ訛り。「ルイエ金貨」はルイ十三世・十四世・十五世・十六世の肖像の付いたフランス王国の金貨。最初一〇リーヴル(一〇フラン)、一六五二年以降二二リーヴル、一七二六年以降二四リーヴルに相当。最後に一七九五年以降二〇フラン金貨(一八〇三―一八一四年では「ナポレオン金貨」)に取って代わられた。このナポレオン金貨のことを指すこともある。しかしドイツ語圏では、ルイエ金貨と似た基準で十八・九世紀にドイツとデンマークで鑄造された五ターラー金貨が一般にルイエ金貨あるいはピストーレ(元来イスパニア王国で鑄造された金貨)とも呼ばれた。貨幣に刻印された肖像の君主名で呼ばれもした(たとえば「フ

リードリヒ金貨」Friedrichsdor. のように)。

(146) ^{シネアプス}火酒 Schnaps. 葡萄・林檎・桜桃・桃・梅・杏・梨などの果実、苺・木苺・草苺類、穀類、玉蜀黍^{キウモウコシ}、じゃがいもなどを原料とする蒸留酒。ブランドヴァイン Brantwein。コロン Korn。ただしコロンは穀類、じゃがいもからの蒸留酒を指す。

(147) おかみさんとしちや針鼠^{はりねずみ}どんをどうすることでもぢやせん Was sollte den Swingel seine Frau machen? KHM 一八七の原文ではこうなっている。Was soll den Swingel sien Fro maken?。いずれでも主語は後に出て来る所有形容詞+名詞の seine Frau (sien Fro) の方。「針鼠をおかみさんはどうしたらよかったですよ」の意。定評ある金田訳では「はりねずみはおかみさんをどうするつもりでしょうか」と主語と四格目的語を取り違えた誤訳(金田訳の文法的誤訳は珍しい。これも北ドイツの方言から直接訳さざるをえなかったからである)になっている。野村法訳では「こう言われて、はりねずみのおかみさんに、どうすることができましたよ」(『元訳グリム童話集』、ちくま文庫、ちくま書房、二〇〇六)と正しい。

(148) それで上から走り出す Und von oben fangen wir an zu laufen. この長細い畑はなだらかな丘の(おそらく日当たりの良い南)斜面に作られていて、上から下へ畝^{うね}が何十筋も立てられており、畝と畝の間が溝、すなわち「畝合い」になっている。

(149) 二人とも死んでなけりや、まだ生きとるがな wenn sie nicht gestorben sind, leben sie noch. 「彼らがまだ死んでいなければ、まだ生きている」はドイツ語圏の昔話^{メルトイユ}の結びにしばしば使われる文句。

(150) ブクステフェーデの原 Buxtehuder Heide. 「ブクステフェーデ」Buxtehde はドイツ西北部ニーダーザクセンに現存する、ハンブルクに近い由緒ある小都市(ブレーメン司教区に属する都市として二七三成立)の名だが、北ドイツでは、中部ドイツや南ドイツでの「ドゥムスドルフ」Dummsdorf、「ディンクスキルヒェン」Dingskrichen、「ヒンタートゥップフィンゲン」Hintertupfingen などと同様、あらゆる種類の奇妙なことが起こり得る、どこやら遙か遠方にある町の名として慣用句などに用いられる。「ブクステフェーゼン」Buxtehuseu とか「ビュクセンフェゼン」Buxehuseu のように変形していることもしばしば。この物語でこうした固有名詞が使われていることから、読者は、この競走ばかりか、その舞台となった地名も作り事だ、と分かるわけ。

六一 ツイテリンヒェン

(151) クリステインヒェン Christinchen. 「クリステイーネ」Christine の縮小形。

(152) ツイテリンヒェン Zitterinchen. 「震るふるちゃん」くらいか。「ツイテリン」zittern は「震える」の意。

(153) もう歳を喰った行かず後家 alle Jungfer. 年取ったオールドミス。

(154) だれかの肖像画^{ポルトレート}を懐から出しては接吻^{くちゅう}する ein Portrait aus den Busen zog und küßte. この肖像画は金銀などで拵えた小箱(ロケット)

に入れた細密画であることがこれで分かる。

(156) 嘘つきの絵の方は暖炉の煙出しに吊るされた das betürliche Bilnis ließ er in den Rauchfang hangen. 煙突を通る煙で燻して真っ黒けにしちまおう、というわけ。実際塩漬けにした豚や羊の腿肉などをこのようにして燻製にしたりした。

(156) 女の水の精たち Nixen. 「ニクセ」Nixeは、ドイツ語圏の河川や湖、池に棲む、多く長い髪をした美しい女である。人間の若い男を水中に引き込んだりするものもいるし、なにせ水性だから気紛れ・奔放ではあるが、男の水の精とは違ってどこか憎めない存在（大ロシアの同族は残酷なようだ。スラヴ圏でも南ロシアやウクライナは別だが）。陸に上がることもあるが、その場合その裳裾はじつとりと濡れている。

六二 灰かぶり

六三 三つの贈り物

(157) 亜麻布織り工 Leinweber. 植物の亜麻 Lein, Flachs の繊維を原料とする糸で布を織る職人・親方。亜麻から作られた布はライネン布（フランス語リニエール linère。これが訛って日本語「リンネル」）で、古くはリンネン Linnen とよ。

(158) 金持ちの大学生 reiche Studenten. 近世まで、ヨーロッパで大学に行ける青年は生家がますます富裕だったはず。稀にしかるべき後援者の助けで貧しい若者が大学生活を送れたことはあった（十九世紀デンマークの作家ハンス・クリステイアン・アンデルセンはこれに当たる）が。また、大学生たちは講義が行われない夏にはよく旅をした。「遍歴の大学生」wandernder Student は DS にも登場する。

(159) ターラー銀貨 Taler. 近世西欧の各地で信頼された貨幣である。一七九五年の銀貨だと直径四センチもある。ちなみに V d D の「リユーベツァールの物語第参話」では、実直なお百姓ファイトどんが、山の精リユーベツァールが貸してくれた百ターラーで、耕地を一枚、干し草刈り場を一箇所買い込み、これを基にしてすっかり身上を恢復、裕福に成る、との設定。また、譚詩「レノーレ」Lenore（一七七四）で有名な詩人ゴットフリート・アウグスト・ビュルガー Gottfried August Bürger（一七四八―九四）は、一七七二年ハノーファー選帝侯国内のある領主の許で領地管理官となるが、年俸百五十ターラー、別に住宅手当三十ターラー、というもの。牧師を職とした彼の父は年収百六十ターラーだった由（ビュルガー編・新井皓士訳「ほらふき男爵の冒険」、岩波文庫、一九八三、解説に拠る）。

(160) 襤褸きれ買い Lumpensammler. 古布の回収業者。中国を発祥とする製紙技術はイスラム文化圏を経由してヨーロッパに伝播、一四四四年イスパニアに、一二七六年イタリアに、十六世紀にはヨーロッパ全土に製紙工場ができた。製紙原料は古布、すなわち襤褸。最初は亜麻、十五・六世紀には木綿も加わる）だった。従って専門の回収業者が存在したわけ。（丸太を磨り潰した木材パルプは一八四〇年ドイツにおいて、強度の強い化学パルプは一八五一年英国において発明された。これ以降ヨーロッパにおいては木材を原料とする紙の大量生産が可能となった）。

それまでは古布が主原料、皮革の破片を混ぜたものもあった、というが。日本の紙、すなわち和紙では、楮、三椏、雁皮のような樹木の繊維で製紙が行なわれて来たが、古紙（故紙、反故紙）は「浅草紙」（江戸）・「西の洞院紙」（京都）・「漉き直し」（大坂）のように再生紙とされたから、江戸時代には「紙屑買い」「紙屑問屋」のような専門業者があった。古着は「古手買い」「古手問屋」の手に渡ると、洗い張り、染め直しなどがされて、衣装として再利用されることが多かった。ただし、明治八（一八七五）年東京府下王子村で稼動を開始した「抄紙会社」「王子製紙」の前身の工場では襦袢を製紙主原料として洋紙を製造した。

(161) クロイツァー銅貨 Kreuzer. 六十クロイツァーで一グルデン。DMBが発行された一八五七年、南ドイツにおいてだが、一ターラーは一七五グルデンに相当したとか。この計算だと百ターラーは一萬五千クロイツァーになる。

(162) 灰の引き取り人 Aschensammler. 薪を燃やした灰、つまり、木灰の回収業者。日本では「灰買い」などと呼ばれ、明治時代でもなお荷車を曳いて甕の灰を買って歩いた（ただし代価は銭ではなく、マッチの小箱が普通だったとか）。木灰は日本でもヨーロッパでもかつて様々な用途に利用された。ヨーロッパの場合、アルカリ（アラビア語でまさに「灰」という意）成分に富む木灰が石鹼製造に必要だったのはその一つ。また、水と混ぜ、その上澄みで木の板を磨いたり、布類を洗ったりすると、綺麗に脂汚れが取れる。これを「灰汁洗い」という。

(163) おんぼろ浮浪人 Lumpen. 「ルンプ」Lump は「襦袢を着た人」「惨めな人間」。

(164) 牝牛に肉豆蔻役には立たぬ Was nutzt der Kuh Muskate? 「猫に小判」「豚に真珠」。

(165) 一プフント四から五 ein Pfunder vier bis fünf. 現代ドイツの度量衡では七〇〇〜七五〇グラム。

六四 神様はどこにでも

(166) ゲルゲル Gergel. 男の名ゲオルク Georg の訛った縮小形。ゲルク Gerg, ゲルゲ Gergとよ。

(167) リースヒェン Lieschen. 女の名エリーザベト Elisabeth の一般的な縮小形。

(168) 甘い甜菜糖蜜 der süße Rübensaft. 「リュューベンザフト」Rübensaftとは、甜菜、つまり砂糖大根の汁を煮詰めて濃厚にしたもの。「リュューベンクラウト」Rübenkrautとも。とりわけ甜菜栽培地帯ではパンに塗って食べる。今日の甜菜は糖分（甜菜糖）を一八二〇パーセント含有し、これを原料としての砂糖生産量は蔗糖のそれに次ぐ。十八世紀末頃飼料用燕の改良種から生まれた。

(169) 梨 Birne. 日本と言う「洋梨」。冷暗所で柔らかく熟成したのを食べると、とても甘い。DMB五三訳注「梨の木」をも参照。

(170) 乳脂 Rahm. クリーム。DMB一一「黄金のマリアー」と瀝青のマリアー 訳注「乳脂」参照。

結びに一言。

四六「修道僧と小鳥」の訳注「神の御前にては千年は一日のごとく、また一夜警時のごとし」、および、「逃竄せし」では、またまた今回も、カトリック坂出教会（香川県）司祭土屋和彦尊師のご高教に与った。聖務ご繁忙でいらっしやるにも関わらず、閑人の閑文字のあだこうだに辛抱強くおつきあくださったことは全くもって忝い限り。ただし、この訳注におけるキリスト教関係の訳注となると、訳者の独断で解釈、訳語を選択したことの方が専らだったことを改めてお断りしておく。また、キリスト教関係に限らず、さまざまな方から貴重なご示唆・ご教示を戴いても、そっくりそのまま訳注に反映させることはなかった。言うまでもないが、訳責はこれまでも今後も全て鈴木一個に帰せられる。

また、五四「七羽の白鳥」の訳注「恵みの娘」関連記事はひとえに、これがHdAにあることをご教示くださったハンス・イエルク・ウター教授のお蔭である。

五六「小鼠ザンバル、あるいは動物たちの信実の友情」解題に記したヨハンネス・デ・カプア著す『パンチャタントラ』ラテン語訳タイトルの邦訳については、青山学院大学文学部フランス文学科の西村哲一教授に詳細なご教示をたまわった。その至れり尽くせりの内容を同所に僅かしか反映できなかったのはまことに残念である。

六三「三つの贈り物」の訳注「襪襦きれ買い」の製紙関係記事の半ば近くは、中学、高校、大学を通じての同期の友人土屋正彦兄のお蔭。土屋兄は十条製紙（現日本製紙）株式会社にて技術者・研究員として多年奉職、その道の権威である。もともと、「日本の紙」以降のくだりは偏に鈴木木の責任に帰する。

土屋さん、ウターさん、西村さん、土屋兄、貴重なお時間を割いてくださり、どうもありがとうございました。かく

も師に恵まれたことを今回また心から感謝いたします。

なお本稿は、同じく鈴木満訳・注・解題「ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著『ドイツ昔話集』（一八五七）試訳（その二）」（『人文学会雑誌』第四〇巻第四号、二〇〇九・三月）、「試訳（その二）」（『人文学会雑誌』第四一巻第一号、二〇〇九・七月）、「試訳（その三）」（『人文学会雑誌』第四一巻第二号、二〇一〇・一月発行）と共に、西村淳子武蔵大学文学部教授を代表とする武蔵大学総合研究所プロジェクト「ヨーロッパ人の外国語力格差と日本における多言語多文化教育」の一環となる「昔話ないし語りの言語教育的効果」考察に寄与する研究である。試訳は、本稿である（その四）（『人文学会雑誌』第四一巻第三・四合併号、二〇一〇・三月発行）に次いで、（その五）（『人文学会雑誌』第四二巻第一号、二〇一〇・七月発行予定）で一応完成する予定で、（その一）、（その二）、（その三）、（その四）を併せ全体としてこの研究を構成する。当該プロジェクトにご高配を戴いた関係各位および諸機関に深甚な謝意を表す所である。別して代表としてこのプロジェクトを推進させておられる敬愛する同僚西村教授にはひたすら感謝あるのみ。

西村さん、まことにありがとうございます。

本稿が掲載されている「人文学会雑誌」第四一巻第三・四合併号は「人文学会四〇周年記念号」である。以下は私事に亘って恐縮だが、「武蔵大学人文学会」の母体「武蔵大学文学部」が創設されてから九四年経過した一九七三年四月に助教として着任、以来三七年近く江古田に通い続けた身にとり、この記念号の発刊はなんとも感慨深い。一九五二年四月に武蔵中学に入学、一九五八年三月に武蔵高校三三期生として卒業したことも考えると、合わせて四

三年余、七〇年の来し方の六割強をここで過ごしたことになる筆者は、武蔵学園に心から御礼申し上げるとともに、その行く末に幸多かれ、と切に冀う。